

小島・柳原遺跡群

みのちましますいちげんじんじゃ
水内坐一元神社遺跡 (5)

市道柳原東西線地点
柳原総合市民センター地点

なか また
中 俣 遺 跡 (4)

市道柳原東西線地点

2010年3月

長野市教育委員会

序

遺跡や遺物などの埋蔵文化財は、「土地に刻まれた歴史」ともいわれるように、郷土の成り立ちと文化を理解するうえで欠くことのできない貴重な遺産です。肥沃な善光寺平の中央部に位置する長野市においては、その悠久の歴史を物語るように、現時点で700箇所を超える遺跡が周知されていますが、各種の開発事業に伴って現状での保存が困難となったものについては事前に発掘調査を実施し、記録保存という形で後世に伝えていく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第125集として刊行いたします本書は、市道柳原東西線道路改良事業及び柳原総合市民センター建設事業に伴って実施いたしました一連の埋蔵文化財発掘調査の報告書であります。発掘調査は、両事業の用地取得及び工事スケジュールに合わせて、平成15年度から19年度まで断続的に実施され、河川跡など予想外の発見も含む貴重な遺構と遺物が出土することとなりました。その成果を永く保存するとともに広く公開することを目的とし、本書にその記録を所収してここに公開するものであります。地域史解明の一助として、多くの皆様にこの調査成果をご活用いただければ幸いに思います。

最後になりましたが、埋蔵文化財保護に対する深いご理解とご協力を賜りました関係各位並びに、発掘作業に際して多大なご尽力をいただきました地元の皆様に厚く御礼申し上げます。

平成22年3月

長野市教育委員会
教育長 堀内 征治

例 言

- 1 本書は、長野市が施行する「市道柳原東西線（柳原202号線）」道路改良事業及び「柳原総合市民センター」建設事業に先立ち、記録保存を目的として平成15年度から19年度にかけて実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書である。
- 2 発掘調査の実施については、起因となった両事業を主管する建設部道路課及び教育委員会生涯学習課と、埋蔵文化財保護を主管する教育委員会埋蔵文化財センターとが協議調整し、発掘調査に関する直接の業務は埋蔵文化財センターが担当した。
- 3 両事業に伴う発掘調査の所在地と遺跡名は次のとおりである。また、発掘調査の位置と範囲を限定するため、遺跡名に付して地点名（起因事業名）を使用することとする。本書及び遺物注記等に用いた各々の略記号は次のとおりである。

起因事業名（＝地点名）	所在地	遺跡名	略記号
「市道柳原東西線」道路改良	大字小島字三ツ家沖804－4他	水内坐一元神社遺跡	K Y M O－Ⅲ
	大字柳原字宮北2260－20他	中俣遺跡	K Y N－MK
「柳原総合市民センター」建設	大字小島字三ツ家沖822－3他	水内坐一元神社遺跡	K Y M O－Y C

- 4 調査年別の調査期間及び調査面積は次のとおりである。また、報告書作成へ向けての本格的な整理作業は平成19～20年度に実施した。

調査年	遺跡・地点名	略記号	区	調査期間	調査面積
平成15年 (2003年)	水内坐一元神社遺跡 市道柳原東西線地点	K Y M O－Ⅲ	A	2003.10.8～12.19	790㎡
			D		340㎡
平成16年 (2004年)	水内坐一元神社遺跡 市道柳原東西線地点	K Y M O－Ⅲ	B	2004.3.15～6.18	230㎡
			C		540㎡
平成18年 (2006年)	中俣遺跡 市道柳原東西線地点	K Y N－MK		2006.11.14～12.15	190㎡
平成19年 (2007年)	水内坐一元神社遺跡 柳原総合市民センター地点	K Y M O－Y C		2007.10.5～12.4	1,420㎡

- 5 本書での資料提示の要領は次のとおりとした。
 - ・調査概要として、Ⅲ章で調査地点と検出遺構の概要をまとめた。
 - ・遺構について、Ⅳ章で個別に記述し、実測図、写真及び一覧表を掲載した。
 - ・遺物について、Ⅴ章で個別に記述し、実測図、写真及び一覧表・観察表を掲載した。
- 6 出土遺物及び調査に係る諸記録は、長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）で保管している。

目次

例言・目次	
I 調査経過	V 遺物
1 調査の契機…………… 1	1 土器…………… 62
2 調査の経過…………… 3	2 石器…………… 63
3 調査の体制…………… 5	3 石製品…………… 64
II 遺跡と環境…………… 6	4 土製品…………… 64
III 調査概要	5 玉類…………… 64
1 調査地点と検出遺構…………… 10	6 金属製品その他…………… 64
2 埋没河川による地形区分と遺構分布…………… 13	[遺物一覧表] [遺物観察表]
IV 遺構	[遺物実測図] [遺物写真]
1 竪穴住居…………… 14	VI 自然科学分析
2 掘立柱建物…………… 15	1 市道柳原東西線地点埋没河川…………… 111
3 土坑溝…………… 15	2 柳原総合市民センター地点埋没河川…………… 134
4 周溝墓他…………… 15	3 市道柳原東西線地点掘立柱建物…………… 153
5 埋没河川…………… 16	抄録
[遺構一覧表] [遺構実測図] [遺構写真]	

挿図目次

図1 発掘調査の位置…………… 1	図28 KYMO-III SB4 実測図…………… 44
図2 遺跡群の位置…………… 7	図29 KYMO-III SB3・5 実測図…………… 44
図3 発掘調査地と字名…………… 7	図30 KYMO-III SB8 実測図…………… 44
図4 小島柳原遺跡分と発掘調査地点…………… 9	図31 KYMO-III ST1 実測図…………… 45
図5 調査地区全体図…………… 11	図32 KYMO-YC SX1 実測図…………… 46
図6 遺構分布図…………… 20	図33 KYMO-III SZ1 実測図…………… 47
図7～ 遺構全体図市道柳原東西線地点…………… 21	図34～ 土器実測図KYMO-III、KYN-MK…………… 68
図10～ 遺構全体図総合市民センター地点…………… 26	図46～ 土器実測図KYMO-YC…………… 80
図12～ 遺構実測図KYMO-III…………… 28	図49～ 石器実測図…………… 93
図21～ 遺構実測図KYN-MK…………… 37	図51～ 石製品実測図…………… 95
図23～ 遺構実測図KYMO-YC…………… 39	図53 土製品玉類実測図…………… 97

表目次

表1 遺構検出状況（種類別）…………… 10	表4 遺物一覧表…………… 65
表2 遺構検出状況（時期別）…………… 10	表5～ 土器観察表…………… 87
表3 遺構一覧表…………… 17	表7～ その他遺物観察表…………… 108

掘調査を実施する計画とした。予備調査の結果、敷地内の全域において埋蔵文化財包蔵が予想されたものの、発掘調査の対象は市民センター本体の建物範囲2,000㎡に限定し、駐車場等のその他の範囲については盛土造成することによって地下遺構を保護し、現状保存を図る計画とした。9月付けで土木工事等のための埋蔵文化財発掘の通知書（文化財保護法第57条の3第1項）を長野県教育委員会宛に提出し、10月に本調査に着手した。



発掘調査地周辺の空中写真（東より）

2 調査の経過

調査年度	遺跡・地点名	略記号	区	調査期間
平成15年度	水内坐一元神社遺跡・市道柳原東西線地点	K Y M O - Ⅲ	A・D C	2003.10.8~12.19 2004.3.15~3.26
平成16年度	水内坐一元神社遺跡・市道柳原東西線地点	K Y M O - Ⅲ	B・C	2004.4.5~6.18
平成18年度	中俣遺跡・市道柳原東西線地点	K Y N - MK		2006.11.14~12.15
平成19年度	水内坐一元神社遺跡・柳原総合市民センター地点	K Y M O - Y C		2007.10.5~12.4

水内坐一元神社遺跡・市道柳原東西線地点

【平成15年度】

- 10月8日 A区、重機による表土除去を開始。
 10日 作業員による遺構検出に着手。
 23日 D区、重機による表土除去を開始。
 29日 D区、A区と平行して遺構検出に着手。
 30日 A区、遺構測量。
 11月6日 A区、空中写真撮影。
 10日 柳原公民館主催による遺跡見学会。
 A区、埋没河川について、自然科学分析を
 目的とした土壌のボーリング調査を実施。
 12日 D区、遺構測量。
 14日 A区、調査に係る現地作業を終了。
 12月4日 D区、遺構測量。
 17日 D区、遺構測量。
 19日 D区、調査に係る現地作業を終了。
 1月7日 D区、空中写真撮影。
 3月15日 C区、重機による表土除去と作業員による
 遺構検出に着手。
 26日 C区、作業を中断し、年度内調査を終了。



柳原東西線地点・D区（西から）



柳原東西線地点・D区（東から）

【平成16年度】

- 4月5日 C区、前年度に引き続いて重機による表土
 除去、作業員による遺構検出作業を継続。
 26日 C区、遺構測量。
 5月6日 柳原公民館主催による遺跡見学会。
 13日 C区、空中写真撮影・遺構測量。
 18日 B区、重機による表土除去を開始。
 24日 B区、表土除去を完了、遺構検出作業着手。



柳原東西線地点・C区（西から）

- 6月1日 B・C区、遺構測量。
- 17日 B区、空中写真撮影・遺構測量。
- 18日 B・C区、記録作業を終了、機器材を撤収、調査に係る現地作業を完了。

中俣遺跡・市道柳原東西線地点

【平成18年度】

- 11月14日 重機による表土除去を開始。
- 20日 作業員による遺構検出作業に着手。
- 30日 遺構測量。
- 12月7日 遺構測量。
- 14日 遺構測量。
- 15日 記録作業を終了、機器材を撤収し、調査に係る現地作業を完了。



柳原東西線地点・C区（東から）



中俣遺跡・柳原東西線地点（西から）

水内坐一元神社遺跡・柳原総合市民センター地点

【平成19年度】

- 10月5日 調査区西側（西区）から、重機による表土除去を開始。
- 10日 作業員による遺構検出作業に着手。
- 11日 調査区の外周に試掘坑を設定、埋没河川の範囲を確認。
- 12日 調査区東側（東区）について、重機による表土除去を開始。
- 24日 東区の遺構検出作業に着手。
- 11月1日 遺構測量。
- 12日 設計変更に伴い、調査区東側を拡張、重機による表土除去に着手。
- 13日 柳原公民館主催による遺跡見学会。
- 16日 空中写真撮影。
- 26日 埋没河川について、自然科学分析を目的とした土壌のボーリング調査を実施。
- 29日 遺構測量。
- 12月3日 遺構測量、機器材を撤収。
- 4日 記録作業を終了し、調査に係る現地作業を完了。



柳原総合市民センター地点（北から）



柳原総合市民センター地点（東から）

3 調査の体制

【平成15年度】

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	立岩睦秀
調査機関	長野市埋蔵文化財センター	所長	磯野久夫
		局主幹（兼所長補佐）	矢口忠良
		庶務係	係長 山岸恒雄
			職員 吉村久江 塚田容子
		調査係	係長 青木和明
			主査 飯島哲也
			主事 風間栄一 小林和子
		専門員	小野由美子 堀内健次 宮川明美 清水竜太
			〃 遠藤恵実子 長瀬出 山野井智子 藤原崇志

【平成16～21年度】

調査主体者	長野市教育委員会	教育長	立岩睦秀（～H21.12） 堀内征治（H21.12～）
調査機関	文化財課	課長	塩澤一郎（H16） 北村真一郎（H17・18）
			雨宮一雄（H19・20） 金井隆子（H21～）
	埋蔵文化財センター	局主幹（兼所長）	矢口忠良（～H18）
		所長	青木和明（H19～）
		庶務担当	係長 山岸恒雄（H16） 宮沢和雄（～H20） 北村嘉孝（H21～）
			職員 塚田容子（～H18） 吉村久江（～H20） 大竹千春（H21～）
		調査担当	係長 青木和明（～H18） 千野浩（H21～）
			主査 飯島哲也（H16） 風間栄一（～H19） 小林和子（H17～）
			主事 小林和子（H16） 宿野隆史（H17～20） 塚原秀之（H20～）
		専門員	堀内健次（H16） 清水竜太（～H17） 遠藤恵実子
			長瀬出（～H19） 石丸敦史（～H18） 山野井智子
			小出泰弘（～H18） 森田利枝（～H18） 宮沢浩司（～H17）
			山岸千晃（～H19） 加藤拓也（H17） 小池勝典（H18・19）
			柴田洋孝（H18～） 向山純子（H19・20） 佐々木麻由子（H19）
			小林由実（H20～） 小山夏奈（H20～） 西澤尚紘（H20～）
			山本賢治（H21～）
調査員	青木善子 池田寛子 清水武	多羅沢美恵子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子	
調査補助員	中嶋昭二郎		
発掘作業員	新井さち子 伊藤修二 奥村直美 小泉成司 小林景子 小柳功 鈴木友江 竹之内一夫		
	田中茂美 仲條淑恵 西沢明子 萩原正孝 原澤あけみ 藤澤孝徳 布施谷真美子 松浦サトミ		
	矢沢由男 山崎照代 山田哲也 若林正子		
整理作業員	倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子		
測量業務委託	有限会社写真測図研究所	自然科学分析委託 パリノ・サーヴェイ株式会社	
調査報告書データ編集教務委託	鬼灯書籍株式会社		

II 遺跡と環境

1 地理的環境

小島・柳原遺跡群は、長野市東部の一連の千曲川自然堤防上に立地した集落遺跡群を包括する。同遺跡群に属す水内坐一元神社遺跡と中俣遺跡も、同一の自然堤防上に位置していると理解されるものである。通常、自然堤防は微高地としての高燥な土地であり、畑地もしくは集落域として利用される。それよりも低湿な後背湿地が水田域として利用されるため、両者の境界は地形の高低差としてだけではなく土地利用の差としても観察されることとなる。ところが、今回の調査対象区域での土地利用状況を見ると、土地の高低差が不明瞭となり、畑地と水田が混在する様相を呈する。むしろ、微地形が複雑に入り組んでいるとも表現できるような状況にあり、市内の他の自然堤防と比較すれば、特異な景観が形成されている。

この入り組んだ土地の景観形成のあり方については、自然と人為の両側面から理解されるべきものと考えられ、現段階において想定できる要因を次のとおり整理しておきたい。

(1) 地盤の沈降と堆積

長野盆地では、活断層の活動によって北西の山地側が隆起し、その反対の南東側が沈降している。沈降している側の南東部には千曲川が移動し、その流域では土砂堆積による埋め立てが同時進行している。当該の区域はこの千曲川の下流域に近く、地盤の沈降とともに河川堆積物による埋め立てが活発であると考えられる。堆積が活発である分、本来の自然堤防と後背湿地との高低差が失われて平準化されてきた可能性がある。

(2) 自然堤防と扇状地の交錯

当該区域は、後背湿地との境界に近い千曲川自然堤防上に立地しているが、裾花川の旧流路と目される北八幡川が入り込んでいる状況からもわかるとおり、西から伸びた裾花川扇状地の末端部分が重複しており、同河川の影響が強く及ぶ環境条件下にあると考えられる。今回の発掘調査でも、大きく蛇行した埋没河川の存在が明らかとなり、時として裾花川流路が網の目状に入り組み、開析や埋没等の消長を繰り返すことによって、複雑な微地形が形成されてきた可能性がある。

(3) 用水路整備と水田開発

当該区域から北西にかけて広がる水田地帯には、北八幡川系統の農業用水路が発達している。周辺の字名からは「土井堰・砂田堰・下堰・岡田堰・中堰」の名称が拾い出され、当該区域がこれらの用水路網に取り囲まれて位置する状況を理解することができる。区域南側で平成17年度に発掘調査された(株)山二小島団地地点（字岡田堰南）においては、弥生時代以来集落域であった微高地を、奈良時代以降に削平して水田化するという土地利用の変遷が確認された。今回の調査でも同様の土地利用のあり方が追認される。奈良時代を境として用水路が縦横に整備され、人為的に土地を削平するなどの水田開発が進行するなかで、畑と水田とが入り組んで混在する景観が形成されてきた可能性がある。

いずれに起因するにせよ、当該区域の周辺では地形の変換区分が不明瞭となって、現況では自然堤防と後背湿地との境界を明確に把握することが困難な状況にある。現在設定されている小島・柳原遺跡群の範囲（図4）の中で、千曲川に面した南東側範囲の境界が地形の高低差に沿って明瞭であるのに対し、後背湿地に面した北西側の境界が直線的な概ねの範囲として設定されているのはこのためである。この北西側の境界は、現時点では暫定的な遺跡範囲に留まるものであり、今回の調査で確認されたような河川流路などの古地形が、複雑に入り組んで

地下に埋没している状況が想定されることとなる。

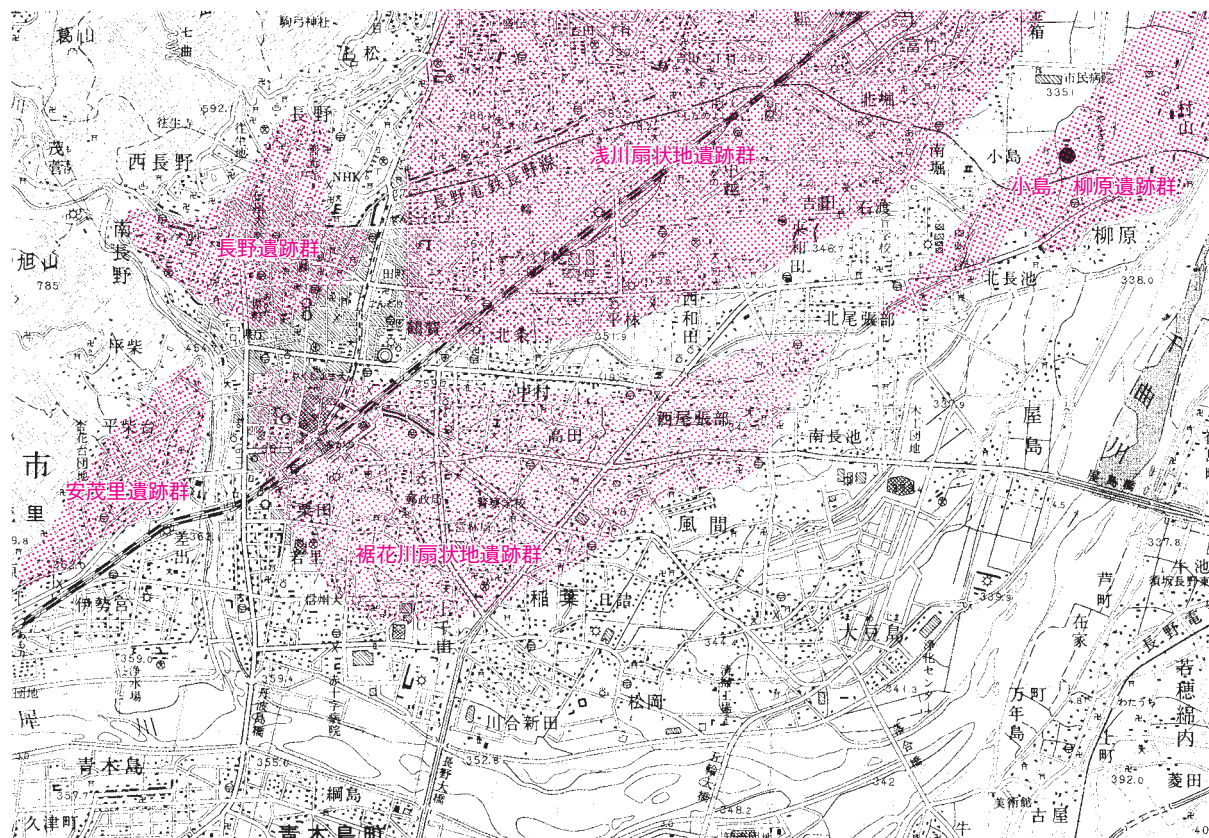


図2 遺跡群の位置 (1 : 60,000)

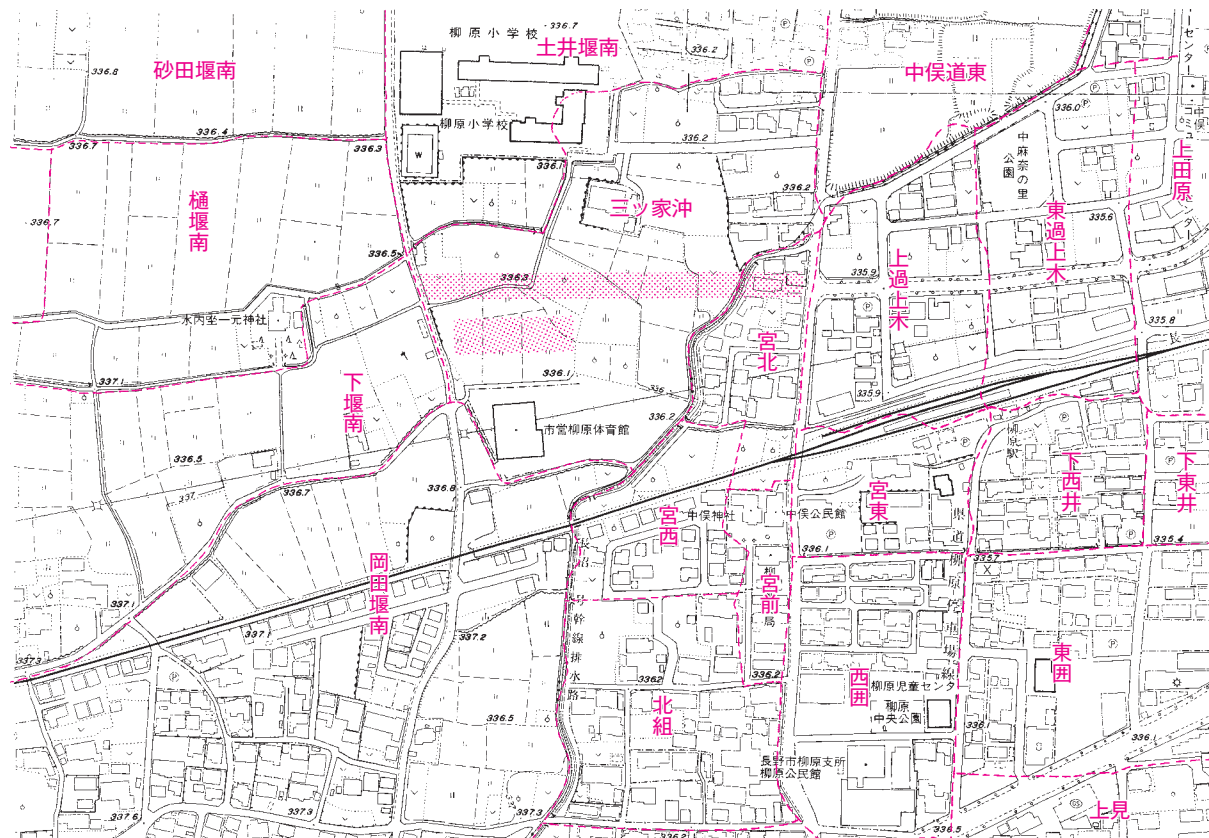


図3 発掘調査地と字名 (1 : 5,000)

2 遺跡周辺の考古学的環境

柳原地区から朝陽地区の一部にまたがる千曲川の自然堤防上には、各時代の集落遺跡が分布している。当市では、自然堤防などの一連の地理環境を共有した複数の遺跡を包括する概念として「遺跡群」範囲を設定しており、当該地区については「小島・柳原遺跡群」と命名している。次に、この遺跡群で実施されてきた発掘調査の概況をまとめる。

水内坐一元神社遺跡

- 1 柳原小学校地点：大字小島字土井堰南、S54年度調査、長野市教委1980『三輪遺跡 付』
弥生時代中期竪穴住居4軒・古墳時代後期竪穴住居5軒などを確認
- 2 (株)山二小島団地地点：大字小島字岡田堰南、H8年度調査、長野市教委1997『水内坐一元神社遺跡Ⅱ』
弥生時代後期竪穴住居8・古墳時代前期竪穴住居2
- 3 柳原体育館地点：大字小島字三ツ家沖、H8年度調査、長野市教委1998『水内坐一元神社遺跡Ⅲ』
弥生時代後期竪穴住居4・環濠？
- 4 (株)山二小島団地二期地点・ガーデンパーク小島地点：大字小島字岡田堰南、H17年度調査、長野市教委2006『水内坐一元神社遺跡(4)』
弥生時代中～後期竪穴住居・古墳時代前期周溝墓・古墳時代中～後期竪穴住居・奈良時代溝
- 5 市道柳原東西線地点：大字小島字三ツ家沖、H15・16年度調査、本書
弥生時代中～後期竪穴住居・弥生時代後期～古墳時代前期周溝墓・古墳時代後期竪穴住居・奈良時代竪穴住居・掘立柱建物1・中世溝
- 6 柳原総合市民センター地点：大字小島字三ツ家沖、H19調査、本書
弥生時代中期竪穴住居・弥生時代後期～古墳時代周溝墓・埋没河川・中世溝
- 7 宮西遺跡 中俣住宅地造成地点：大字柳原字宮西、H5年度調査、長野市教委1994『宮西遺跡』
弥生時代中～後期竪穴住居11・古墳時代前期周溝墓2・中世溝1

中俣遺跡

- 8 中俣土地区画整理事業地点：大字柳原字上返町他、S63～H2年度調査、長野市教委1991『中俣遺跡・他』
弥生時代中～後期竪穴住居50以上・古墳時代前期溝
- 9 中央消防署柳原分署地点：大字柳原字下返町、H3年度調査、長野市教委1992『中俣遺跡Ⅱ』
弥生時代後期竪穴住居3・古墳時代後期竪穴住居1
- 10 (株)永楽開発支店地点：大字柳原字下返町、H6年度調査、長野市教委1996『駒沢城跡・中俣遺跡Ⅲ』
弥生時代中～後期竪穴住居5・古墳時代前期周溝墓1
- 11 市道柳原東西線地点：大字柳原字宮北、H18年度調査、本書
弥生時代後期竪穴住居・中世溝
- 12 小島境遺跡 富士通長野工場地点：大字石渡字下土婦、S57・58年度調査、未報告
弥生時代中期竪穴住居1・後期竪穴住居3・古墳時代前期竪穴住居5・方形周溝墓1
- 13 南川向遺跡：大字北尾張部字南川向、S61年度調査、長野市教委1988『南川向遺跡』
古墳時代前期土坑1・平安時代竪穴住居6・溝
- 14 上中島遺跡：大字北長池字上中島、H5年度調査、長野市教委1994『三輪遺跡(5)・上中島遺跡』
平安時代竪穴住居3・溝

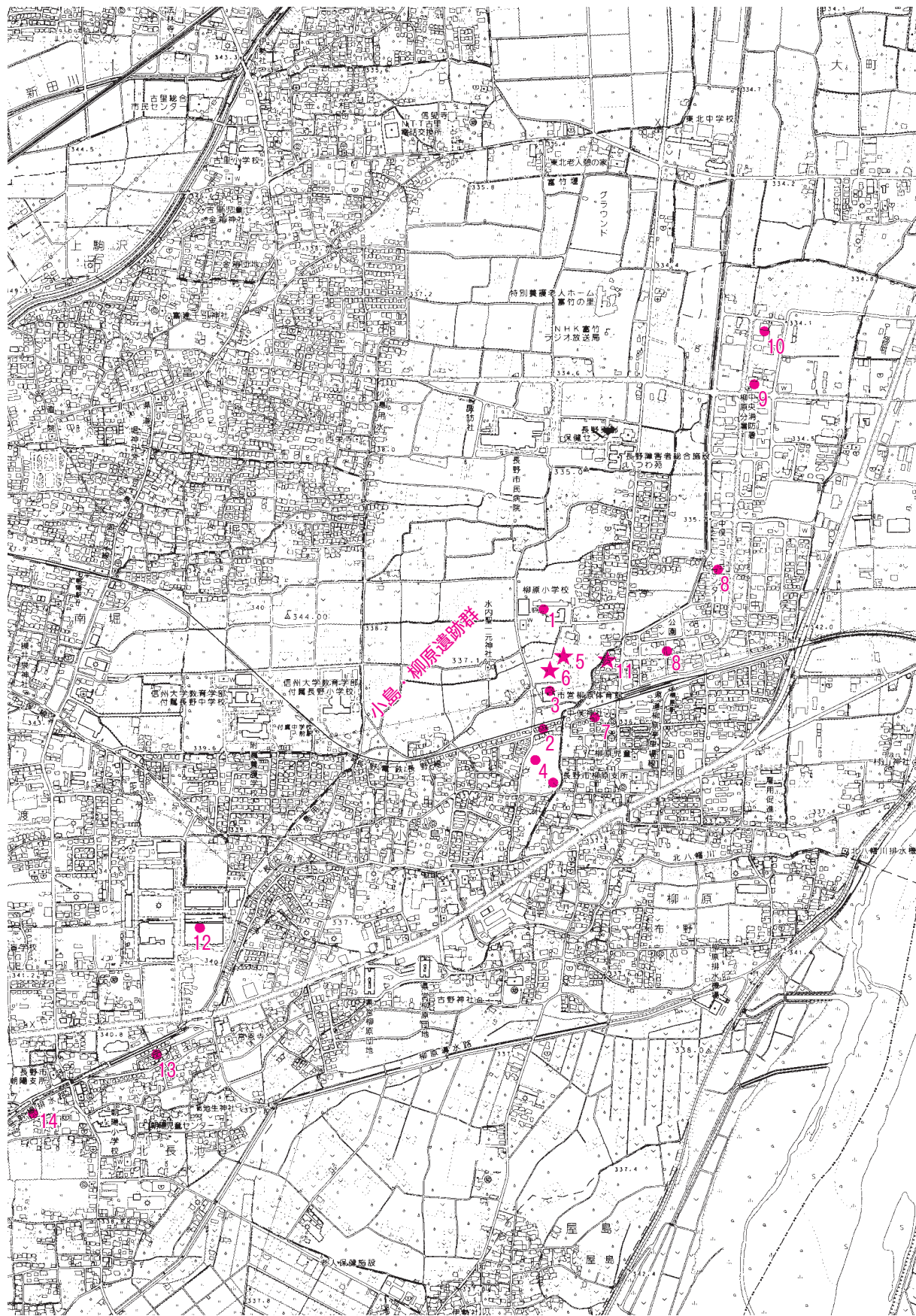


図4 小島・柳原遺跡群と発掘調査地点（1：15,000）番号は8頁と共通

Ⅲ 調査概要

1 調査地点と検出遺構

柳原東西線道路改良事業及び柳原総合市民センター建設事業に伴う発掘調査は、平成15年度から開始して平成19年度まで発掘作業を継続した。南に隣接する市民体育館を含めれば、一連の施設整備に係る発掘調査としては、足かけ10年以上にわたる長期間のものとなった。

調査は、用地補償と工事の進捗に合わせて区切られ、年度毎に実施範囲が分割されたことから、柳原東西線道路改良地点における水内坐一元神社遺跡（略称K Y M O - Ⅲ）は、AからDまでの4区に分かれ、柳原総合市民センター地点（略称K Y M O - Y C）と合わせて5地区分割された。また、柳原東西線道路改良地点のうち、北八幡川（長沼用水）を境とした東側は、大字柳原地籍に属していることから大字小島地籍の水内坐一元神社から分離され、中俣遺跡範囲内（略称K Y N - M K）として取り扱うこととされた。以上により、今回の調査範囲は、2遺跡にまたがり、6地区に分割されている。

各地区での遺構検出状況は、

表1・2に示したとおりであり、総体として、竪穴住居33軒、溝53本、土坑475基、周溝墓11基等を数える。ここで、竪穴住居の所属時期に注目すると、弥生中期が15軒、弥生後期が11軒、古墳後期が5軒、奈良平安が1軒と続き、居住域としての利用が時代毎に偏在する傾向が表れている。また、近隣の調査例と比較すると、山二小島団地二期工事地点等（長野市教委2006）では調査面積1000㎡の中で49軒もの竪穴住居が検出されているのに対し、今回の調査では面積3000㎡を超える中で33軒と格段に疎らな状況となっている。これら、遺構の時代的、地区的偏在については、調査区をまたがって検出された埋没河川と古地形との関係が鍵となるものであり、次節において整理したい。

表1 遺構検出状況（種類別）

調査地区		遺構（略記号）						
地点	区	竪穴（SB）	溝（SD）	土坑（SK）	周溝（SZ）	河川（SR）	掘立（ST）	他（SX）
K Y M O - Ⅲ	A	2	6	24		1	1	
	B	2	2	151	4			
	C	2	13	146	2			
	D	6	7	71	1			
K Y N - M K		10	8	13				
K Y M O - Y C		11	17	70	4	1		1
計		33	53	475	11	2	1	1

表2 遺構検出状況（時期別）

調査地区		遺構		弥生時代		古墳時代			奈良平安	中世	近世	不明	
地点	区	種別	記号	中期	後期	前期	中期	後期					
K Y M O - Ⅲ	A	竪穴	SB		2								
		溝	SD							1		5	
		土坑	SK	1	2								21
		河川	SR	1									
		掘立	ST							1			
	B	竪穴	SB						2				
		溝	SD										2
		土坑	SK	5						4	2	1	139
		周溝	SZ		4								
	C	竪穴	SB						2				
		溝	SD		1					1	1	2	8
		土坑	SK	1	1				4	19	6	8	107
		周溝	SZ		2								
	D	竪穴	SB	4					1	1			
		溝	SD	1	1				1	1		1	2
		土坑	SK							8	1	3	59
周溝		SZ				1							
K Y N - M K	竪穴	SB		9	1								
	溝	SD				1			5			2	
	土坑	SK		6								7	
K Y M O - Y C	竪穴	SB	11										
	溝	SD		2					1	4		10	
	土坑	SK							4			63	
	河川	SR	1										
	周溝	SZ		1	2	1							
計				25	35	5	1	10	45	15	15	425	

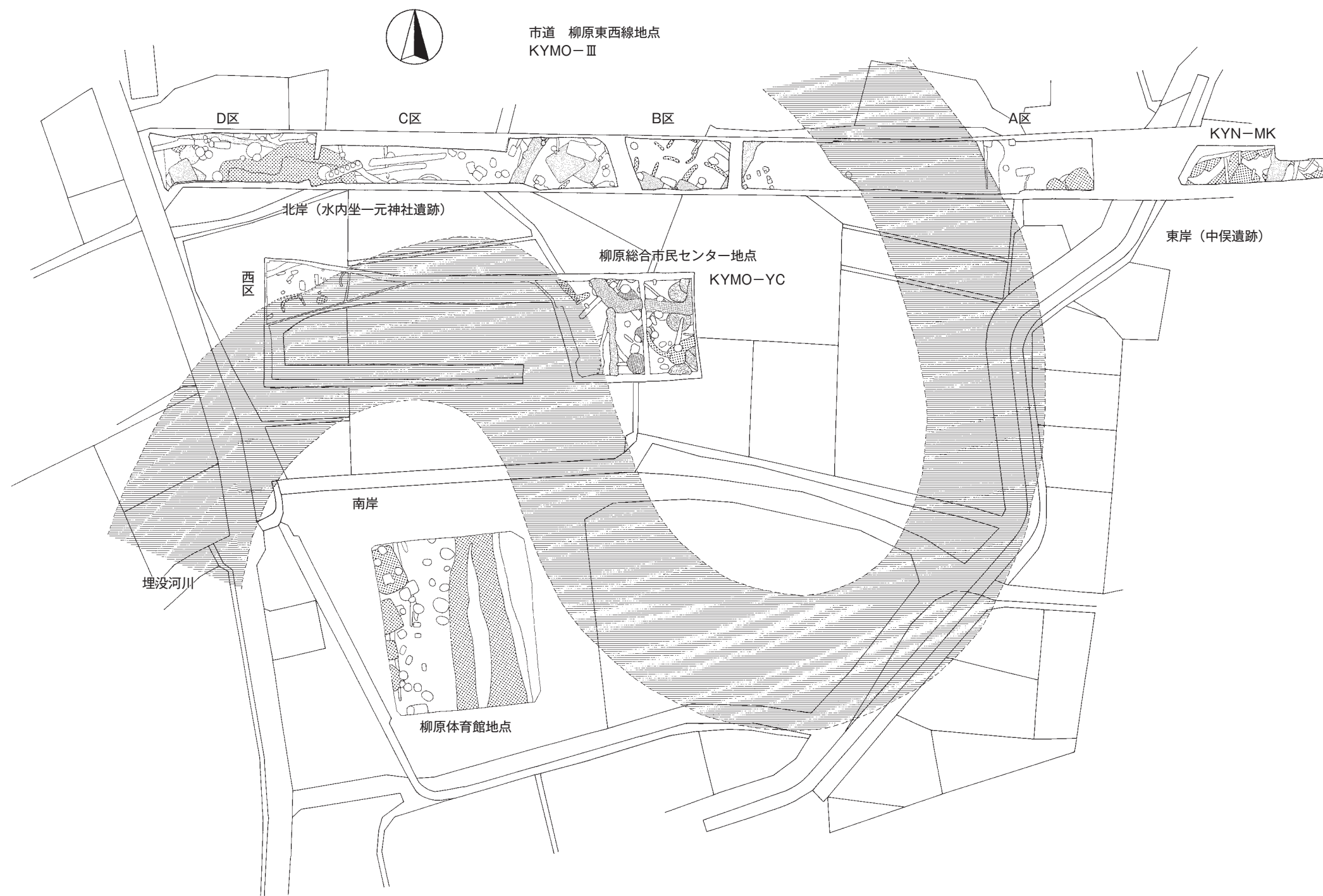


図5 調査地区全体図 (1:1,000)

2 埋没河川による地形区分と遺構分布

前節では、今回検出された遺構の分布状態に、所属年代や地区別に偏在性が存在することを確認した。ここでは、埋没河川を軸とした地形区分によって調査地区の様相を再整理し、遺構分布の偏在性を再確認してみたい。

埋没河川は、市道柳原東西線地点（KYMO-Ⅲ）A区と、柳原総合市民センター地点（KYMO-YC）でそれぞれ確認され、規模や堆積状態などから一連の自然流路と判断し、大きく蛇行する形状を想定している（図5）。流路の幅員は25～30m、掘削は川底まで達していないが、ボーリング調査の所見から、深さは2m超、弥生後期の段階から止水性が強まって流路内の堆積が進行し、古墳時代以降は河川としての機能が失われ、湿地へと遷移したと推定される。この埋没河川の流路によって区分された地域を「東岸」「北岸」「南岸」と呼称し、それぞれの地域に分布する遺構の特徴を整理してみる。

埋没河川の東岸域

中俣遺跡（KYN-MK）と北八幡川（長沼用水）西側に位置する水内坐一元神社遺跡の一部（KYMO-Ⅲ・A区東側）が該当する。現在両地区は北八幡川流路によって隔てられているものの、同流路が後世の人工的開削によるものであることを考慮すれば、本来は同一地形として中俣遺跡の西端部に含まれるべき地域である。

竪穴住居は、弥生後期から古墳時代前期にかけてのものが11軒検出され、重複しながら密な分布状態を示している。他の時代に属する竪穴住居が存在していないため、集落域としての利用は弥生時代後期を中心とした時期に絞られるが、弥生中期土器破片や同期の石器出土が確認されている点から、弥生中期段階の居住域利用も想定しておくべきであろう。居住域以外の遺構としては、奈良～平安時代に属する溝5本があり、農業関連の用排水路と推定できる。同段階に一角が水田として開発され、今日に至る田園景観が形成されたと理解される。

埋没河川の北岸域

柳原東西線地点の大部分（KYMO-Ⅲ・A区西側・B～D区）と柳原総合市民センター地点（KYN-YC）が該当する。蛇行する河川流路によって囲まれた細長い帯状の地域であり、果樹園として利用された微高地として現地地形にもその痕跡を観察することができる。

居住関係遺構としては、弥生中期の竪穴住居が15軒、古墳後期の竪穴住居が5軒、奈良・平安時代の竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟が検出されている。弥生中期竪穴住居は一部重複しているが、地域全体に拡散的に分布しており、一角が広範囲に集落域として利用されていたと推定できる。古墳後期の竪穴住居はKYMO-ⅢのB・C区に限定的に分布することから、集落規模としては狭小であった可能性が高い。また、中世に属する幅員2m超の溝は、居館等を区画する堀と推定できるものであり、建物等の存在を示す小穴群とともに同期における居住域としての活発な利用が示される。居住域以外の遺構としては、弥生後期～古墳前期の周溝墓10基が目される。同期の竪穴住居が確認されないことから、同段階に限っては一角が墓域として利用されていたことが確実と思われる。KYMO-ⅢのB区にみるように、周溝の一部を共有して密集する状況も、それを裏付けるものとなる。

埋没河川の南岸域

今回の調査範囲は含まれないが、柳原市民体育館地点（長野市教委1998）が該当する。また、さらに南側の山二小島団地地点等（長野市教委1997・2006）も一連の地域に含まれてくる可能性がある。

柳原市民体育館地点では、弥生後期の竪穴住居とともに、環濠と推定された大規模な溝が検出されている。同段階には河川流路の埋め立てと湿地化が進行していたと想定されることから、湿地を挟んで北岸が墓域、南岸が集落域として利用されたと考えることが妥当となる。また、流水の途絶えた河川跡を利用し、あるいは接続して大溝が開削され、環濠集落としての外観が形成されていったことも十分に想定できる状況である。

IV 遺構

調査において検出確認した遺構は、各地点別、遺構種別に一連の番号を付し、各遺構の概要（所属時期、平面形・範囲・規模・施設等検出状況、出土遺物）を一覧表に集約して掲載した（表3）。

遺構測量図に関しては、調査範囲全域にわたる遺構分布図（1：600）と、遺構全体図（1：150）及び遺構実測図（1：80）を地点毎に掲載した。また、上下重複関係にある遺構に関しては、別途実測図を掲載した。また、遺構写真については、地点毎に集成して図版とした。

なお、本章の記述においては、地点及び遺構種別を略号で記すこととし、その略号は下記のとおりとする。

〔地点〕 水内坐一元神社遺跡－柳原東西線地点：KYMO－Ⅲ（A～D区）

水内坐一元神社遺跡－柳原総合市民センター地点：KYMO－YC

中俣遺跡－柳原東西線地点：KYN－MK

〔遺構〕 竪穴住居：SB 溝：SD 土坑（小穴も含む）：SK

埋没河川：SR 周溝墓：SZ 性格不明：SX

1 竪穴住居

【弥生時代中期】 KYMO－Ⅲ地点D区SB3～6、KYMO－YC地点SB1～11

15軒検出されている中で、KYMO－Ⅲ地点SB3（図29）・SB4（図28）、KYMO－YC地点SB3（図26）・SB7（図25）等が検出状態良好である。平面形はいずれも円形であり、直径4.1mから5.2mまでを測る。ほとんどの住居は床面中央部に1箇所、灰・炭化物を充満させた掘込炉を設けているが、KYMO－YC地点SB7のみが床面に焼土を形成させた地床炉を複数個所に設けている。柱穴は4～6本配置されるが、やや不規則であって定型的な配列を確認するまでには至らない。床面は平坦で堅緻である場合が多い。なお、KYMO－YC地点では後世の地震に伴う噴砂の痕跡が床面上で明瞭に観察される例が多く見られた。なお、その噴砂の地割れに沿っては、床面に1、2cm程度の段差（小規模断層）が形成されている状況も確認された。

【弥生時代後期～古墳時代前期】 KYMO－Ⅲ地点A区SB11・12、KYN－MK地点SB1～10

11軒検出され、埋没河川の東岸地域に偏在している。全形の検出例はないが、弥生後期に標準的な隅丸に近い長方形4本柱形式によるものと考えられる。KYMO－Ⅲ地点SB12（図12）、KYN－MK地点SB8（図22）では短辺5mを測り、北西柱穴間に焼土形成の地床炉が設置されている。なお、KYN－MK地点においては各住居の重複関係が著しく、住居の廃絶と建て替えが連続性をもっている状況が示される。

【古墳時代後期】 KYMO－Ⅲ地点SB2・7～10

5軒検出され、D区SB2を除いてB・C区に偏在集中し、近接重複関係が観察される。平面形は方形4本柱形式で、一辺5.0～6.8mを測り。SB2（図20）、SB7（図16）、SB8（図30）では北西壁にカマドの付設が確認される。

【平安時代】 KYMO－Ⅲ地点D区SB1

SB1（図20）1軒のみであり、検出範囲も一部分にとどまる。ただし、土坑・溝等の遺構や検出面での遺物出土量から判断すれば、該期における居住域としての利用度はさほど低くはなかったと理解される。調査において遺構を認識できるか否かは、遺跡環境に応じた遺構の遺存状況や調査者の認識能力に左右される部分が大きい。

だから、調査で認識できなかった遺構の存在について考慮することが妥当である。

2 掘立柱建物

【奈良時代】 KYMO-Ⅲ地点A区ST1 (図13・31)

1棟のみ検出され、短辺4m長辺5.2mの規模を測る。柱間は2×3、10本の柱穴のうちの7本が調査範囲内にあり、いずれの柱穴内にもコナラ材の柱根の遺存が確認された(樹種同定についてはⅥ章を参照)。その遺存状態は良好であり、直径20cm内外、最大で80cm長が残されている。また、底面を除いて加工の痕跡が観察されないことから、外皮を取り除いた状態の丸太材と推定できる。なお、柱根の位置から柱間隔を測り出すと、東西方向で1.7、2.0、1.6m、南北方向で1.9、2.2、2.0mと数値がばらつき、その配列位置も一直線には並ばない。柱穴掘込も大きさと形状が不揃いであり、やや雑駁な観を受ける。

3 土坑・溝

【弥生時代】

KYMO-Ⅲ地点では、弥生中期の完形に近い土器を埋納した土坑が見られる(SK225・247・338)。SK247(図14)については、土器埋納状態から土器棺・墓坑となる可能性も指摘できる。また、周溝墓群と近接位置にある点も注意される。KYMO-Ⅲ及びKYMO-YC地点には、弥生後期の所産と思われるいくつかの溝が存在する。円形に近いKYMO-Ⅲ地点のSD13・26(図13・17)、直線に近いKYMO-YC地点のSD13(図24)などは、同時期の周溝墓群と関連させて理解すべきかもしれない。

【古墳時代】

KYN-MK地点SD7(図21)は古墳前期に属する大形溝であり、周溝墓の一部となる可能性が考えられる。KYMO-Ⅲ地点SD8(図18~20)は古墳後期に属し、幅員1.2m内外で東西に調査区を縦断している。

【奈良・平安後期】

KYN-MK地区SD1~3(図21・22)は、弥生~古墳時代の包含層を掘り込んで構築され、幅0.5~1mで南北方向に平行して走る。SD6(図22)は幅員3m超、深さ1.5m、底面が平坦となる断面箱形の大形溝である。いずれも流水の痕跡が認められ、奈良時代以降の所産による農業関連水路と判断される。

【中世以降】

KYMO-Ⅲ地点SD19・25(図13・16)、KYMO-YC地点SD5(図24・25)は、幅員3m内外の中世段階の大溝であり、居館等を区画するための堀として連続的に開削されたものと判断している。平行するSD19と25の間隔は約40mを測るが、平面形態は方形ではなく、やや不整な多角形が想定される(図6等)。

調査範囲全体には直径1m内外の円形土坑が分布している。その多くは中世以降の素掘りの井戸あるいは溜(ため)と推定され、居住域というよりも農業生産に関係した遺構と理解できる。KYM-Ⅲ地点SK75~83(図18)はその好例で、溝状の掘り込み内に桶を6基連ねて埋置した肥溜であり、うち3基には桶の底板も遺存していた。

4 周溝墓・他

【弥生時代後期~古墳時代前期】 KYMO-Ⅲ地点SZ1~7、KYMO-YC地点SZ1~4

11基以上が分布している。年代を示す遺物出土が乏しいため時代判定が確実とはならないが、弥生後期段階から古墳前期にかけて連続的に構築されたものと想定され、K Y M O - Y C 地点 S Z 4 は古墳中期にまで下降する可能性もある。K Y M O - Ⅲ 地点 S Z 1 (図33) は前方後方形であり、周溝外周で全長28.5mを測る。くびれ部に近い周溝底面から壺1個体の出土があり、周溝墓に伴う確実な遺物として把握されている。K Y M O - Ⅲ 地点 S Z 2 ~ 7 (図14・15) は一辺6~7mの方形周溝墓群であり、S Z 4 ~ 7 は溝の一部を共有して隣接状態で構築されている。K Y M - Y C 地点(図11)での検出は断片的であるが、S Z 2 は一辺10m前後の方形周溝の一部、S Z 3 は径10m前後の円形周溝の一部と判断している。S Z 1 (図10) は一辺5mの方形周溝の一部であり、埋没河川の落ち込み際に位置している。同遺構の東に隣接している S X 1 (図32) は、1.5×0.5mの範囲に小礫が集積され、それを取り囲む形で弥生後期土器5個体が出土したものである。その様相と周溝墓に隣接する配置から、埋葬施設に関連した施設の一部である可能性は高いものと考えられる。

5 埋没河川

K Y M O - Ⅲ 地点A区において幅員25m、K Y M O - Y C 地点で幅員30mを測る河川流路が検出された。その規模や流路内の堆積状態から連続する自然流路であると判断し、大きく蛇行した形状が想定される(図5)。流路の埋没状況については試掘により一部確認したが、軟弱な堆積物と湧水によって掘削困難な状況にあり、平面的検出は流路に向かっての落ち込み際5m範囲にとどめた。検出範囲での落ち込みの傾斜はさほど急ではなく、傾斜角は10~15°程度である。堆積土層中には土器破片が含まれるものの、埋没の過程で集中的に遺物廃棄がなされる等の人為的状況は確認されていない。なお、河川流路の深さ及び埋没の年代や環境に関する情報を得るため、ボーリング調査と自然科学分析を実施した(Ⅵ章)。諸分析を総合して判断すると、当該河川が清流として機能していたのは弥生中期段階であり、弥生後期段階には水流が停滞し、古墳前期には流水が途絶えて湿地化したと考えられる。当該調査地点における各時代の土地利用のあり方は、この河川流路の埋没に伴う環境変化を機軸として変遷してきたものと理解されよう。

図23【K Y M O - Y C 地点(西区)西壁土層説明】

- 1 灰色粘土(現水田耕作土層)
- 2 灰白色粘土(赤褐色沈着斑文あり)
- 3 灰色粘土(赤褐色沈着斑文あり)
- 4 黒褐色シルト(埋没河川覆土)
- 5 黒褐色シルト(S D 1 覆土)
- 6 黄褐色シルト(基盤層)

図27【K Y M O - Y C 地点 南壁土層説明】

- 1 灰色粘土(現水田耕作土層)
- 2 黒褐色シルト(遺物包含層)
- 3 褐灰色砂(噴砂層)
- 4 黄褐色シルト混合(弥生~古墳時代掘り込み)
- 5 黒褐色シルト質粘土(近世~近代井戸)
- 6 黄褐色シルト(基盤層、下部は細砂へ移行)

図26【K Y M O - Y C 地点 南壁土層説明】

- 1 灰褐色砂質シルト(現畑耕作土層)
- 2 灰色粘土(水田耕作土層、赤褐色沈着斑文あり)
- 3 黒褐色粘土(遺物包含層)
- 4 黒褐色粘土(有機質含む、以下は埋没河川覆土)
- 5 褐灰色粘土(灰白色粘土混合)
- 6 黒褐色シルト質粘土(有機質多く含む)
- 7 灰黄褐色シルト質粘土(基盤への漸移層)
- 8 黄褐~灰黄色シルト層(基盤層、下部は細砂へ移行)

表3 遺構一覧表

地点	区	遺構番号	時期	遺構検出状況			出土土器		その他出土遺物	
				平面形	範囲	規模 (m)	施設等	重量 (g)		実測
Ⅲ	D	SB1	平安	方形	一部		SB2に重複	1,310	2	剥片
Ⅲ	D	SB2	古墳後期	方形	3/4	5.2×5.0	カマド (北壁)、SB1が重複	16,090	1	大型蛤刃・小形片刃・石鏃・砥石・剥片・管玉・鉄片
Ⅲ	D	SB3	弥生中期	円形	2/3	径4.7	炉 (中央)、SB2床下、SB5に重複	7,520	1	不明磨製石器・敲石・砥石・剥片・土製円板
Ⅲ	D	SB4	弥生中期	円形	全	径4.1	多量土器遺棄、SB6が重複	39,435	26	台石・ミガキ石・剥片・土製円板
Ⅲ	D	SB5	弥生中期	円形	一部		SB3が重複	1,430		不明磨製石器・剥片・土製円板・銅片
Ⅲ	D	SB6	弥生中期	方形?	一部		SB4に重複	1,180		剥片
Ⅲ	C	SB7	古墳後期	方形	全	6.0×6.8	カマド (北西壁)、SB8が重複	8,665	4	剥片
Ⅲ	C	SB8	古墳後期	方形	全	5.2×5.3	カマド (北西壁)、SB7に重複	5,950	1	剥片
Ⅲ	B	SB9	古墳後期	方形	1/3		カマド (北西壁)	4,627	1	砥石・剥片・貝殻
Ⅲ	B	SB10	古墳後期	方形	1/2	5.5×		3,590	5	剥片
Ⅲ	A	SB11	弥生後期	隅丸長方形	1/2	3.9×3.0		4,580		
Ⅲ	A	SB12	弥生後期	隅丸長方形	1/2	5.2×	炉 (柱穴間)	25,020	12	ミガキ石・敲石・剥片・ミニチュア土器・小玉・木片
Ⅲ	D	SD2	平安			幅1.0		1,390	1	砥石・剥片・鉄片・木片・種子
Ⅲ	D	SD3	弥生中期			幅0.9		6,180	3	剥片
Ⅲ	D	SD6	近世				用水路?	2,830		砥石・剥片・鉄片・貝殻
Ⅲ	D	SD7	弥生後期	不整				8,315	2	剥片・土製円板
Ⅲ	D	SD8	古墳後期			幅1.2		9,500		ミガキ石・敲石・剥片・銅板
Ⅲ	C	SD10	近世			幅1.1	道路施設?	2,220		砥石・剥片
Ⅲ	C	SD11	近世			幅1.4	道路施設?	2,450		剥片・寛永通宝・種子
Ⅲ	C	SD13	弥生後期	円形?	1/3	幅0.5		2,310		
Ⅲ	C	SD16	平安			幅0.6		390		
Ⅲ	C	SD19	中世			幅2.5	YCSD5に連続?	16,690	5	扁平片刃・刃器・砥石・石臼・硯・剥片・鉄片・種子
Ⅲ	A	SD25	中世			幅2.8	YCSD5に連続?	3,140	1	不明磨製石器・石臼・剥片・木片・種子
Ⅲ	A~D	他SD						6,570		石鏃・剥片・北宋銭・鉄片
Ⅲ	D	SK7	平安	方形		1.5×1.5		1,880	1	剥片
Ⅲ	D	SK15	平安	円形		径1.0		770	1	
Ⅲ	D	SK16	平安	円形		径1.6		1,110	1	砥石・剥片
Ⅲ	D	SK17	平安	円形		径2.0		1,070		木片
Ⅲ	D	SK31	近世	円形		径0.6		610	1	剥片
Ⅲ	D	SK34	近世	長方形		1.3×3.4		1,110	3	剥片・キセル・鉄片・木片
Ⅲ	D	SK37	中世	円形		径3.3		1,760	2	砥石・ミガキ石・石臼・凹石・敲石・剥片・鉄片・漆器片
Ⅲ	D	SK51	平安	円形		径1.3		450	1	
Ⅲ	D	SK52	近世	円形		径0.9		60	1	
Ⅲ	D	SK55	平安	円形		径3.0		6,430	11	砥石・敲石・剥片・土製品
Ⅲ	D	SK57	奈良	円形		径2.3		5,440	9	剥片・管玉
Ⅲ	D	SK61	平安	長方形?		3.1×		2,110		剥片
Ⅲ	C	SK75	近世	円形		径1.2	肥溜め6連、桶底板遺存	220		剥片
Ⅲ	C	SK76	近世	円形		径1.1	肥溜め6連、桶底板遺存	430	1	砥石・剥片・木片
Ⅲ	C	SK80	近世	円形		径1.1	肥溜め6連	110		寛永通宝
Ⅲ	C	SK81	近世	円形		径1.1	肥溜め6連	90		石核・剥片・寛永通宝・銅片・木片・種子
Ⅲ	C	SK82	近世	円形		径1.1	肥溜め6連	480		寛永通宝
Ⅲ	C	SK83	近世	円形		径1.0	肥溜め6連、桶底板遺存	170		鉄片・木片
Ⅲ	C	SK84	近世	長方形		1.8×8.0	肥溜め6連を埋め込む坑	1,440	4	石鏃・剥片
Ⅲ	C	SK86	平安	円形		径1.1		460	1	
Ⅲ	C	SK88	近世	長方形		1.4×2.1		780	1	種子
Ⅲ	C	SK89	奈良	円形		径0.6		440	1	
Ⅲ	C	SK93	平安	円形		径1.1		940	1	
Ⅲ	C	SK103	平安	円形		径0.8		610	1	
Ⅲ	C	SK104	平安	円形		径1.9		1,100	1	
Ⅲ	C	SK112	平安	不整形				430		種子・剥片
Ⅲ	C	SK113	平安	円形		径1.5		470		剥片
Ⅲ	C	SK117	平安	長方形			伸展墓坑、SK157と一連	365	4	人骨
Ⅲ	C	SK119	古墳後期	長方形		2.5×		1,500	2	種子・剥片
Ⅲ	C	SK122	中世	円形		径1.2		1,270		剥片
Ⅲ	C	SK123	平安	不整形				500		種子
Ⅲ	C	SK124	平安	不整形				1,300	1	
Ⅲ	C	SK125	中世	円形		径1.1		260		漆器
Ⅲ	C	SK127	弥生後期	不整形				3,660	1	剥片
Ⅲ	C	SK128	平安	円形		径1.2		370		砥石・剥片
Ⅲ	C	SK129	平安	長方形		1.3×2.1		480		
Ⅲ	C	SK132	平安	円形		径1.0		1,340		
Ⅲ	C	SK134	平安	円形		径0.8		130	1	
Ⅲ	C	SK135	平安	円形		径1.0		370	1	

地点	区	遺構 番号	時期	遺構検出状況			出土土器		その他出土遺物
				平面形	範囲	規模 (m)	施設等	重量 (g)	
Ⅲ	C	SK146	中世	円形		径1.5		280	石製鉢・剥片
Ⅲ	C	SK147	弥生中期	円形		径0.7		670	1
Ⅲ	C	SK151	中世	円形		径1.2		320	1
Ⅲ	C	SK156	中世	不整形		幅3.0		3,700	不明磨製石器・剥片・鉄片・漆器片・木片
Ⅲ	C	SK161	中世	円形		径0.9		210	1
Ⅲ	C	SK177	古墳後期	不整形				1,130	1
Ⅲ	C	SK183	平安	円形		径1.4		810	砥石・剥片
Ⅲ	C	SK184	平安	円形		径0.7		230	1
Ⅲ	C	SK190	平安	方形?				560	剥片
Ⅲ	C	SK202	古墳後期	不整形				570	1
Ⅲ	C	SK208	古墳後期	方形				1,650	4
Ⅲ	C	SK214	平安					80	1
Ⅲ	B	SK225	弥生中期					12,450	9
Ⅲ	B	SK226	弥生中期	円形		径1.1		1,420	2
Ⅲ	B	SK227	弥生	円形		径1.4		200	1
Ⅲ	B	SK228	平安	円形		径1.4		420	鉄片
Ⅲ	B	SK233	平安	円形		径0.6		910	1
Ⅲ	B	SK234	中世	不整形				3,640	剥片
Ⅲ	B	SK236	近世	長方形		1.4×3.3		550	2
Ⅲ	B	SK247	弥生中期	円形		径0.6		4,810	1
Ⅲ	B	SK305	中世	円形		径1.0		420	1
Ⅲ	B	SK320	平安	不整形				1,300	
Ⅲ	B	SK321	弥生中期	小穴				260	1
Ⅲ	B	SK326	平安	円形		径1.4		750	
Ⅲ	B	SK338	弥生中期	円形		径0.6		870	1
Ⅲ	A	SK378	弥生後期	円形		径1.2		1,240	剥片・土製円板
Ⅲ	A	SK379	弥生後期	長方形		1.6×3.9		6,000	剥片
Ⅲ	A	SK386	弥生中期	円形?		径0.8		800	2
Ⅲ	A~D	その他 SK						41,529	扁平片刃・太型蛤刃・石鏃・管玉未成品ほか
Ⅲ	A	SR1	弥生~	蛇行		幅25.0	河川跡(埋没河川)	17,930	6
Ⅲ	A	ST1	奈良	2×3間	3/4	4.0×5.2		1,680	1
Ⅲ	D	SZ1	古墳前期	前方後方形	1/2	幅2.1	全長28m以上	72,170	31
Ⅲ	C	SZ2	弥生後期	方形		溝0.8		1,580	剥片
Ⅲ	C	SZ3	弥生後期			幅0.8		3,180	2
Ⅲ	B	SZ4	弥生後期	方形		幅0.8	一辺7m程度、SZ4~7隣接	1,930	
Ⅲ	B	SZ5	弥生後期	方形		幅0.9	SZ4~7隣接・溝の一部を共有	7,740	2
Ⅲ	B	SZ6	弥生後期	方形		幅0.6	一辺6m程度、SZ4~7隣接	6,490	剥片
Ⅲ	B	SZ7	弥生後期			幅0.4	SZ4~7隣接・溝の一部を共有	130	
Ⅲ	A	検出面他						12,640	6
Ⅲ	B	検出面他						34,142	8
Ⅲ	C	検出面他						32,820	7
Ⅲ	D	検出面他						39,710	10
MK	SB1	弥生後期	方形	一部			SK2が重複	6,620	7
MK	SB2		方形	一部				550	
MK	SB3	弥生後期	方形?	一部			SD7が重複	6,140	3
MK	SB4	弥生後期	方形	2/3	5.4×4.8			21,590	6
MK	SB5	弥生後期	方形	一部			SB6が重複	6,960	1
MK	SB6	弥生後期	方形	一部			SB5に重複	6,890	1
MK	SB7	古墳前期	方形	一部			SD6が重複	810	1
MK	SB8	弥生後期	方形	1/2			炉(柱穴間)、SB9に重複	11,360	4
MK	SB9	弥生後期	方形	一部			SB8が重複	4,230	4
MK	SB10	弥生後期	方形	一部			SB9が重複	3,250	2
MK	SD1	奈良~				幅0.7		2,120	剥片
MK	SD2	奈良~				幅0.5		1,570	砥石
MK	SD3	奈良~				幅1.0		480	刃器・剥片
MK	SD5	奈良~					旧長沼用水の一部?	470	1
MK	SD6	奈良~				幅3~4.0	大溝	350	剥片
MK	SD7	古墳前期				幅2.5	周溝墓の一部?	6,600	2
MK	その他 SD							1,480	剥片
MK	SK1	弥生後期	円形			径1.3		4,050	
MK	SK2	弥生後期	不整形					5,640	1
MK	SK4	弥生後期	円形			径1.5		2,070	1
MK	SK5	弥生後期	長方形			0.6×2.5		1,350	骨片
MK	SK6	弥生後期	円形			径1.2		1,430	砥石
MK	SK9	弥生後期					SB6が重複	1,330	土製紡錘車
MK	その他 SK							1,590	剥片

地点	区	遺構 番号	時期	遺構検出状況				出土土器		その他出土遺物
				平面形	範囲	規模 (m)	施設等	重量 (g)	実測	
MK		検出面他						11,930		小形打製石器・剥片・鉄片
YC		SB1	弥生中期	円形	2/3	4.3×-	炉(中央)、SZ3が重複	1,640		剥片・扁平片刃・土製円板
YC		SB2	弥生中期	円形	1/2	4.5	炉(中央)、SD5が重複	840		剥片・砥石
YC		SB3	弥生中期	円形	全	4.5	炉(中央)	2,680		剥片・土製円板
YC		SB4	弥生中期	円形	1/3		炉(中央)、SB5に重複	2,350	1	剥片・土製円板
YC		SB5	弥生中期	円形	2/3	-×4.2	SB4が重複	3,880	2	剥片・土製円板・ミガキ石
YC		SB6	弥生中期	円形	1/2	5	炉(中央)	5,093	3	刃器・石核・砥石・敲石・剥片・土製円板・管玉
YC		SB7	弥生中期	円形	2/3	5.2	炉(3箇所)、SB9・10に重複	14,210	2	扁平片刃・刃器・敲石・剥片・土製円板
YC		SB8	弥生中期	円形?	一部		SB11が重複	17,430	9	打製石器・石核・剥片
YC		SB9	弥生中期	方形	一部		SB7が重複	1,060		剥片
YC		SB10	弥生中期		一部		SB7が重複	180		
YC		SB11	弥生中期	円形?	一部		SB8に重複	690	2	剥片
YC	西	SD1	平安			幅1.4		620	1	
YC		SD5	中世			幅3.4	Ⅲ SD19・25に連続?	21,350	7	扁平片刃・打製石器・砥石・石臼・剥片・北宋銭ほか
YC		SD6	中世			幅2.2	SD5に接続	1,940	3	剥片・鉄片・種子
YC		SD8	中世	不整形		幅1.0	窪みに近い	60		扁平片刃
YC		SD12	弥生後期				SD13の上層部分	380	1	
YC		SD13	弥生後期			幅1.3		890		
YC		SD18	中世			幅1.1		1,500	1	剥片・北宋銭
YC		その他 SD						1,360		石包丁・不明磨製石器・剥片
YC	西	SK8	弥生後期	円形		径0.5		180	1	剥片
YC		SK16	平安	不整形				250	1	
YC		SK18	平安	不整形				190	1	
YC		SK19	平安	不整形				50	1	
YC		SK22	平安	円形		径2.0		760		
YC		SK50	弥生後期	楕円形		0.9×2.2		1,010		
YC		SK58	弥生後期	楕円形		1.2×1.8		880		剥片
YC		その他 SK						5,440		大型蛤刃・刃器・剥片・鉄片・木片・種子
YC		SR1	弥生~	蛇行		幅25~30	河川跡(埋没河川)	52,690	25	大型蛤刃・小形片刃・石鏃・砥石・石製鉢・土製円板・小玉ほか
YC	西	SX1	弥生後期			2.0内外	小礫・土器集中、周溝墓間連施設?	7,230	6	
YC	西	SZ1	古墳前期	方形		幅0.6	一辺5m前後	9,500	4	剥片・土製円板
YC		SZ2	古墳前期	方形		幅2.0	一辺10m前後	870		剥片
YC		SZ3	弥生後期	円形		幅1.1	径10m前後	2,720	2	剥片
YC		SZ4	古墳中期?	方形?		幅2.0		12,100	7	扁平片刃・剥片・土製円板
YC		検出面他						20,330	11	敲石・剥片・キセル

(合計 847,031 g 347個)

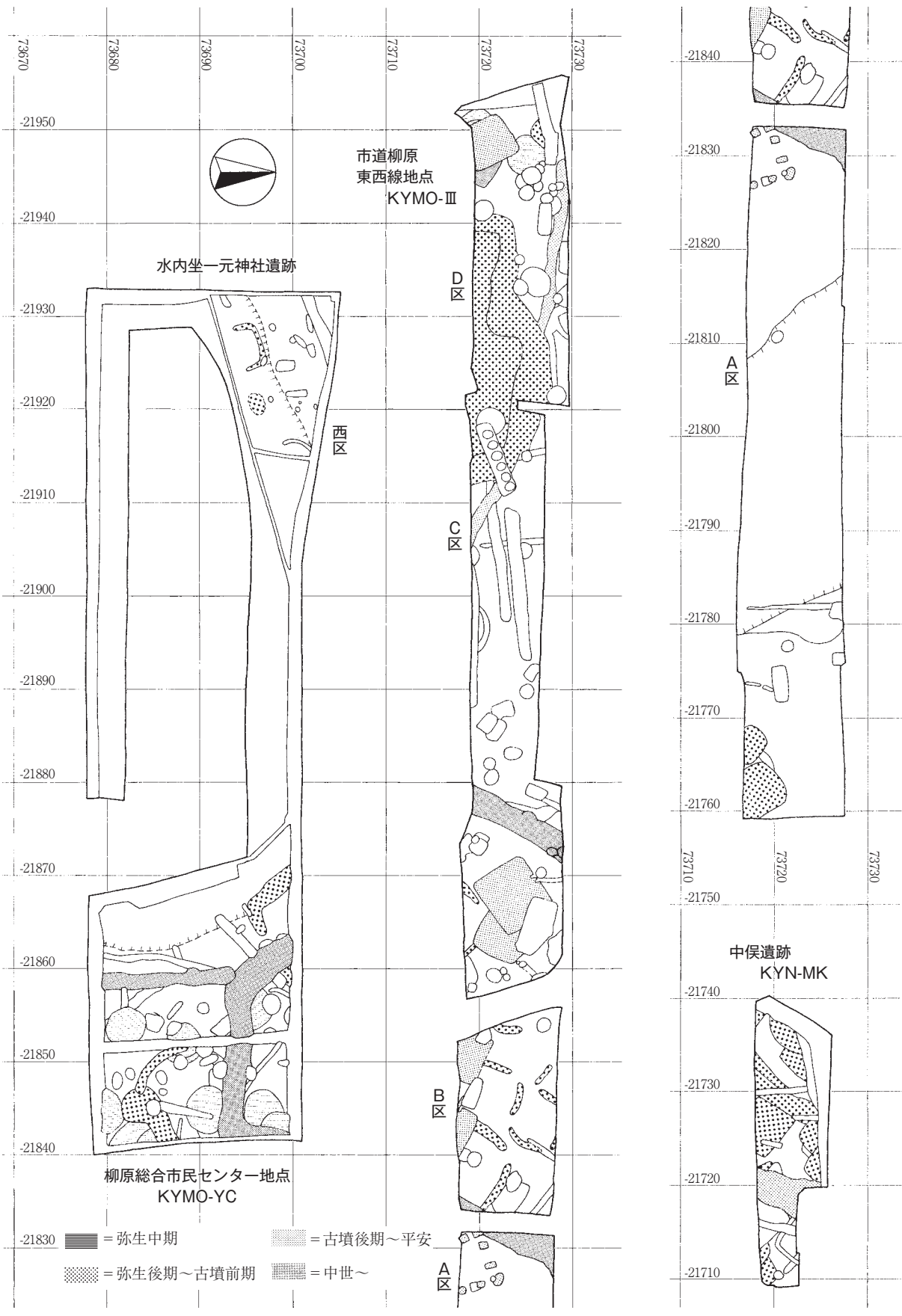


図6 遺構分布図 (1 : 600)

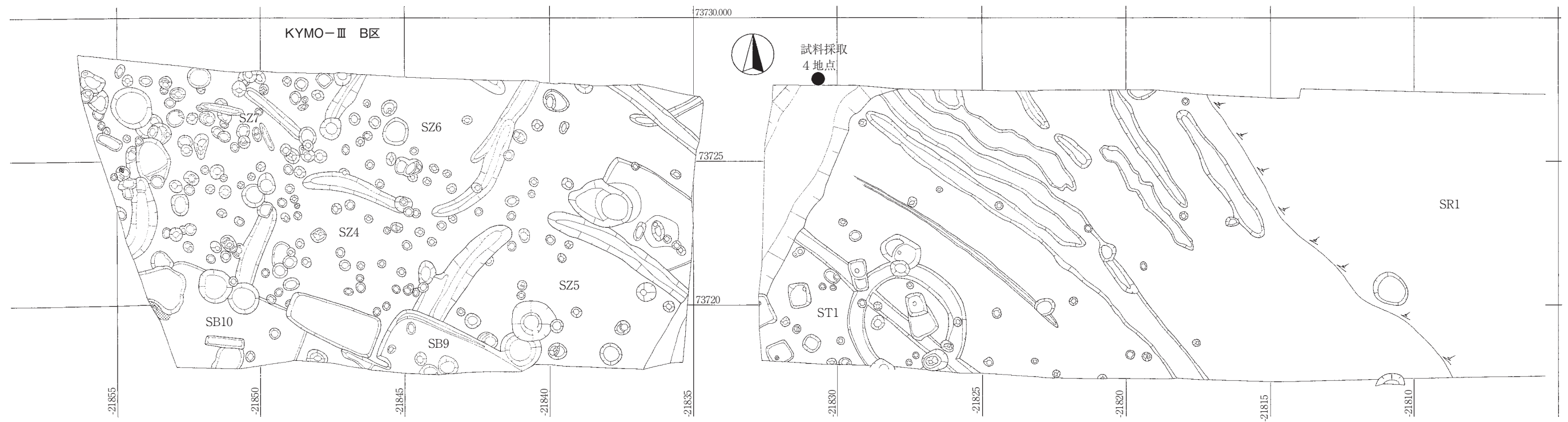
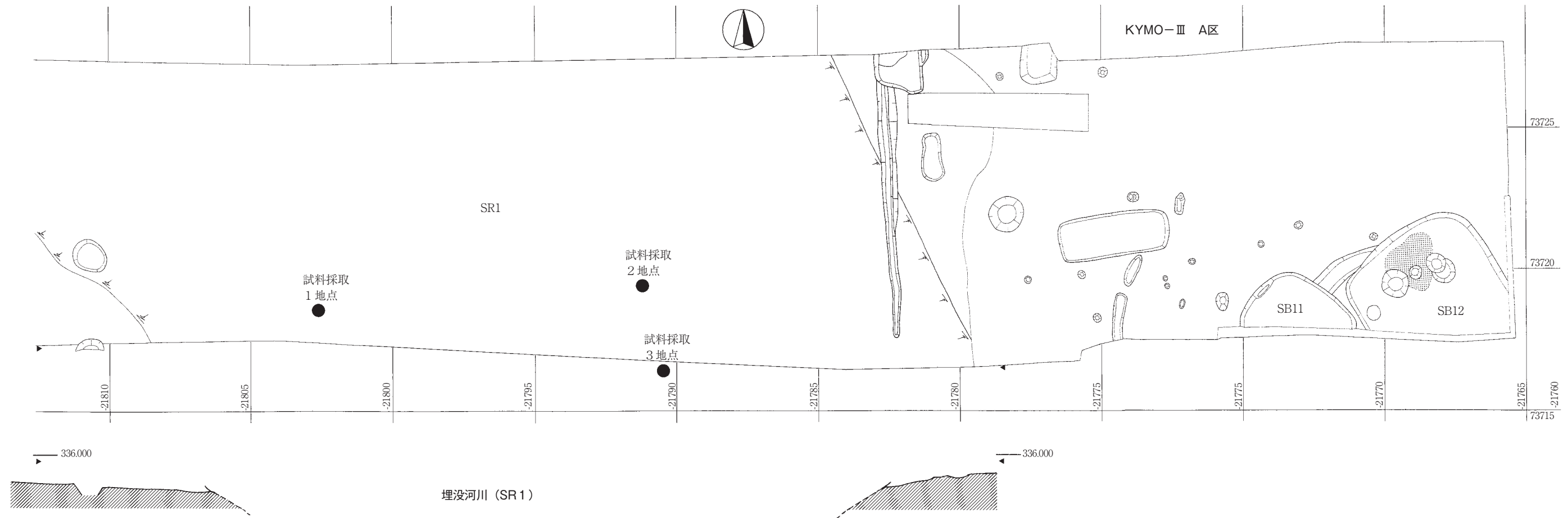


図7 遺構全体図・市道柳原東西線地点① (1:150)

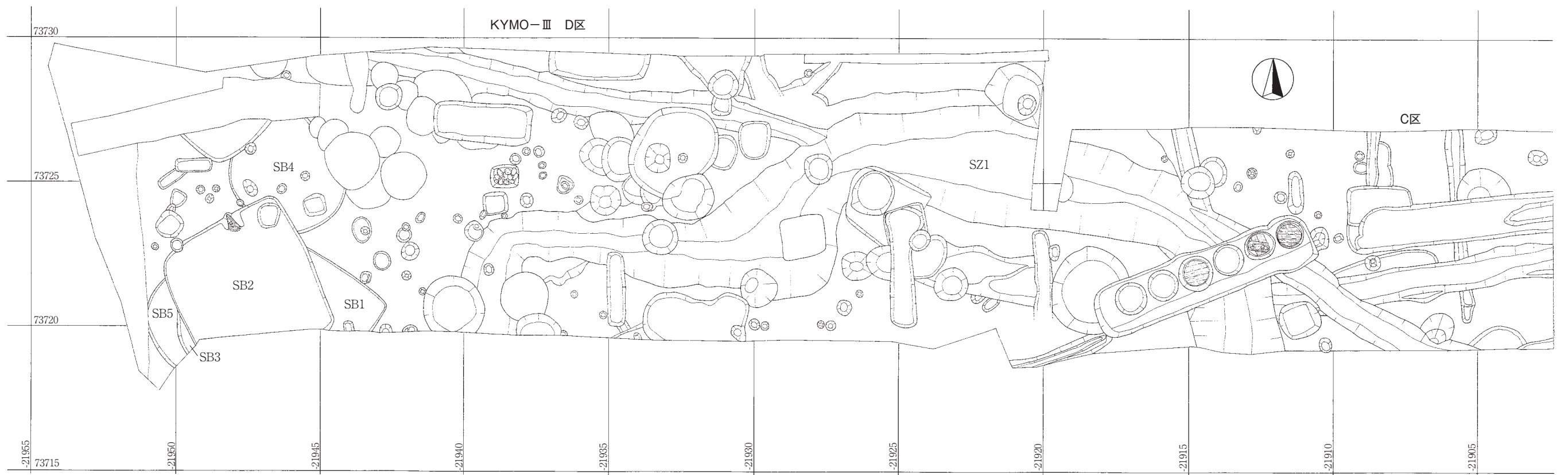
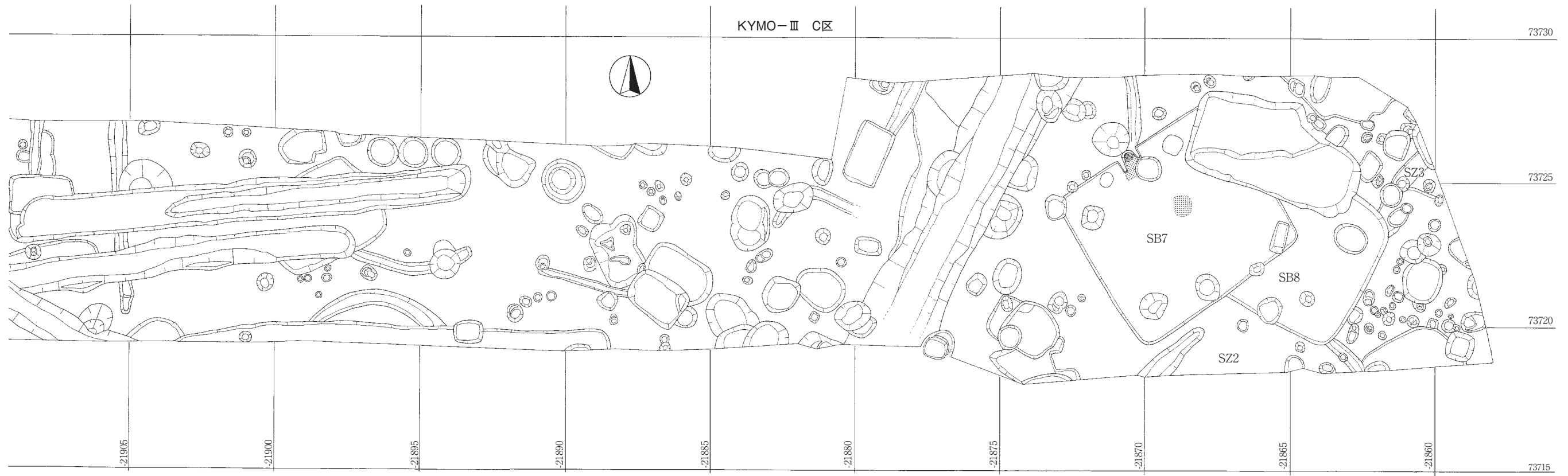
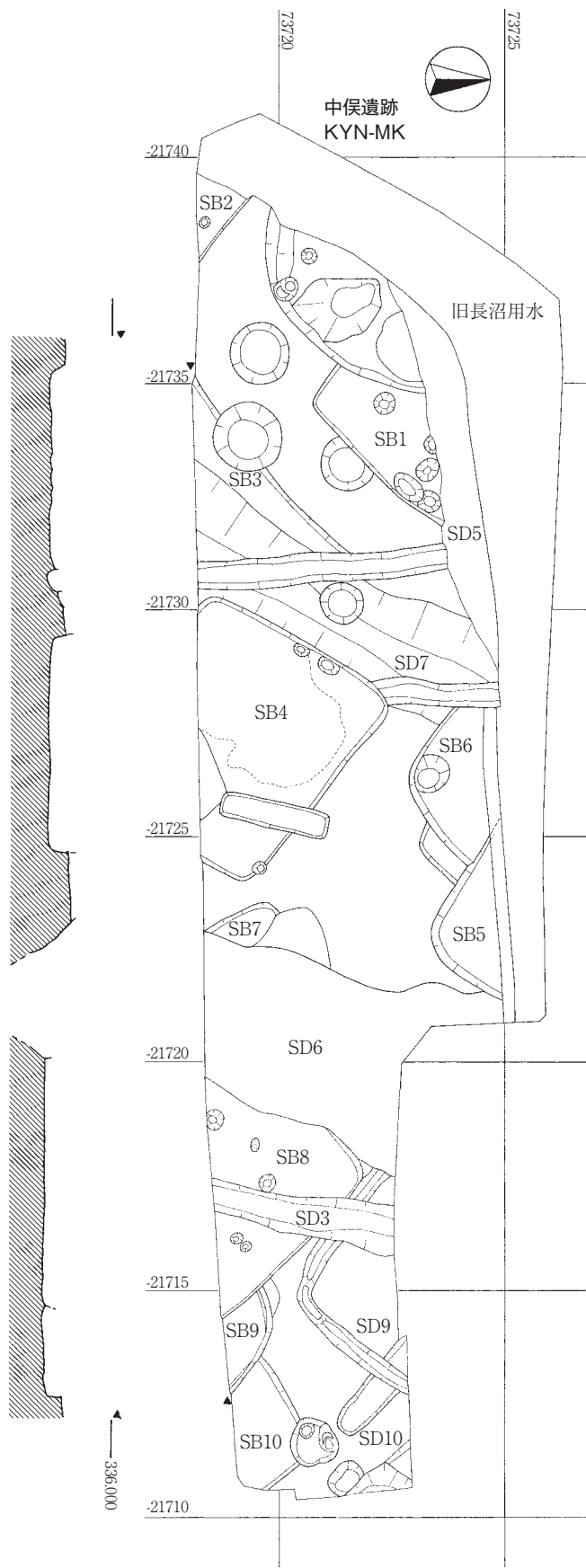


图8 遺構全体図・市道柳原東西線地点② (1:150)



KYN-MK全景 (西から)



KYN-MK全景 (東から)

図9 遺構全体図・市道柳原東西線地点③ (1:150)

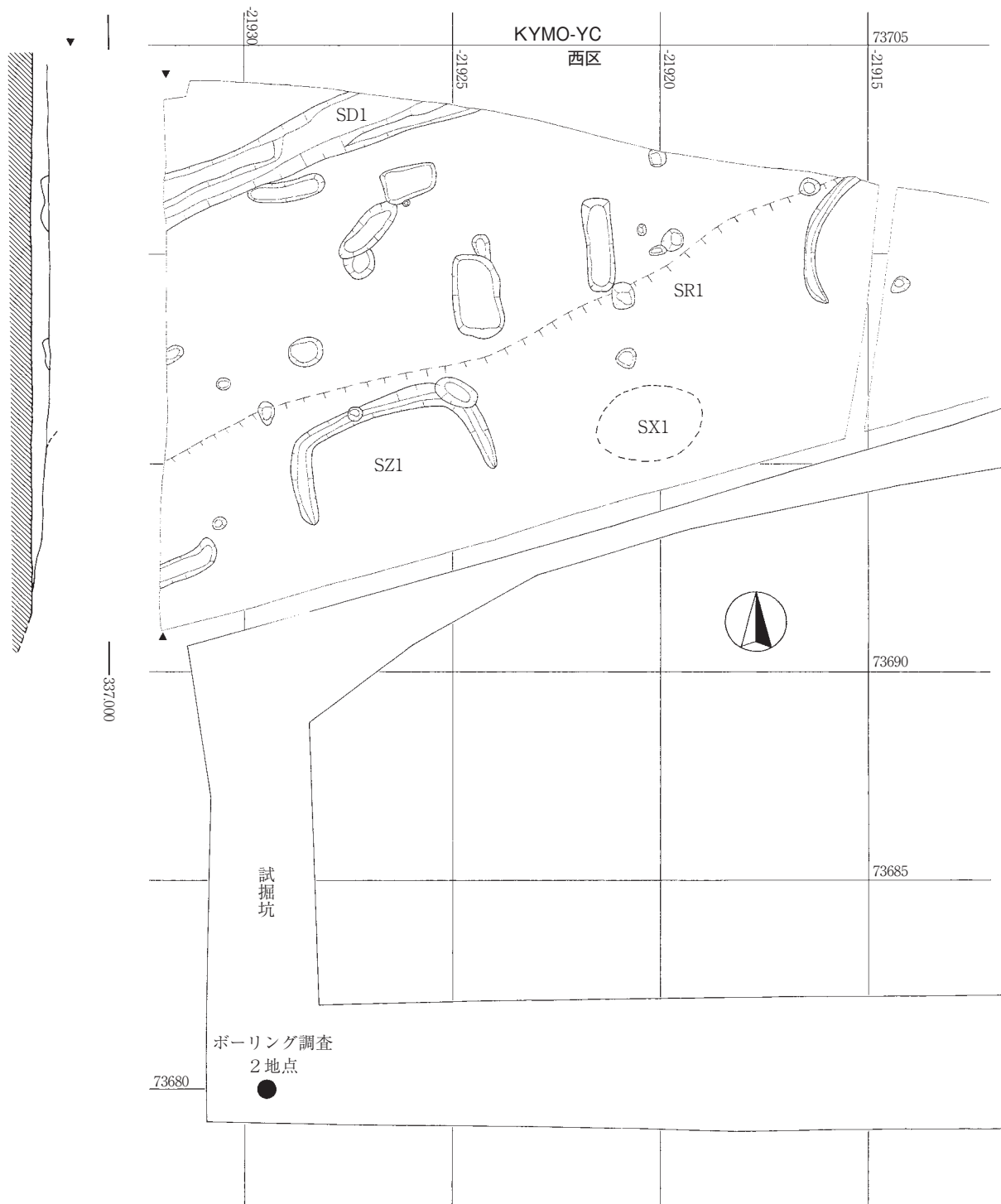


図10 遺構全体図・柳原総合市民センター地点①（1：150）



図11 遺構全体図・柳原総合市民センター地点②（1：150）

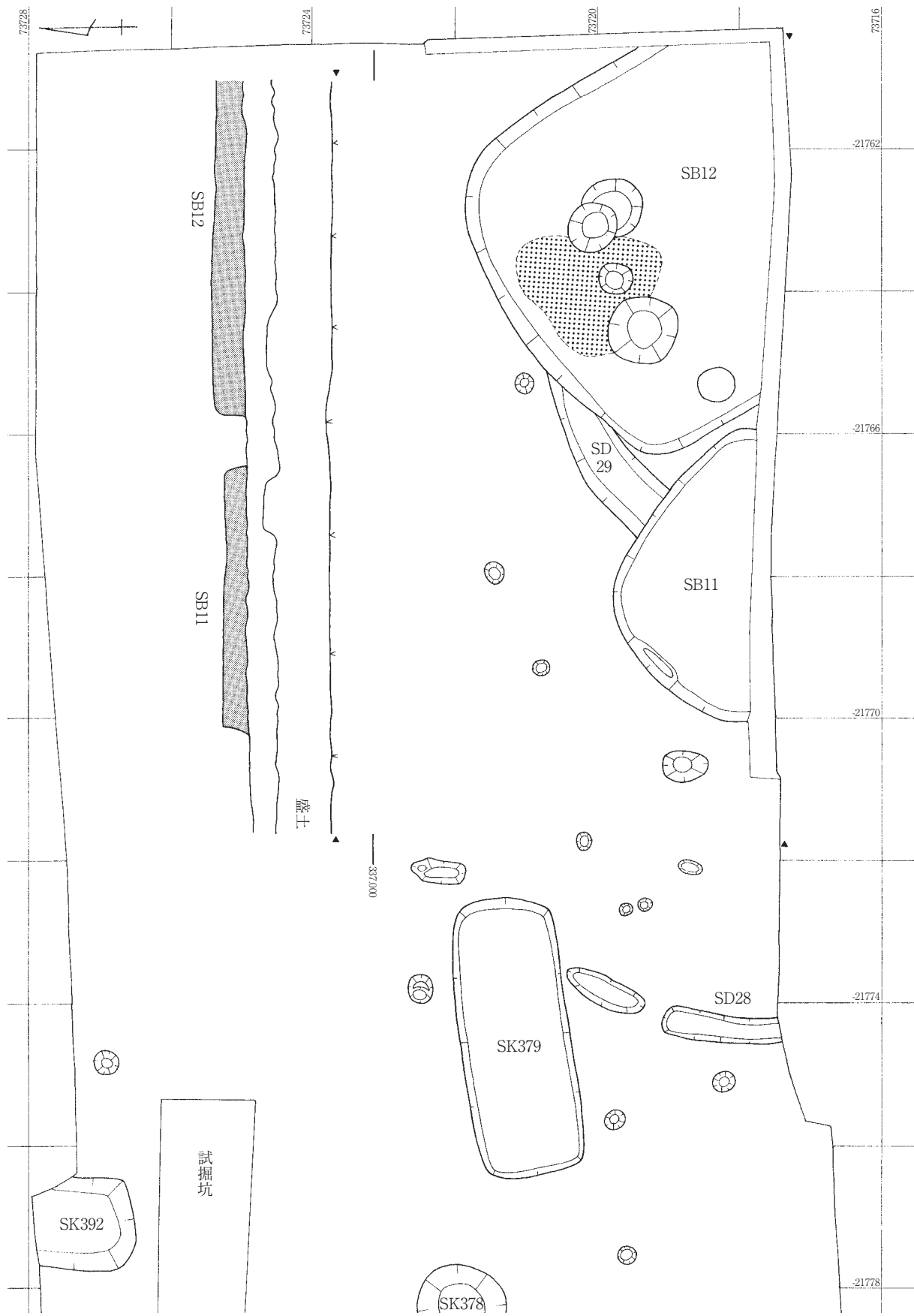


図12 遺構実測図・KYMO-Ⅲ① (1 : 80)

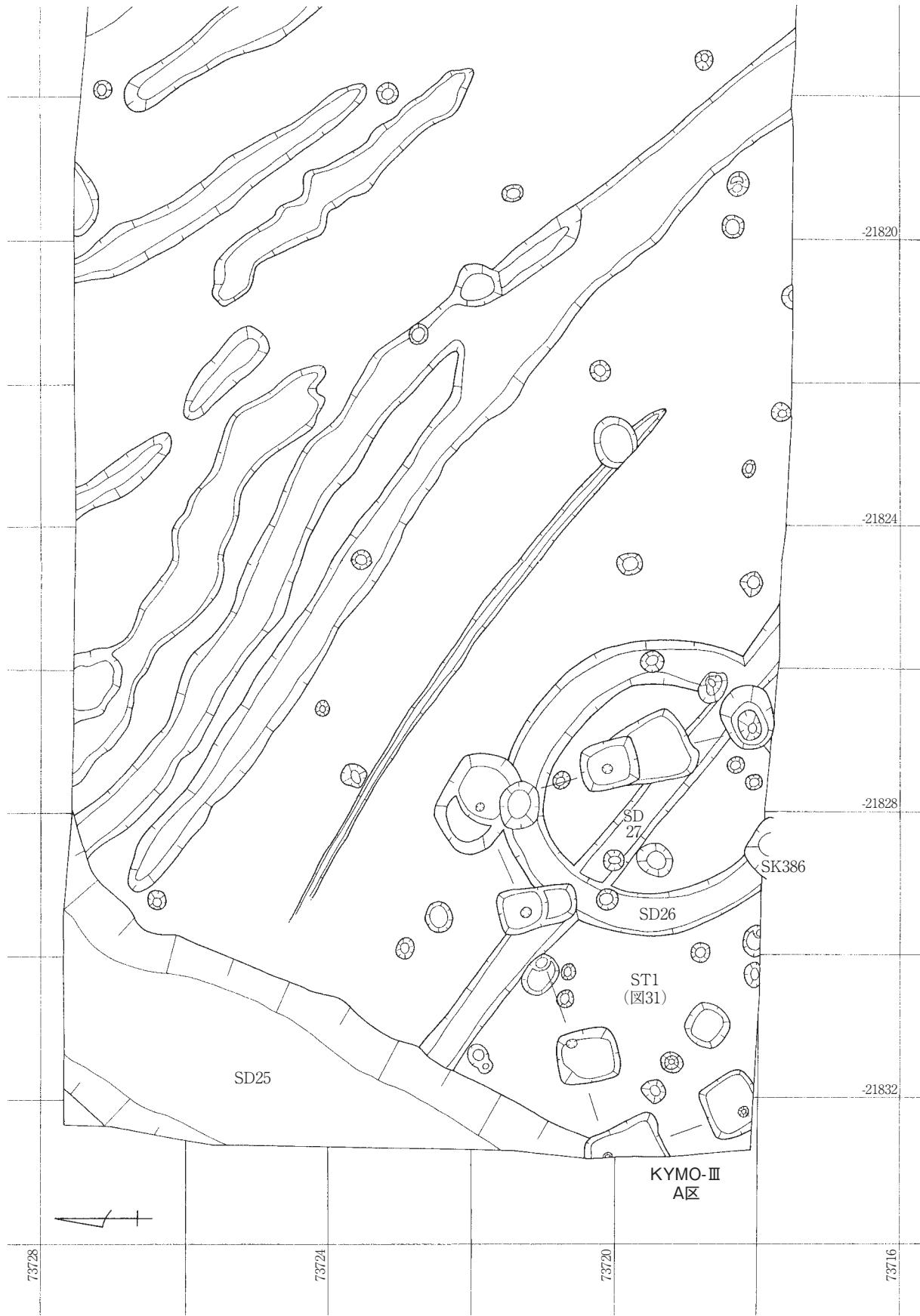


图13 遺構実測図・KYMO-Ⅲ② (1 : 80)



図14 遺構実測図・KYMO-Ⅲ③ (1 : 80)

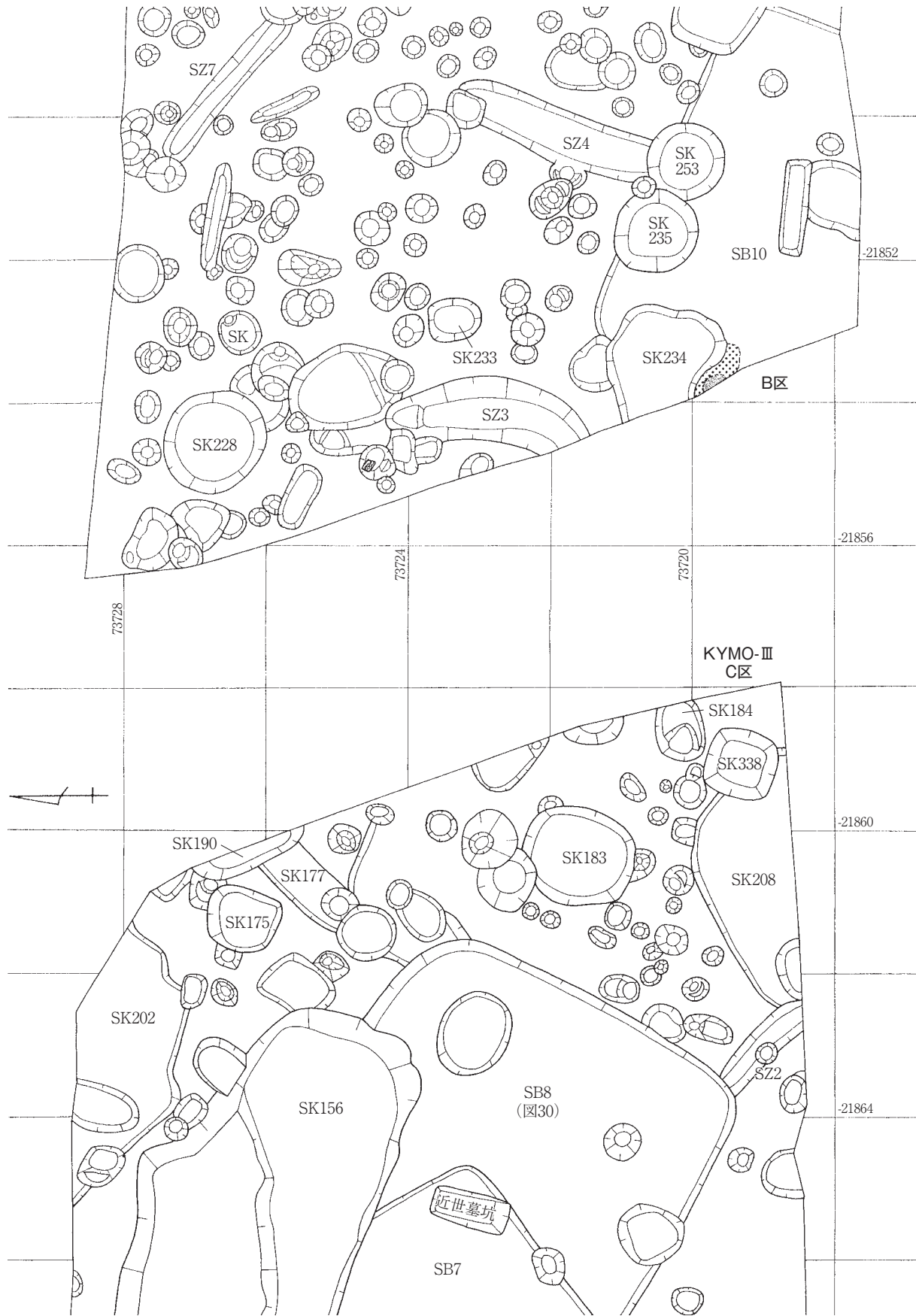


图15 遺構実測図・KYMO-Ⅲ④ (1:80)

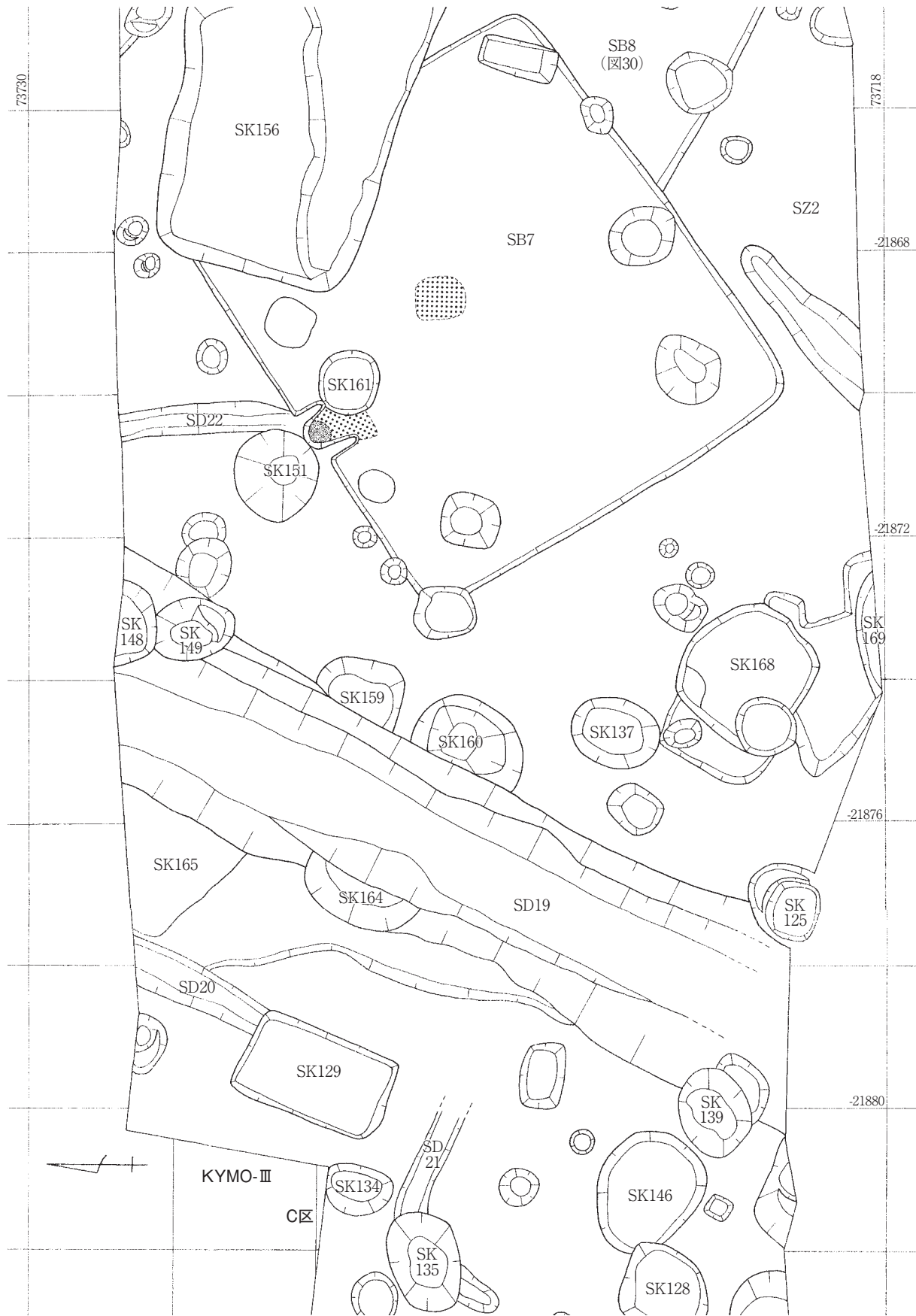


図16 遺構実測図・KYMO-III⑤ (1:80)

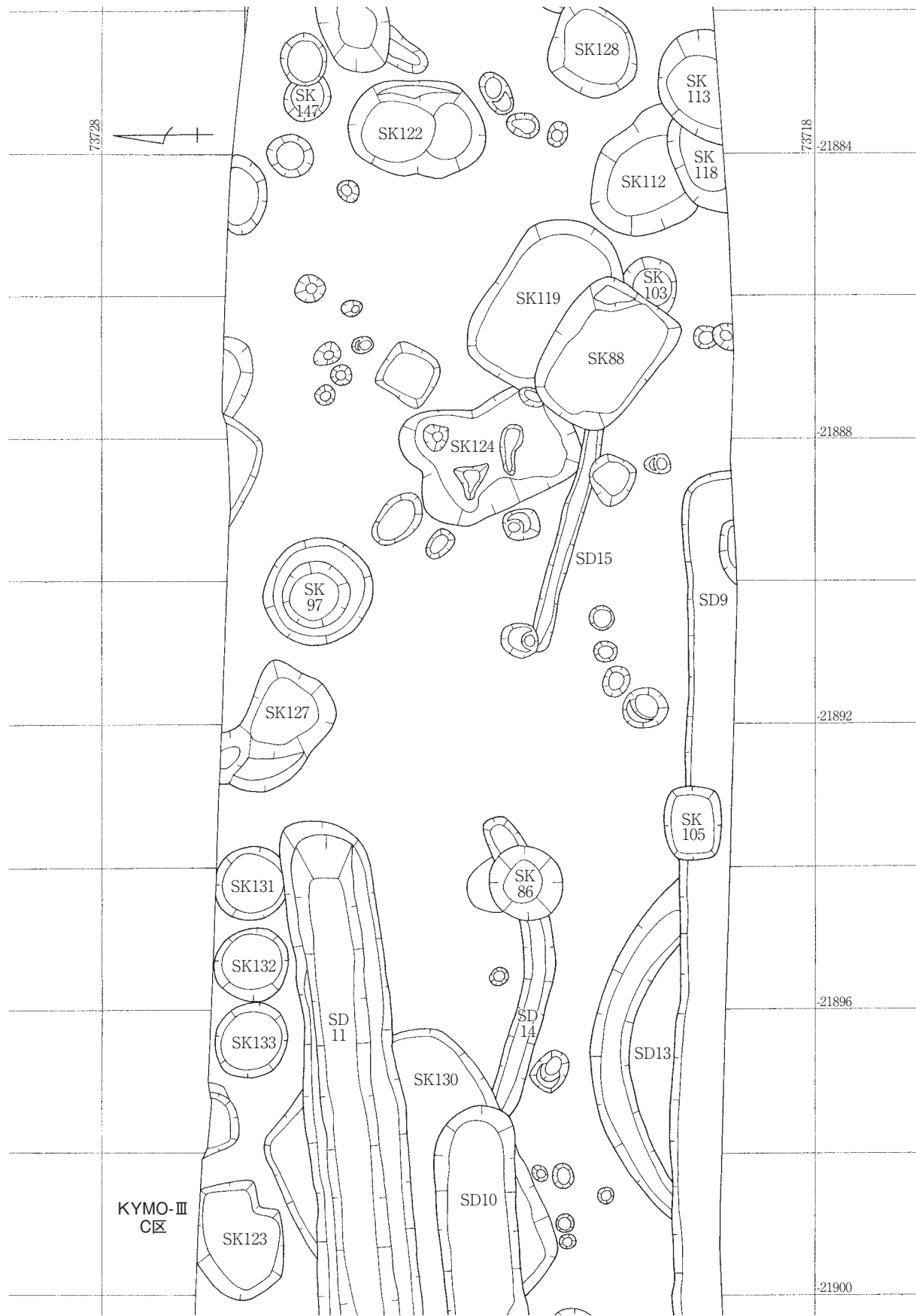


図17 遺構実測図・KYMO-Ⅲ⑥ (1 : 80)

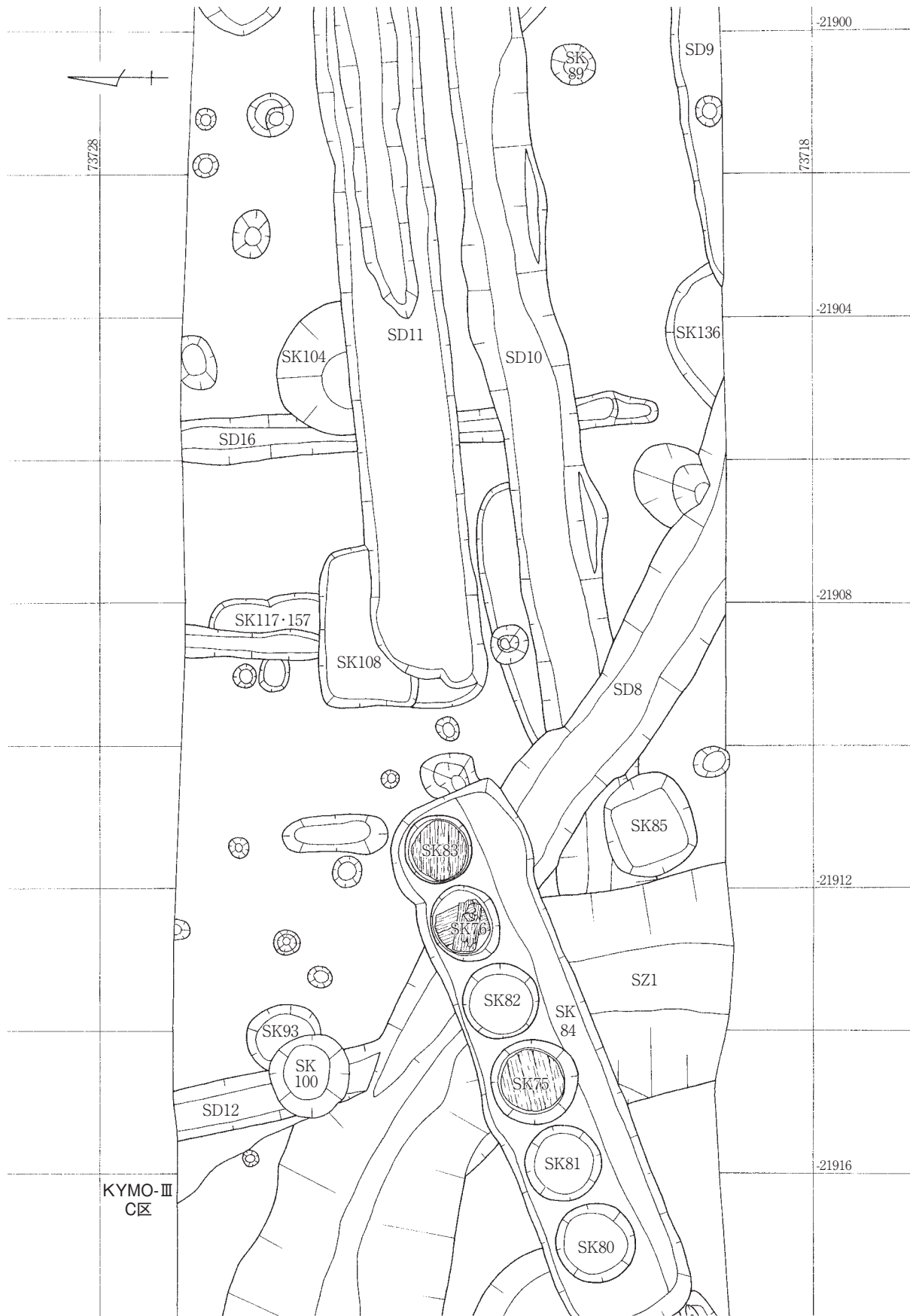


图18 遺構実測図・KYMO-III⑦ (1:80)

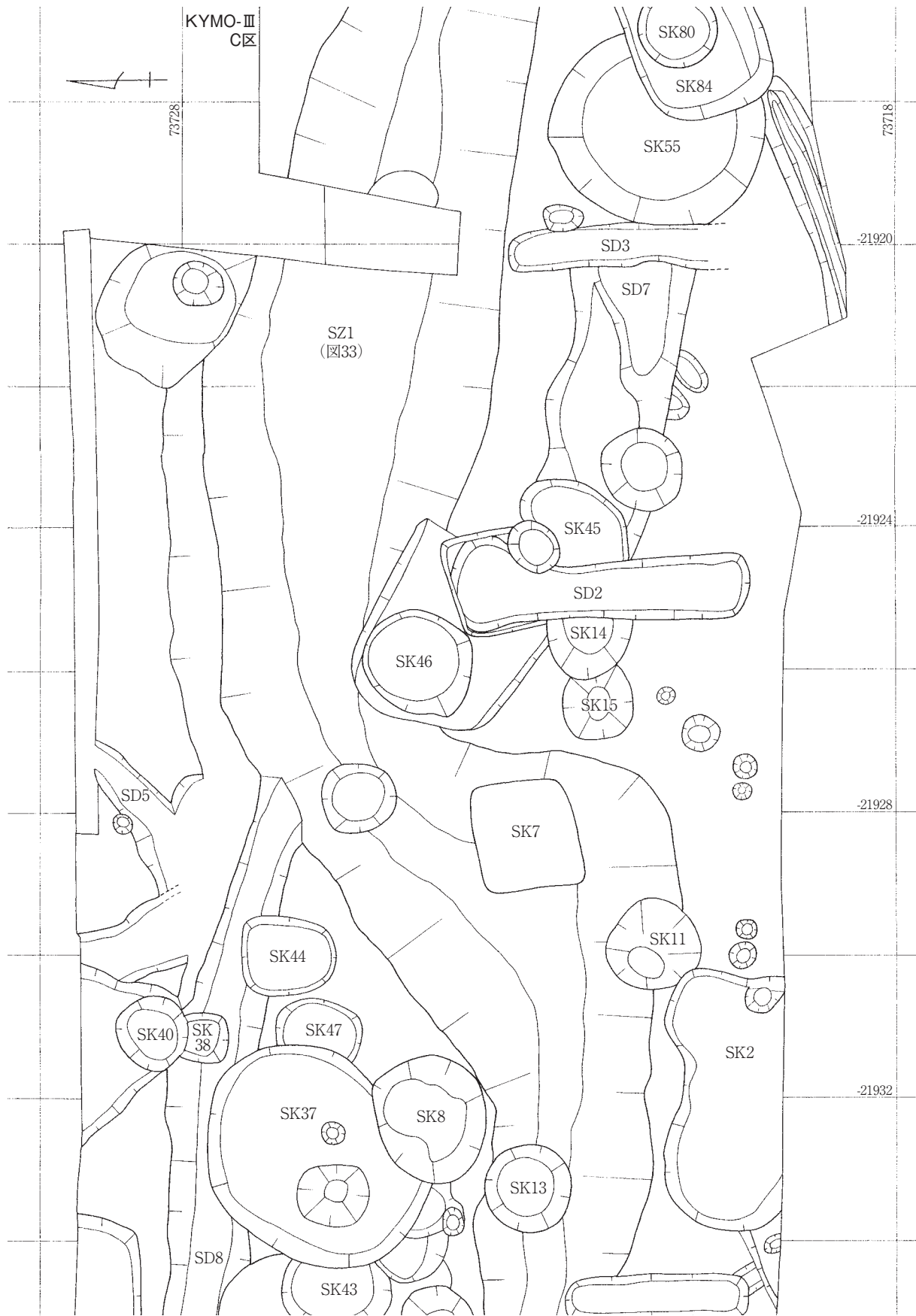


图19 遺構実測図・KYMO-III⑥ (1:80)



図20 遺構実測図・KYMO-Ⅲ⑨ (1:80)

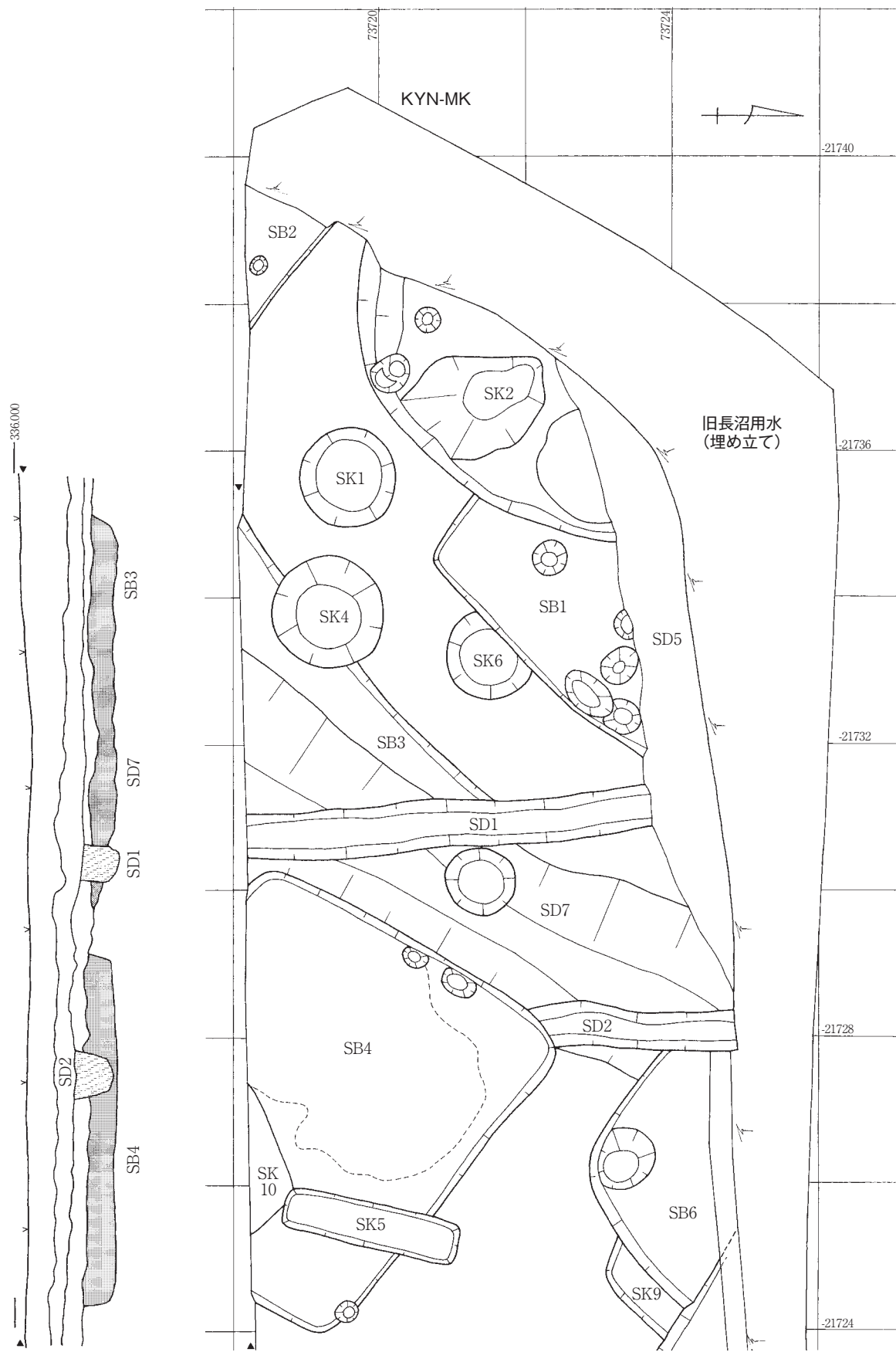


図21 遺構実測図・KYN-MK① (1:80)



図22 遺構実測図・KYN-MK② (1:80)

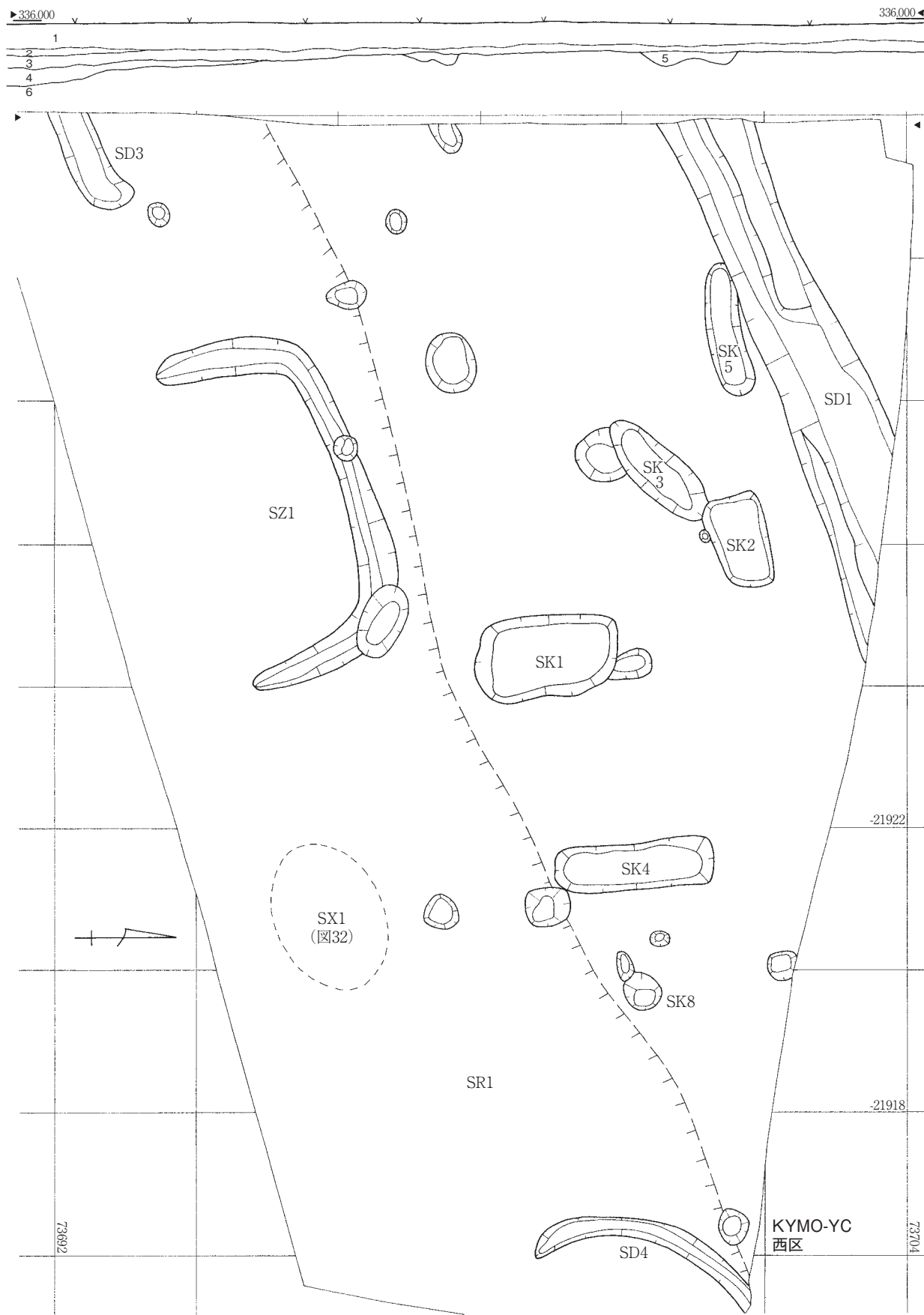


图23 遺構実測図・KYMO-YC① (1:80)

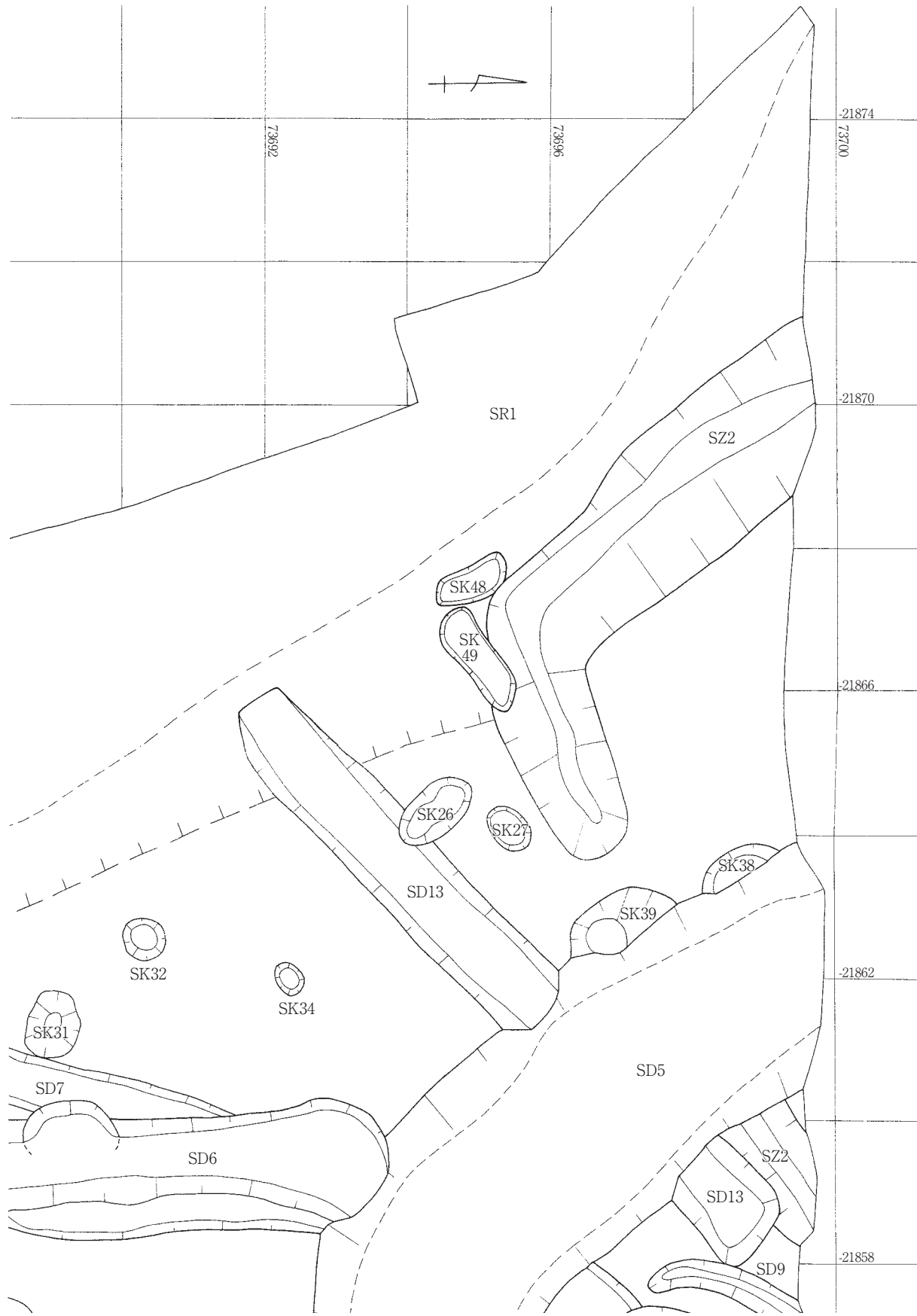


图24 遺構実測図・KYMO-YC② (1:80)



図25 遺構実測図・KYMO-YC③ (1:80)

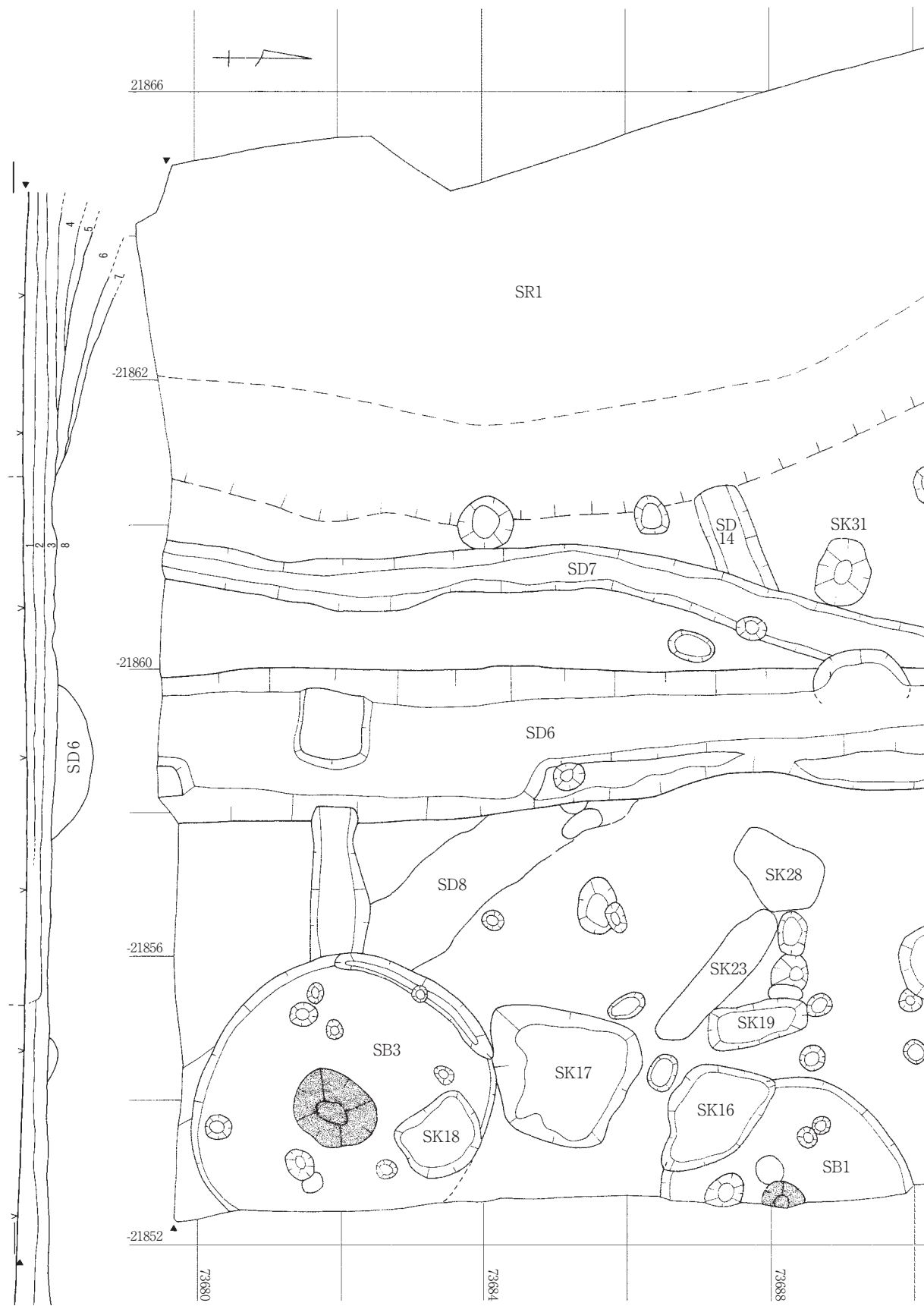


图26 遺構実測図・KYMO-YC④ (1:80)

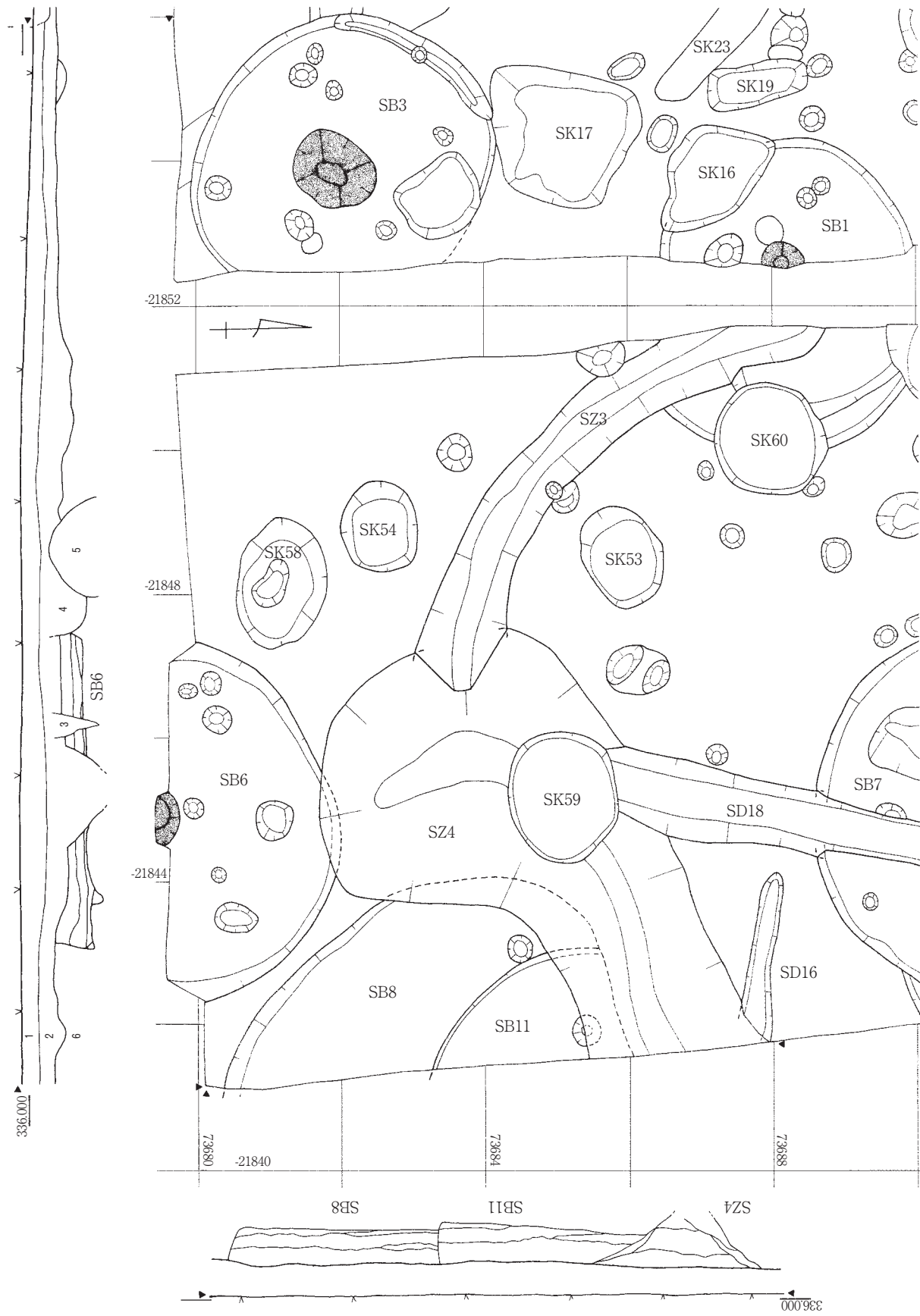


図27 遺構実測図・KYMO-YC⑤ (1:80)

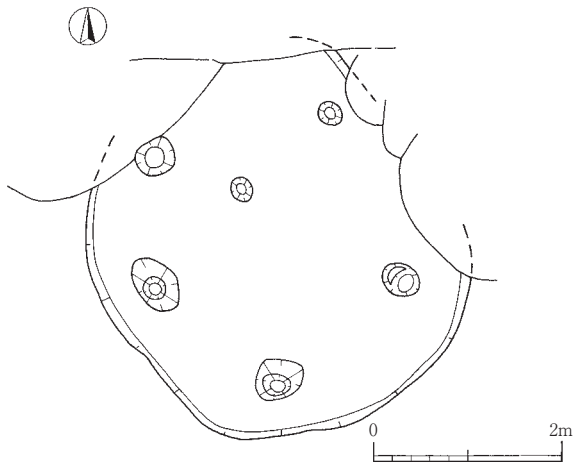


图28 KYMO-III SB4 实测图 (1:80)



SB4 土器出土状况

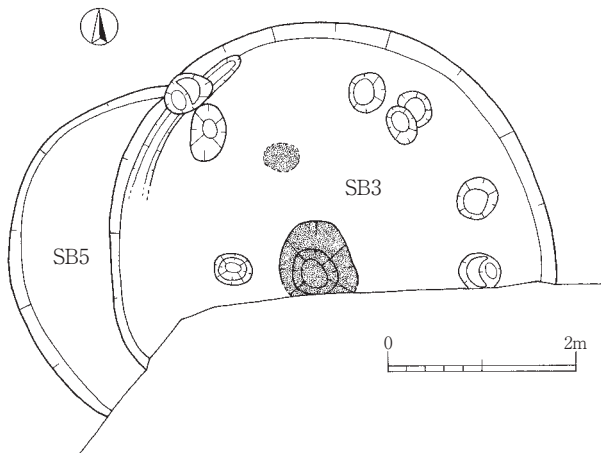


图29 KYMO-III SB3·5 实测图 (1:80)



SB4 完掘



SB3·5

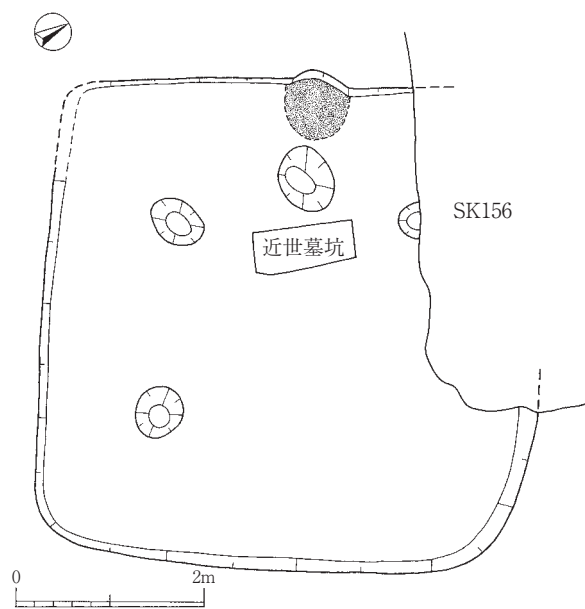


图30 KYMO-III SB8 实测图 (1:80)



SB8

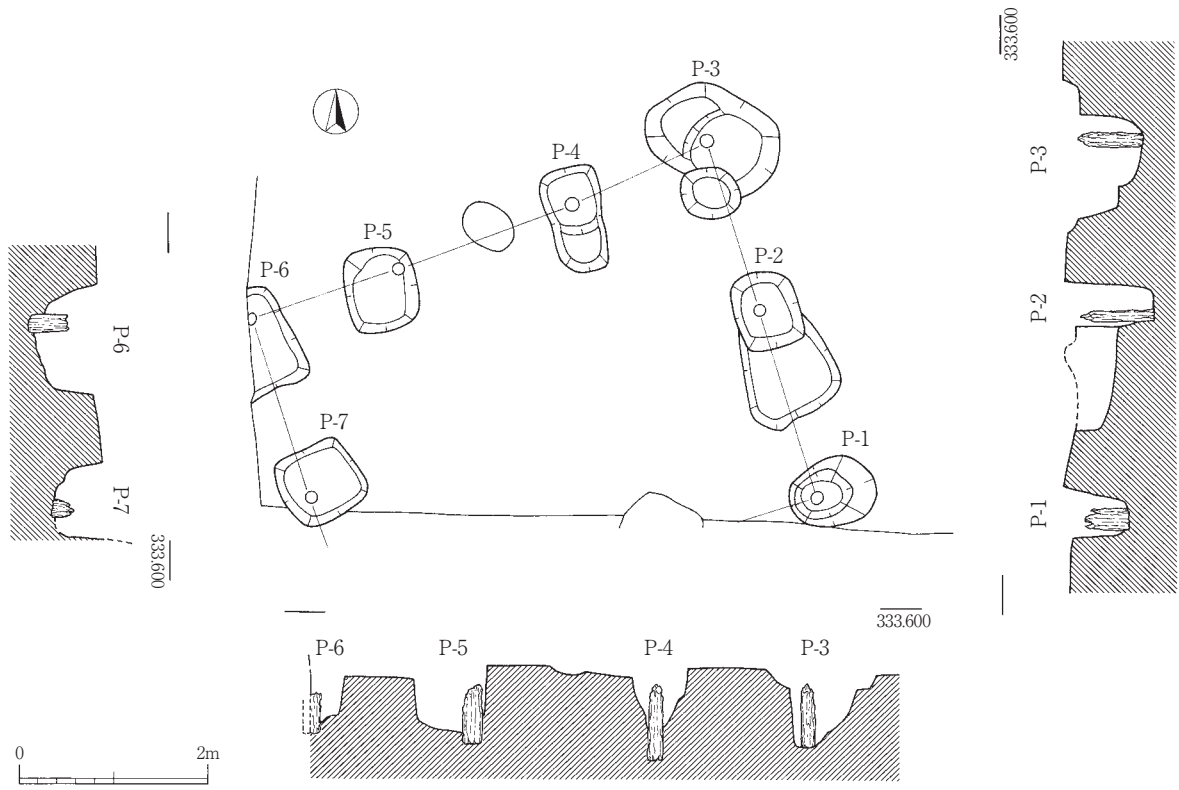
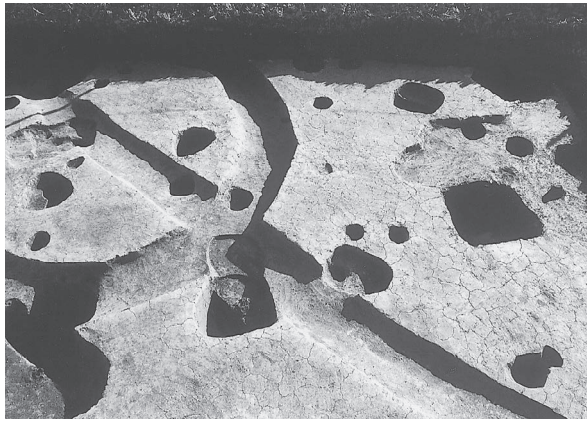


図31 KYMO-Ⅲ ST1 実測図 (1:80)



ST1 検出状況



ST1 柱穴断ち割り状況



柱穴P.1断面



柱穴P.2断面



柱穴P.5断面

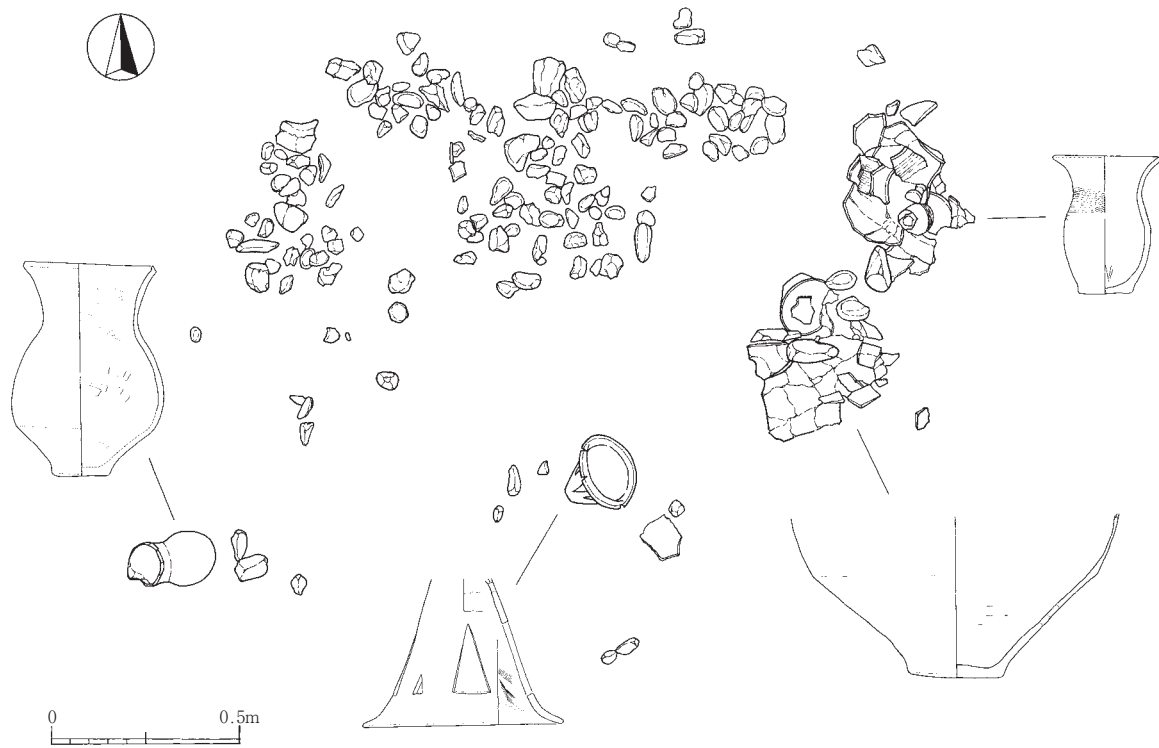
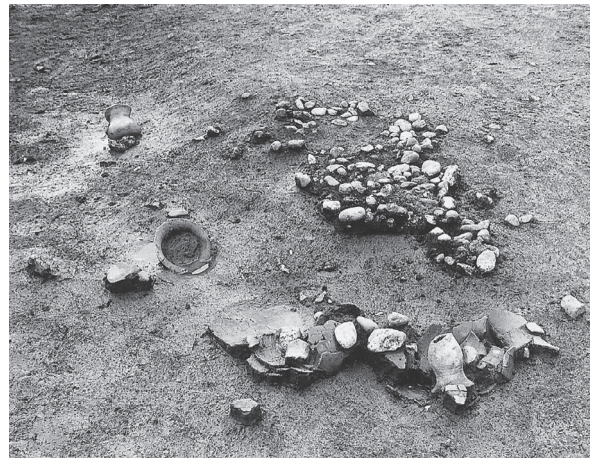


図32 KYMO-YC SX1 実測図 (1 : 20)



SX1 (南西から)



SX1 (東から)



土器出土状態 (上面)



土器出土状態 (下面)

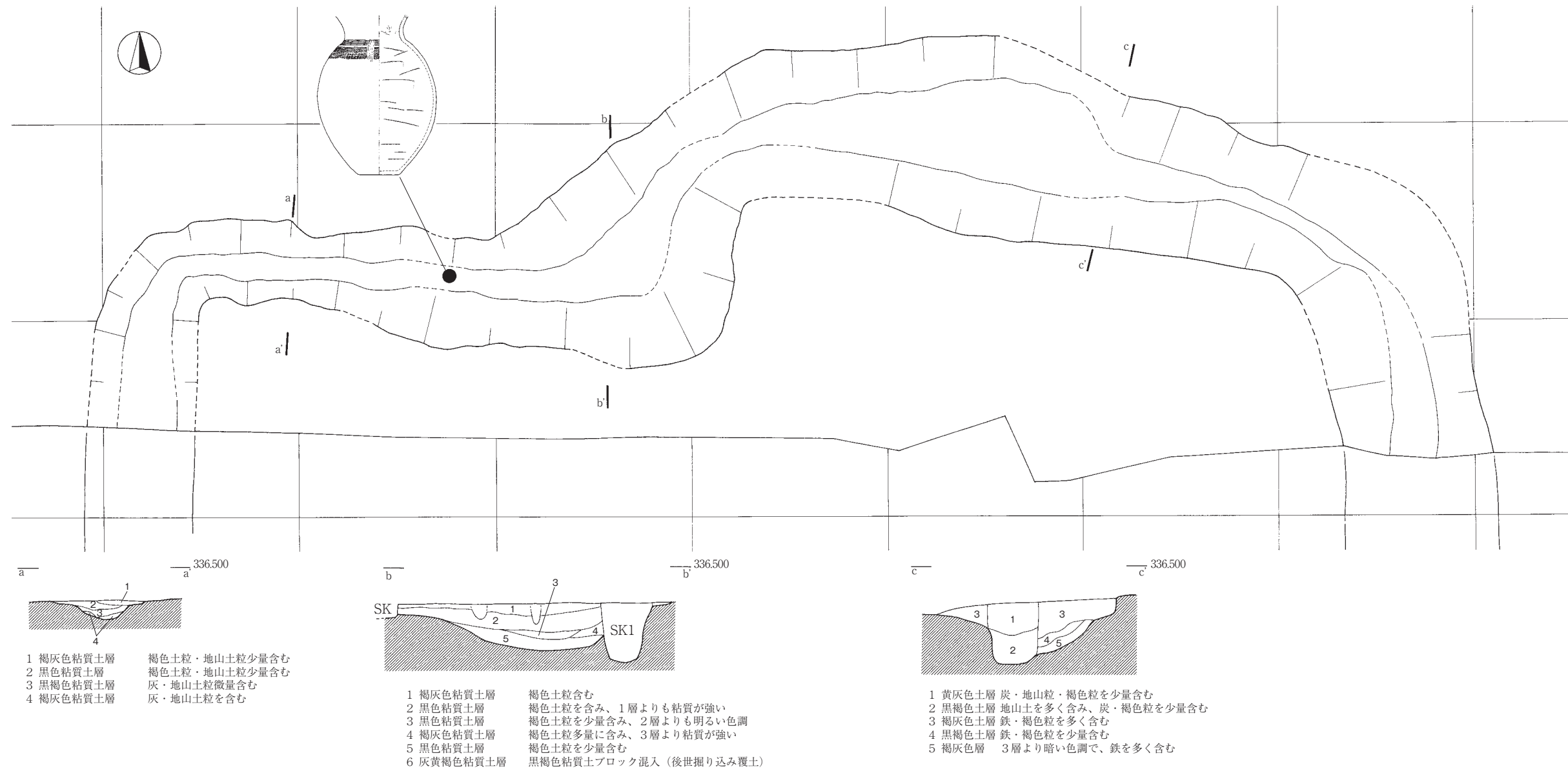


図33 KYMO-III SZ1 実測図 (1:100)



SZ1 土層及び土器出土状況

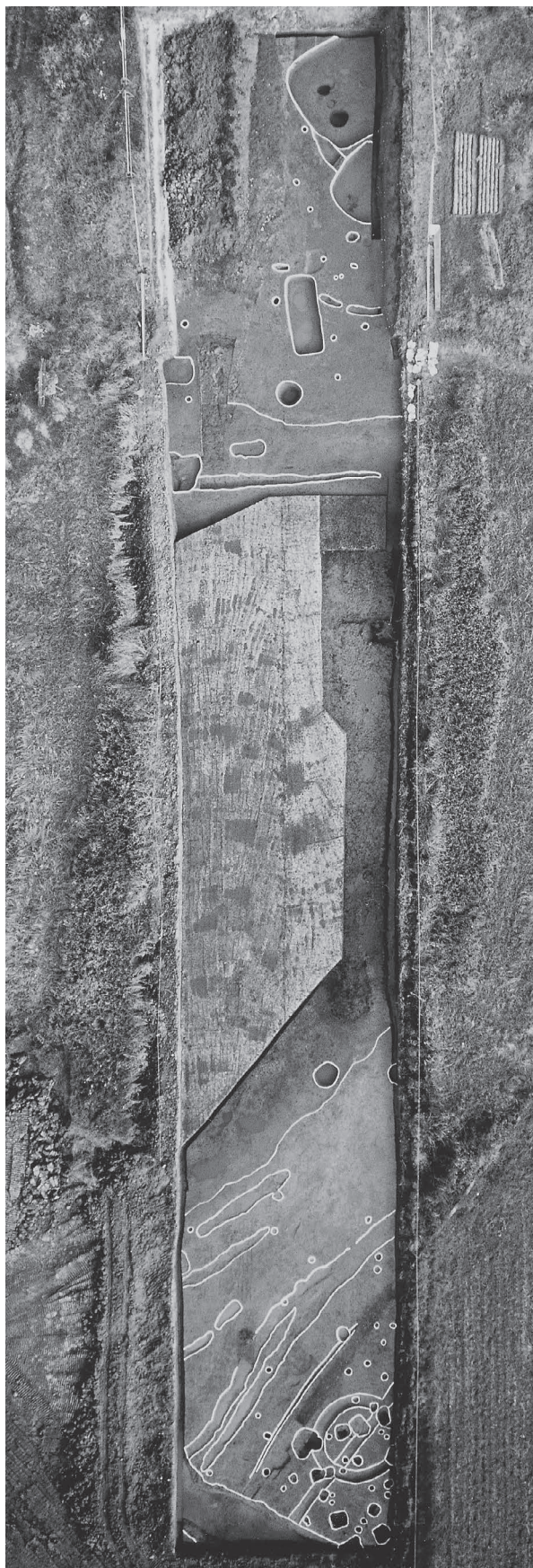


周溝検出状況（北東から）

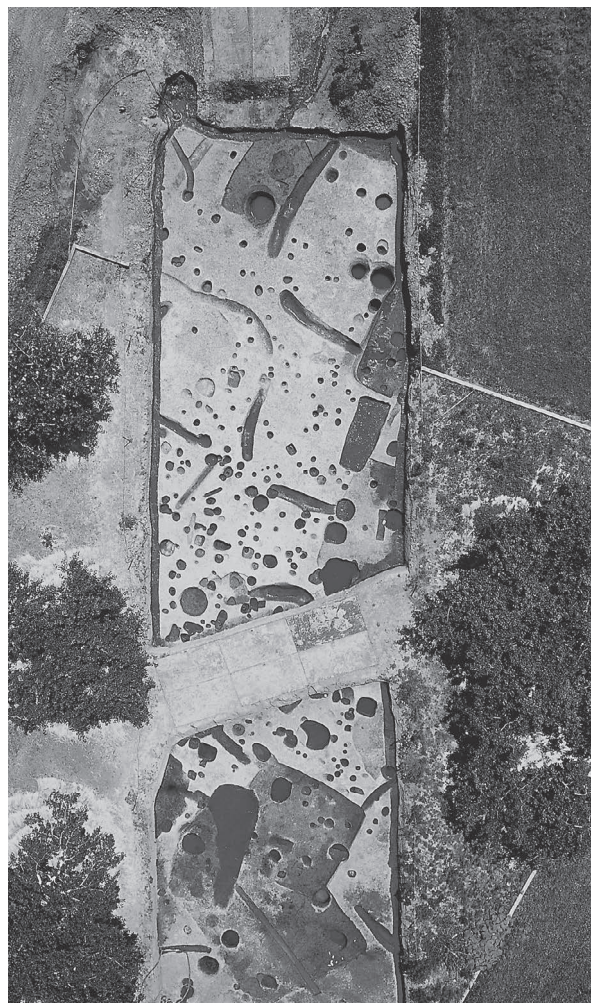


周溝検出状況（北西から）

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真①



KYMO-Ⅲ A区 空撮



KYMO-Ⅲ B・C区 空撮

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真②

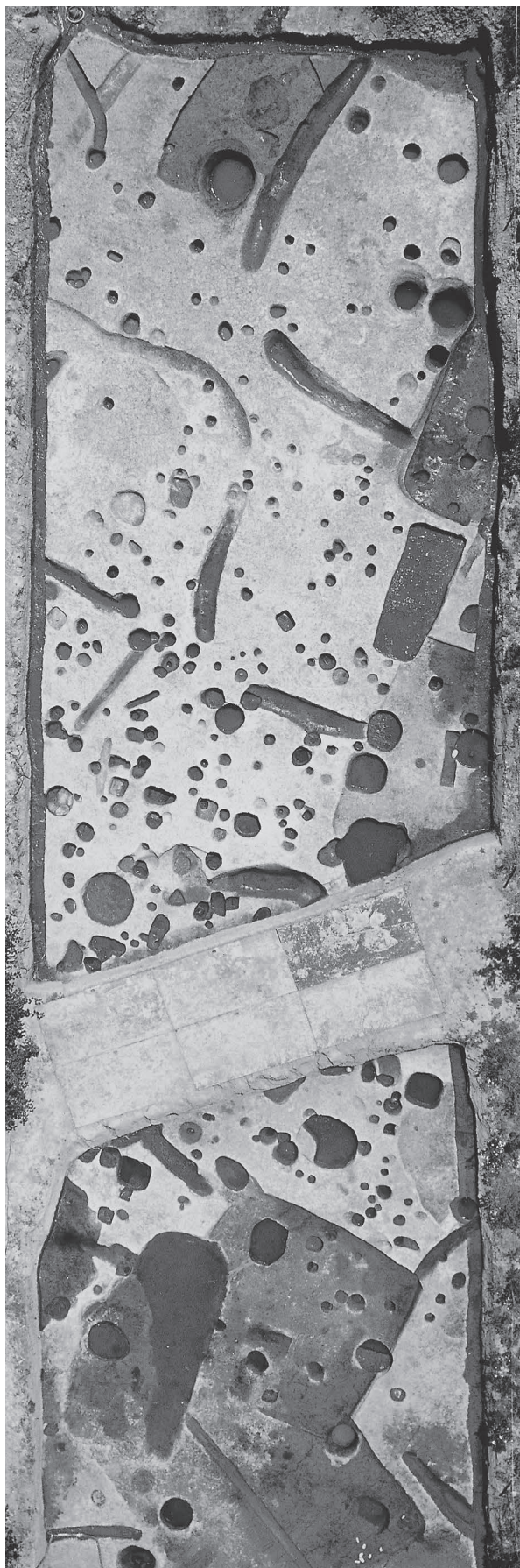


KYMO-Ⅲ C区 空撮

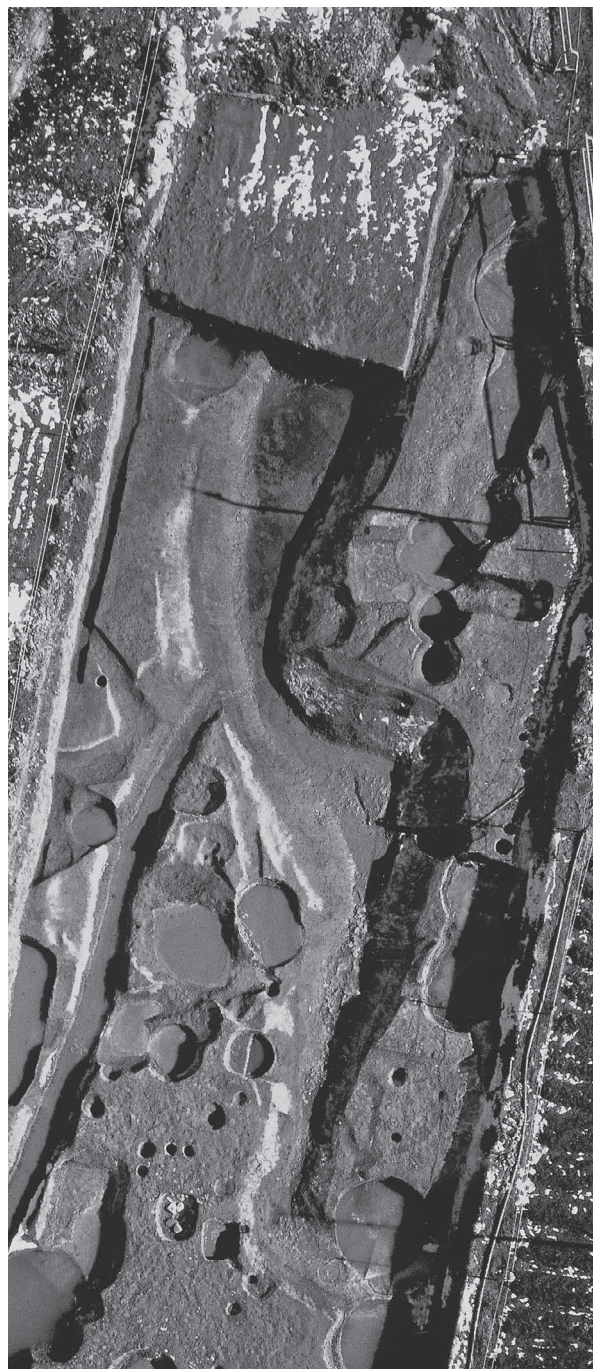


KYMO-Ⅲ D区 空撮

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真③



KYMO-Ⅲ B・C区周溝墓群 (SZ 2~6) 空撮



KYMO-Ⅲ D区前方後方形周溝墓 (SZ 1) 空撮

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真④



D区 SB2



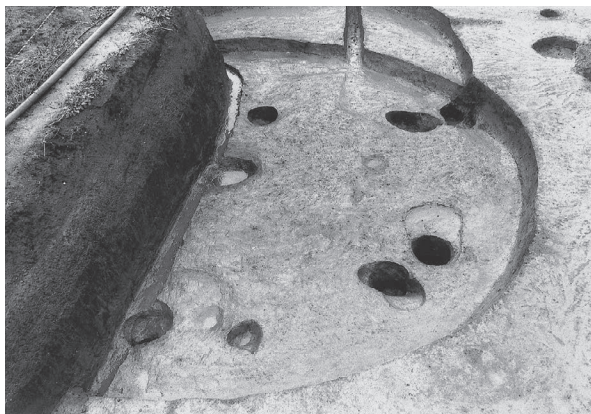
D区 SB2カマド



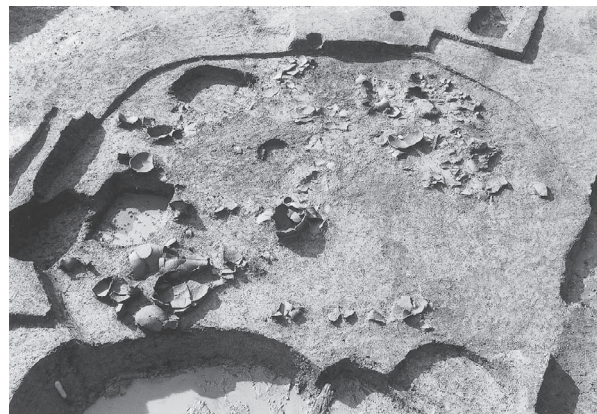
D区 SB1~5(西から)



D区 SB1~5(東から)



D区 SB3・5



D区 SB4



C区 SB7・8(上層)



C区 SB7・8(下層)

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真⑤



B区 SB9



B区 SB9カマド



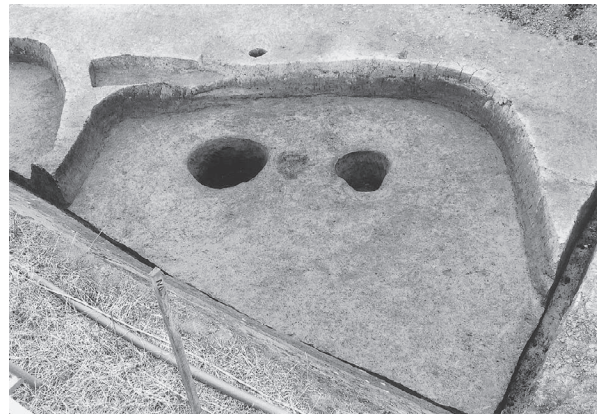
B区 SB10



A区 SB11・12



A区 SB12(上層)



A区 SB12(下層)



A区 ST1・SD26



KYMO-Ⅲ C区 空撮

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真⑥



B区 SZ 2~6 (西から)



B区 SZ 2~6 (東から)



B区 SZ 2~6 (南から)



B区 SZ 2~6 (北から)



D区 SZ 1 (西から)



D区 SZ 1 (東から)



C区 全景 (西から)



C区 SZ 1 (西から)

市道柳原東西線地点 (KYMO-Ⅲ) 遺構写真⑦



B区 SK247 (土器出土状況)



B区 SK247 (土器出土状況)



C区 SK75~84 (肥溜め6連)



C区 SK83 (肥溜め桶)



C区 SK117・157 (墓坑)



C区 SK117・157 (墓坑)



C区 近世墓坑上面 (SB8)



C区 近世墓坑内人骨 (SB8)

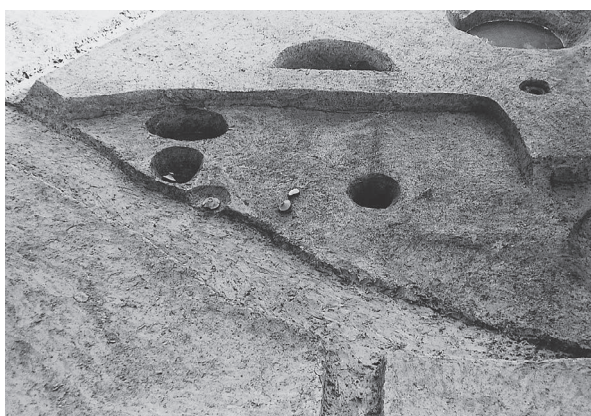
市道柳原東西線地点 (KYN-MK) 中俣遺跡 遺構写真



全景 (上層・西から)



全景 (下層・西から)



SB 1



SB 1 (遺物出土状況)



SB 8~10



SB 7・SD 6



SB 8~10・SD 9



SD 6 (土層断面)

柳原総合市民センター地点（KYMO-YC）遺構写真①



KYMO-YC 空撮

柳原総合市民センター地点（KYMO-YC）遺構写真②



上層遺構検出状況（北東から）



上層遺構検出状況（南東から）



SB1



SB2



SB3



SB3(炉)

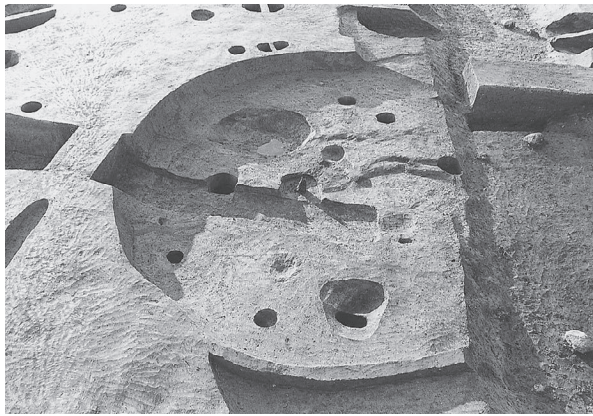


SB4・5



SB6

柳原総合市民センター地点（KYMO-YC）遺構写真③



SB7



SB8・11



SZ3



SZ3・4



SZ4



SZ4 SB8・11



SZ4 SB8・11 (土層断面)



SD5 SB4・5

柳原総合市民センター地点（KYMO-YC）遺構写真④



遠景（北東から体育館をみる）



遠景（東から一元神社をみる）



遠景（南東から小学校をみる）



遠景（南から小学校をみる）



全景（南西から）



全景（南東から）



全景（東から）



全景（北から）

柳原総合市民センター地点 (KYMO-YC) 遺構写真⑤



SR1 (埋没河川、南西から)



SR1 (埋没河川、北西から)



SR1 土層断面 (南壁)



西区 全景 (東から)



西区 全景 (西から)



西区 全景 (北西から)



SX1 (南から)



SX1 (西から)

V 遺物

調査において出土した遺物は、遺構・種別ごとに分類・整理し、その概要を一覧表として掲載した（表4）。さらに、実測図及び写真を掲載した遺物について、その属性を観察表として掲載した（表5～8）。

遺物実測図の縮尺は、土器1/4、石器1/3（石鏃のみ1/2）、土製品1/3、玉類1/2とした。また、土器実測図においては、赤色塗彩及び黒色処理をスクリーントーンで表示し、須恵器については断面を黒、灰釉陶器については断面を網で表示した。

なお、本章の記述における地点及び遺構種別の略号は下記のとおりとし、遺構名は両者の組み合わせによって記載した。（例：Ⅲ-SB1、YC-SR1）

〔地点〕 水内坐一元神社遺跡-柳原東西線地点：KYMO-Ⅲ（略してⅢ）

水内坐一元神社遺跡-柳原総合市民センター地点：KYMO-YC（略してYC）

中俣遺跡-柳原東西線地点：KYN-MK（略してMK）

〔遺構〕 竪穴住居：SB 溝：SD 土坑（小穴も含む）：SK

埋没河川：SR 周溝墓：SZ 性格不明：SX

1 土器

調査全体で847kgの出土量があり、その中から347個体を抽出して実測・図示した。抽出に当たっては、口縁・径・底部などの部位で径が概ね1/2以上遺存することを基準とした。なお、土器観察表（表5・6）中の「遺存」とは「部位」に対しての遺存割合であり、大略で1/1、2/3、1/2のいずれかに該当させている。

実測図版は、柳原東西線地点（Ⅲ・MK）と柳原総合市民センター地点（YC）とで分離し、時期順・遺構毎の配列となるように組版したものであるが、一部には齟齬が生じている。

【弥生時代中期】（図34～38・46他）

中期後半の土器群であり、いずれも栗林式に属す。出土個体の豊富なⅢ-SB4の例では、一括出土した壺を施文のあり方から次の3類型に分類している。

I（全部加飾）型：頸部から胴部までの全体が施文されるもので、次の2型に細分される。

懸垂文を有するIA型（1～3） 多段横帯文を有するIB型（5・6）

II（頸・胴部加飾）型：頸部と胴部に施文され、その間が無文となるもの（7・9）

III（頸部加飾型）：頸部のみが施文されるもの（10・12～14）

各類型間での形態的な差異は顕著ではないが、IA型に関しては、口縁の伸長と開きが大きく華美であることから、用途として祭礼等の特別な場や特殊な内容物への対応を想定することができる。施文における懸垂文は他の類型との差別化を図る上での特徴的な要素であり、その懸垂文が特別な用途を明示するための目印として機能していたと考えるなら、他の類型における文様の多寡やパターンもまた、それぞれの用途を分別するうえでの目印であったと理解することが可能である。これら壺に加飾される文様の多寡やパターンについては、土器編年の中で「無文化=新しい」というように、時間軸で単一系統的に理解しようとする傾向が強いように思われるが、本例のように複数の文様パターンを同時に意図的に使い分けている現象については、別の視点からの理解と整理をすすめる必要性が感じられる。

【弥生時代後期～古墳時代前期】（図39～41・46・47他）

後期中葉から後半、それに連続した古墳時代初頭にまたがる土器群で、箱清水式がその主体となっている。MK-SB1からは蓋5個体（60～64）が集中出土しており、頂部の穿孔や赤色塗彩においていくつかの変異が示される一括資料といえる。YC-SX1出土土器（284～288）も一括資料としては良好であり、大小の透かしを交互に開けた高杯・脚部（287）が特殊である。赤彩されていない壺（284）は口縁部端部の形態から北陸系と判断される。同じく北陸系の土器としては、高杯（91）、甕（134）、小形丸底鉢（140）などが散見される。また、前方後方形周溝墓のⅢ-SZ1溝底からほぼ完形で出土した壺（113）は、頸部に櫛描文を配していることから箱清水式の系譜上に置くことも可能であるが、形態的には異質であり外来系と判断され、類例は少ないものの古墳時代初頭の所産と考えられる。

【古墳時代中期～後期】（図41～43・47・48他）

一連の竪穴住居（Ⅲ-SB2・7～10）からの出土土器は、古墳後期も終末に近い段階の所産と判断される。これにさかのぼる古墳中期までの土器は、Ⅲ-SZ1・SR1、YC-SZ4・SR1等から散発的ながらも出土している。多くの共伴関係は不明瞭であるが、Ⅲ-SZ1出土の杯（114～118）は、口縁を内傾した特徴的な形態を共有する点から一括資料として把握することができる。精緻な調整のあり方から、古墳時代中期の所産と判断したが、当該地域においてはあまり例を見ない形態であり、出自と年代に関する再検討が必要である。

【奈良・平安時代】（図44・45・48）

杯類を中心に各時期の土師器・須恵器・灰釉陶器が土坑等から出土している。まとまった資料として、Ⅲ-SK57出土の奈良時代須恵器杯（183～187）、Ⅲ-SK55出土の平安時代土師器杯・灰釉碗（172～182）等があるが、多くは散発的な出土資料となっている。

【中世・近世】（図45・48）

中世から近世にかけての所産のカワラケ・内耳土器・陶磁器類が土坑等から散発的に出土している。注目すべき資料としては、古瀬戸後期様式の香炉（256）や、瓦器香炉（348）がある。

2 石器

【太形蛤刃石斧】（図49-1～5） いずれも閃緑岩等の火成岩を用いる。3は折損面を研磨し、石槌に転用した例である。4は敲打調整痕がそのまま残されることから、未成品の可能性が高い。

【扁平片刃石斧】（図49-6～16） 完形品（6・7）以外は、いずれも製作途上の未成品である可能性が高く、集落内での製作・加工のあり方を示す良好な資料として位置づけられる。石材としては、頁岩等の堆積岩を用いた一般的な製品の他に、閃緑岩等の火成岩を用いた製品（8・11・12）が存在していることも注意される。

【小形片刃石器】（図49-17～19） 扁平片刃の形状をなしているが、刃部の幅が2cm内外と極小である製品を「小形片刃石器」と仮称した。いずれも未成品の可能性があり、鑿刃的な機能を想定するべきか。

【石剣】（図50-20） 厚みを有した刃部に近接して穿孔があり、石剣等の破片である可能性を想定した。

【石包丁】（図50-21～23） 23は2孔を設けようとする中で、1孔が未穿孔となっているように観察される。

【磨製石鏃】【打製石鏃】（図50-24～34） 有孔の磨製石鏃破片（24）は弥生後期の所産。打製石鏃（25～34）は弥生中期の所産でいずれも有茎であり、茎部または先端部を欠損した例が多い。

【刃器】（図50-35～39、写真1～5） 大形剥片の縁辺をそのまま刃部としている一群をここに含めた。刃部には、使用に伴って生じた剥離や擦痕・光沢面が形成されている例が認められる。

【小形打製石器】(写真6) 形態は小形の打製石斧状であり、磨製石器の未成品である可能性もある。

【不明磨製石器】(図50-40、写真7~11) 用途・形態不明品であり、未成品等も含まれるものと思われる。二等辺三角形を呈した(7)は丁寧に研磨され、装飾品としての用途も考えらえる。

【打製石器】(写真12~14) 調整剥離が観察されないことから、剥片剥離後の残核である能性もある。

【石核】(写真15~18) 剥片素材を剥離する上での石核であると考えた。

3 石製品

【砥石】(図51・52) 弥生中期の製品としては大形品(68)や板状品(41~44)を、古墳時代以降の製品としては棒状品(55~60)を特定することができる。また、前者は石器用の置砥、後者は金属利器用の持砥として位置づけることができる。

【ミガキ石】(写真19~32) 擦痕・光沢痕を有した自然礫をここに含めた。砥石の一種ではあるが、摩滅の度合いが少なく、使用は一過的なものであったと判断される。土器のミガキ調整等の用途も想定されている。

【敲石】(写真33~43) 同じく一過的な使用に基づく敲打痕を有した自然礫をここに含めた。

4 土製品

【紡錘車】(図53-1~4) 径は8~4.5cm、軸孔の径は6mm前後を測り、いずれも丁寧な調整と焼成に基づき、赤色塗彩されたもの(4)も存在する。出土遺構からみて、弥生後期の所産と判断して間違いはない。

【円板】(図53-5~31) 土器破片を転用・再加工したもので、有孔(5~)と無孔(23~)に加えて、穿孔途上のもの(21・22・30)が認められる。弥生後期に属するものも存在するが、大方は弥生中期の所産である。

【板状土製品】(図53-32) 方形・板状で、中央部に半円形の窪みが設けられている。用途・年代は不詳。

【ミニチュア土器】(図53-33) 台付甕の脚台部を模したものと考えられる。弥生後期の所産。

5 玉類

【管玉】(図53-34~41) 石材には緑色凝灰岩(34~38)と鉄石英(39・40)の2種があり、弥生中期段階に盛行した細形製品(36~40)が多い。40は研磨途上の未成品で、断面六角形を呈して未穿孔である。41は古墳後期の所産で土製と判断される。

【小玉】(図53-42~44) ガラス製品で、やや大粒の42がコバルトブルー色、小粒の43・44はスカイブルー色を呈している。前者は古墳時代、後者は弥生後期の所産と考えられる。

6 金属製品・その他

【銭貨】(写真44~57) 江戸期の寛永通宝が7点、中世流通の北宋銭が5点、近代の一銭貨が1点、不明1点が出土している。

【キセル】(写真58~60) 雁首から吸い口までの一体型(58)と、分離型(59・60)が出土している。

【かんざし】(写真61) 耳かき及び円形飾りを配したものが出土している。

表4 遺物一覧表

地点	区	遺構 番号	時期	土器		石器	(剥片)	石製品	土製品	玉類	金属製品	その他
				重量 (g)	実測							
Ⅲ	D	SB1	平安	1,310	2		1					
Ⅲ	D	SB2	古墳後期	16,090	1	大型蛤刃・小形片刃・打製石鏃	18	砥石		管玉2	(鉄片)	
Ⅲ	D	SB3	弥生中期	7,520	1	[不明磨製]	17	砥石・[敲石]	円板3			
Ⅲ	D	SB4	弥生中期	39,435	26		9	[ミガキ石]・(台石)	円板			
Ⅲ	D	SB5	弥生中期	1,430		[不明磨製]	3		円板1		(銅片)	
Ⅲ	D	SB6	弥生中期	1,180			1					
Ⅲ	C	SB7	古墳後期	8,665	4		4					
Ⅲ	C	SB8	古墳後期	5,950	1		5					
Ⅲ	B	SB9	古墳後期	4,627	1		2	砥石				(貝殻)
Ⅲ	B	SB10	古墳後期	3,590	5		1					
Ⅲ	A	SB11	弥生後期	4,580								
Ⅲ	A	SB12	弥生後期	25,020	12		6	[ミガキ石]・(敲石)	ミニチュア	小玉		(炭化物)
Ⅲ	D	SD2	平安	1,390	1		3	砥石			(鉄片)	(種子・炭化物)
Ⅲ	D	SD3	弥生中期	6,180	3		9					
Ⅲ	D	SD6	近世	2,830			6	砥石			(鉄片)	(貝殻)
Ⅲ	D	SD7	弥生後期	8,315	2		12		円板			
Ⅲ	D	SD8	古墳後期	9,500			3	[ミガキ石2]・(敲石)			(銅片)	
Ⅲ	C	SD10	近世	2,220			4	砥石				
Ⅲ	C	SD11	近世	2,450			4				[寛永通宝]	(種子)
Ⅲ	C	SD13	弥生後期	2,310								
Ⅲ	C	SD16	平安	390								
Ⅲ	C	SD19	中世	16,690	5	扁平片刃・[刃器]	30	砥石・(石臼・硯)			(鉄片)	(種子9)
Ⅲ	A	SD25	中世	3,140	1	不明磨製	2	(石臼)				(種子2・炭化物)
Ⅲ	A~D	他SD		6,570		打製石鏃	6	硯・石臼			[北宋銭]・(鉄片)	
Ⅲ	D	SK7	平安	1,880	1		8					
Ⅲ	D	SK15	平安	770	1							
Ⅲ	D	SK16	平安	1,110	1		1	砥石			(鉄片)	
Ⅲ	D	SK17	平安	1,070								(木片)
Ⅲ	D	SK31	近世	610	1		2					
Ⅲ	D	SK34	近世	1,110	3		8				[キセル]・(鉄片)	(木片)
Ⅲ	D	SK37	中世	1,760	2		12	砥石・[敲石3・ミガキ石]・(石臼・凹石)			(鉄片)	(漆器片)
Ⅲ	D	SK51	平安	450	1							
Ⅲ	D	SK52	近世	60	1							
Ⅲ	D	SK55	平安	6,430	11		7	砥石2・(敲石)	板状			
Ⅲ	D	SK57	奈良	5,440	9		1			管玉		
Ⅲ	D	SK61	平安	2,110			1					
Ⅲ	C	SK75	近世	220			1					
Ⅲ	C	SK76	近世	430	1		1	砥石				(木片)
Ⅲ	C	SK80	近世	110							[寛永通宝]	
Ⅲ	C	SK81	近世	90		[石核]	2				[寛永通宝]・(銅片)	(種子・木片)
Ⅲ	C	SK82	近世	480							[寛永通宝]	
Ⅲ	C	SK83	近世	170							(鉄片)	(炭化物)
Ⅲ	C	SK84	近世	1,440	4	打製石鏃	1					
Ⅲ	C	SK86	平安	460	1							
Ⅲ	C	SK88	近世	780	1							(種子)
Ⅲ	C	SK89	奈良	440	1							
Ⅲ	C	SK93	平安	940	1							
Ⅲ	C	SK103	平安	610	1							
Ⅲ	C	SK104	平安	1,100	1							
Ⅲ	C	SK112	平安	430			1					(種子)
Ⅲ	C	SK113	平安	470			2					
Ⅲ	C	SK117	平安	365	4							(人骨)
Ⅲ	C	SK119	古墳後期	1,500	2		1					(種子)
Ⅲ	C	SK122	中世	1,270			2					
Ⅲ	C	SK123	平安	500								(種子)
Ⅲ	C	SK124	平安	1,300	1							
Ⅲ	C	SK125	中世	260								(漆器)
Ⅲ	C	SK127	弥生後期	3,660	1		3					
Ⅲ	C	SK128	平安	370			1	砥石				
Ⅲ	C	SK129	平安	480								
Ⅲ	C	SK132	平安	1,340								
Ⅲ	C	SK134	平安	130	1							
Ⅲ	C	SK135	平安	370	1							
Ⅲ	C	SK146	中世	280			1	(石鉢)				
Ⅲ	C	SK147	弥生中期	670	1							

地点	区	遺構 番号	時期	土器		石器	(剥片)	石製品	土製品	玉類	金属製品	その他
				重量 (g)	実測							
Ⅲ	C	SK151	中世	320	1							(曲げ物)
Ⅲ	C	SK156	中世	3,700		[不明磨製]	12				(鉄片)	(漆器片・木片)
Ⅲ	C	SK161	中世	210	1		3					
Ⅲ	C	SK177	古墳後期	1,130	1		2	砥石				
Ⅲ	C	SK183	平安	810								
Ⅲ	C	SK184	平安	230	1							
Ⅲ	C	SK190	平安	560			1					
Ⅲ	C	SK202	古墳後期	570	1		3					
Ⅲ	C	SK208	古墳後期	1,650	4							
Ⅲ	C	SK214	平安	80	1							
Ⅲ	B	SK225	弥生中期	12,450	9		4					
Ⅲ	B	SK226	弥生中期	1,420	2							
Ⅲ	B	SK227	弥生	200	1							
Ⅲ	B	SK228	平安	420							(鉄片)	
Ⅲ	B	SK233	平安	910	1							(獣歯)
Ⅲ	B	SK234	中世	3,640			2					
Ⅲ	B	SK236	近世	550	2			(凹石)				(木製円板)
Ⅲ	B	SK247	弥生中期	4,810	1							
Ⅲ	B	SK305	中世	420	1							
Ⅲ	B	SK320	平安	1,300								
Ⅲ	B	SK321	弥生中期	260	1		1					
Ⅲ	B	SK326	平安	750								
Ⅲ	B	SK338	弥生中期	870	1							
Ⅲ	A	SK378	弥生後期	1,240			1		円板			
Ⅲ	A	SK379	弥生後期	6,000			4					
Ⅲ	A	SK386	弥生中期	800	2		2					
Ⅲ	A~D	その他 SK		41,529		大型蛤刃・扁平片刃・打製石鏃2		砥石2・[ミガキ石2・敲石]・(石臼5・凹石)		管玉	[カンザシ]・(キセル・鉄片)	(人歯・獣歯・骨片・漆器・種子・炭化物・木片)
Ⅲ	A	SR1	弥生~	17,930	6		6	砥石・[ミガキ石]・(石鉢)				
Ⅲ	A	ST1	奈良	1,680	1							(柱根7)
Ⅲ	D	SZ1	古墳前期	72,170	31	石包丁・小形片刃・打製石鏃・刃器	72		紡錘車1・円板2	管玉2・小玉1	(鉄片)	(骨片・炭化物)
Ⅲ	C	SZ2	弥生後期	1,580			2					
Ⅲ	C	SZ3	弥生後期	3,180	2		3					
Ⅲ	B	SZ4	弥生後期	1,930								
Ⅲ	B	SZ5	弥生後期	7,740	2		2					
Ⅲ	B	SZ6	弥生後期	6,490			1					
Ⅲ	B	SZ7	弥生後期	130								
Ⅲ	A	検出面他		12,640	6	刃器	8				[一銭貨・銅銭]	(種子)
Ⅲ	B	検出面他		34,142	8	石剣?・打製石鏃2	20	(石臼)				(馬歯・炭化物)
Ⅲ	C	検出面他		32,820	7		44	砥石2・(石鉢)			[北宋銭・寛永通宝]・(鉄片)	(鹿角)
Ⅲ	D	検出面他		39,710	10	石包丁		砥石3・[ミガキ石4・敲石]	円板		[北宋銭・寛永通宝2・キセル]・(鉄片・銅片)	(骨片・炭化物)
MK	SB1	弥生後期		6,620	7		2	[敲石]・(敲石)	紡錘車			
MK	SB2			550								
MK	SB3	弥生後期		6,140	3	[刃器]	1					
MK	SB4	弥生後期		21,590	6		2	[敲石]				
MK	SB5	弥生後期		6,960	1		2					
MK	SB6	弥生後期		6,890	1	磨製石鏃	5	(石核)	紡錘車			
MK	SB7	古墳前期		810	1							
MK	SB8	弥生後期		11,360	4	扁平片刃	5	[ミガキ石]		管玉		
MK	SB9	弥生後期		4,230	4		1					
MK	SB10	弥生後期		3,250	2							
MK	SD1	奈良~		2,120			1					
MK	SD2	奈良~		1,570		[刃器]	1	(敲石)				
MK	SD3	奈良~		480								
MK	SD5	奈良~		470	1							
MK	SD6	奈良~		350			1					
MK	SD7	古墳前期		6,600	2							
MK	その他 SD			1,480			1					
MK	SK1	弥生後期		4,050								
MK	SK2	弥生後期		5,640	1		3		円板			
MK	SK4	弥生後期		2,070	1		3					(炭化物)
MK	SK5	弥生後期		1,350								(骨片)
MK	SK6	弥生後期		1,430				砥石				
MK	SK9	弥生後期		1,330					紡錘車			
MK	その他 SK			1,590			1					

地点	区	遺構 番号	時期	土器		石器	(剥片)	石製品	土製品	玉類	金属製品	その他
				重量 (g)	実測							
MK		検出面他		11,930		小形打製	9				(鉄片)	
YC		SB1	弥生中期	1,640		扁平片刃	5		円板			
YC		SB2	弥生中期	840			1	砥石				
YC		SB3	弥生中期	2,680			2		円板3			
YC		SB4	弥生中期	2,350	1		7		円板			
YC		SB5	弥生中期	3,880	2		4	[ミガキ石]	円板			
YC		SB6	弥生中期	5,093	3	刃器・[刃器・石核]	7	砥石2・(敲石)	円板3	管玉		
YC		SB7	弥生中期	14,210	2	扁平片刃3・刃器	18	[敲石]	円板2			
YC		SB8	弥生中期	17,430	9	打製石器・石核	42					
YC		SB9	弥生中期	1,060			1					
YC		SB10	弥生中期	180								
YC		SB11	弥生中期	690	2		6					
YC	西	SD1	平安	620	1							
YC		SD5	中世	21,350	7	扁平片刃2・[打製石器]	13	砥石・(石臼2)			[北宋銭]	(種子・炭化物・木片)
YC		SD6	中世	1,940	3		1				(鉄片)	(種子)
YC		SD8	中世	60		扁平片刃						
YC		SD12	弥生後期	380	1							
YC		SD13	弥生後期	890								
YC		SD18	中世	1,500	1		5				[北宋銭]	
YC		その他SD		1,360		石包丁・[不明磨製]	1					
YC	西	SK8	弥生後期	180	1		1					
YC		SK16	平安	250	1							
YC		SK18	平安	190	1							
YC		SK19	平安	50	1							
YC		SK22	平安	760								
YC		SK50	弥生後期	1,010								
YC		SK58	弥生後期	880			3					
YC		その他SK		5,440		大型蛤刃・[刃器]	9				(鉄片)	(種子・炭化物)
YC		SR1	弥生~	52,690	25	大型蛤刃2・小形片刃・打製石鏃・刃器・[不明磨製]	22	砥石・(石鉢)	円板2	小玉		
YC	西	SX1	弥生後期	7,230	6							
YC	西	SZ1	古墳前期	9,500	4		2		円板2			
YC		SZ2	古墳前期	870			4					
YC		SZ3	弥生後期	2,720	2		3					
YC		SZ4	古墳中期?	12,100	7	扁平片刃	4		円板			
YC		検出面他		20,330	11		14	[敲石]			[キセル]	
計				847,031	347		608					

[] : 写真のみ掲載遺物
() : 未掲載遺物

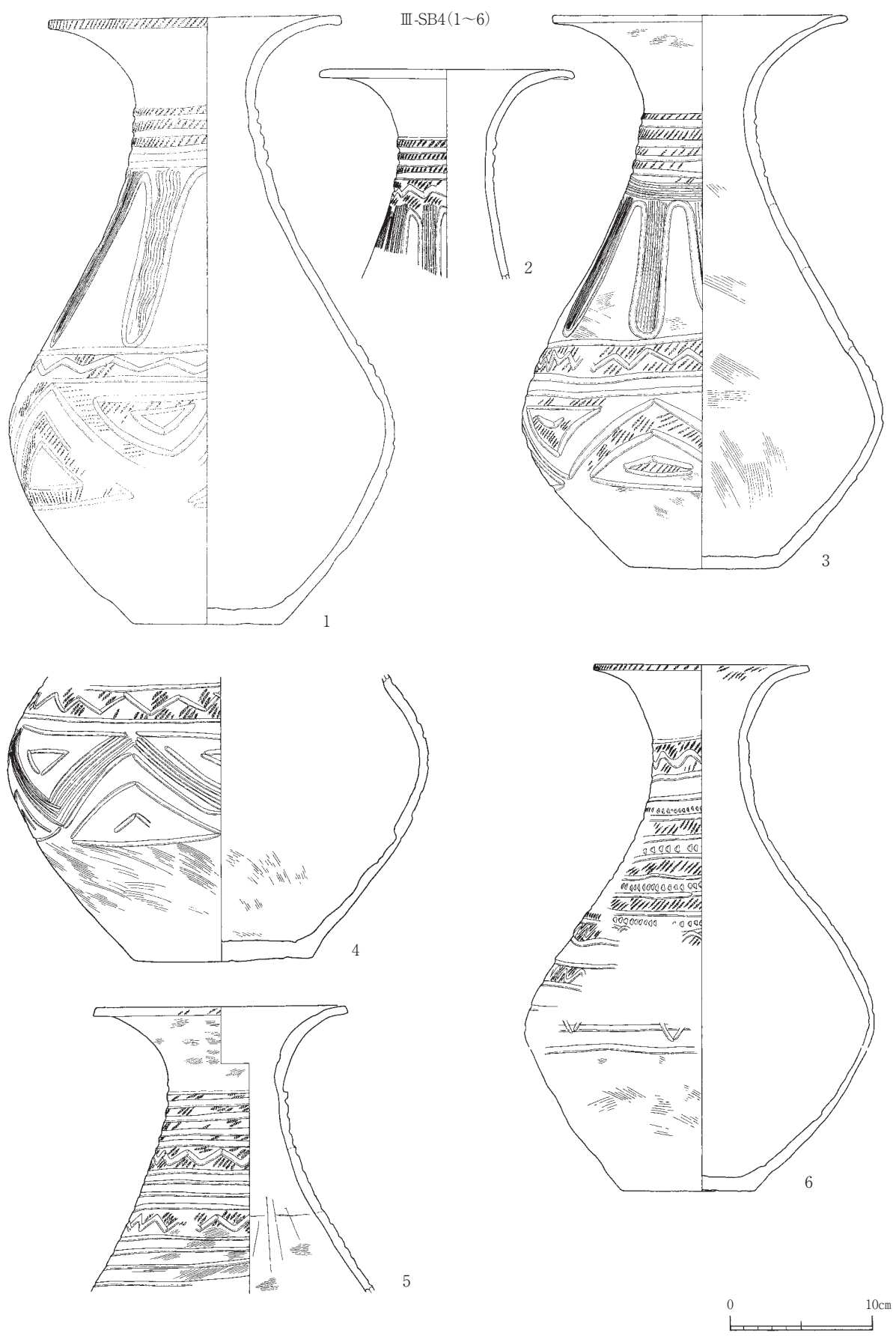


图34 土器实测图 KYMO-III·KYN-MK① (1:4)

III-SB4(7~13)

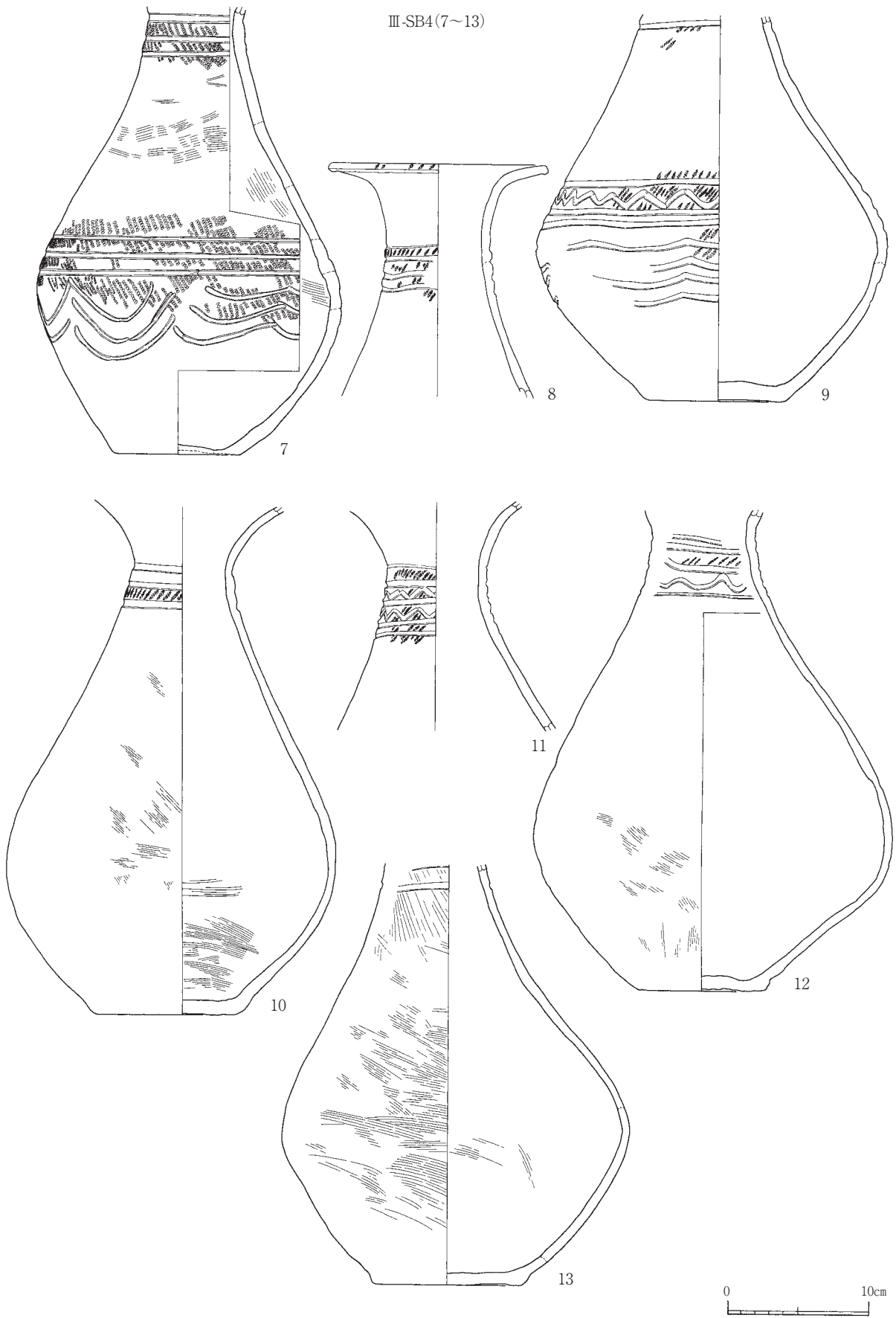


图35 土器実測図 KYMO-Ⅲ·KYN-MK② (1:4)

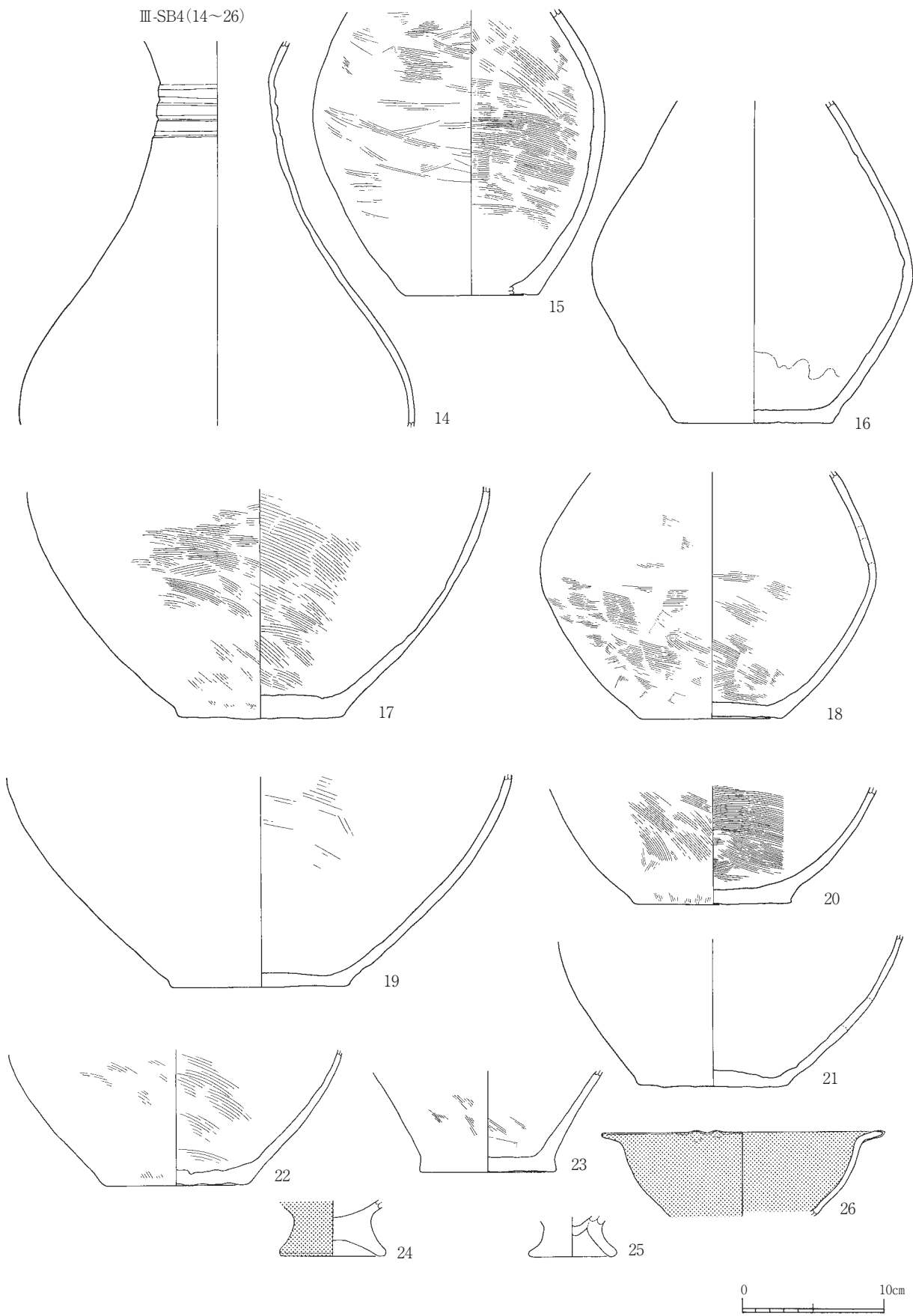


图36 土器実測図 KYMO-Ⅲ・KYN-MK③ (1:4)

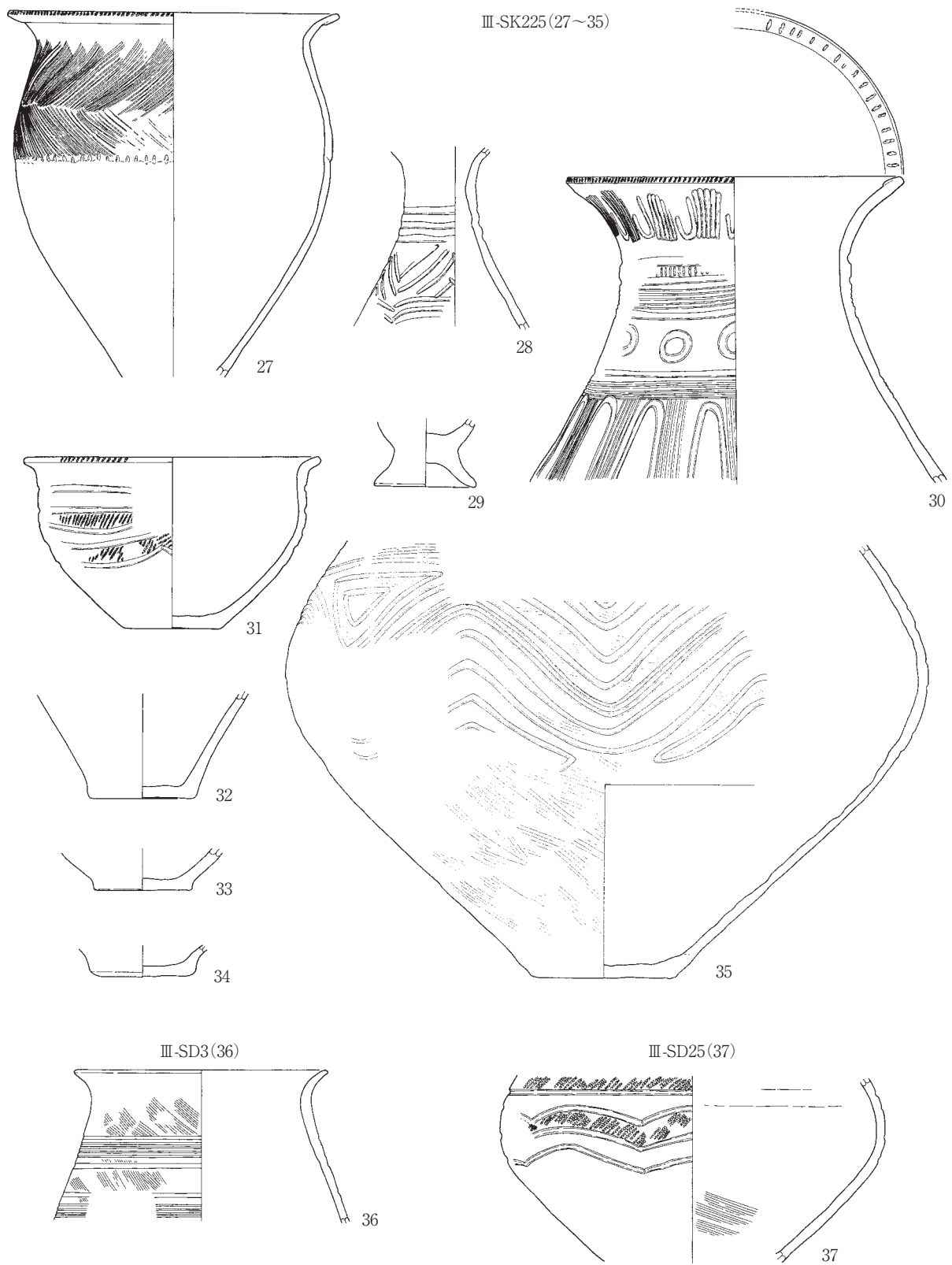


图37 土器实测图 KYMO-III·KYN-MK④ (1:4)

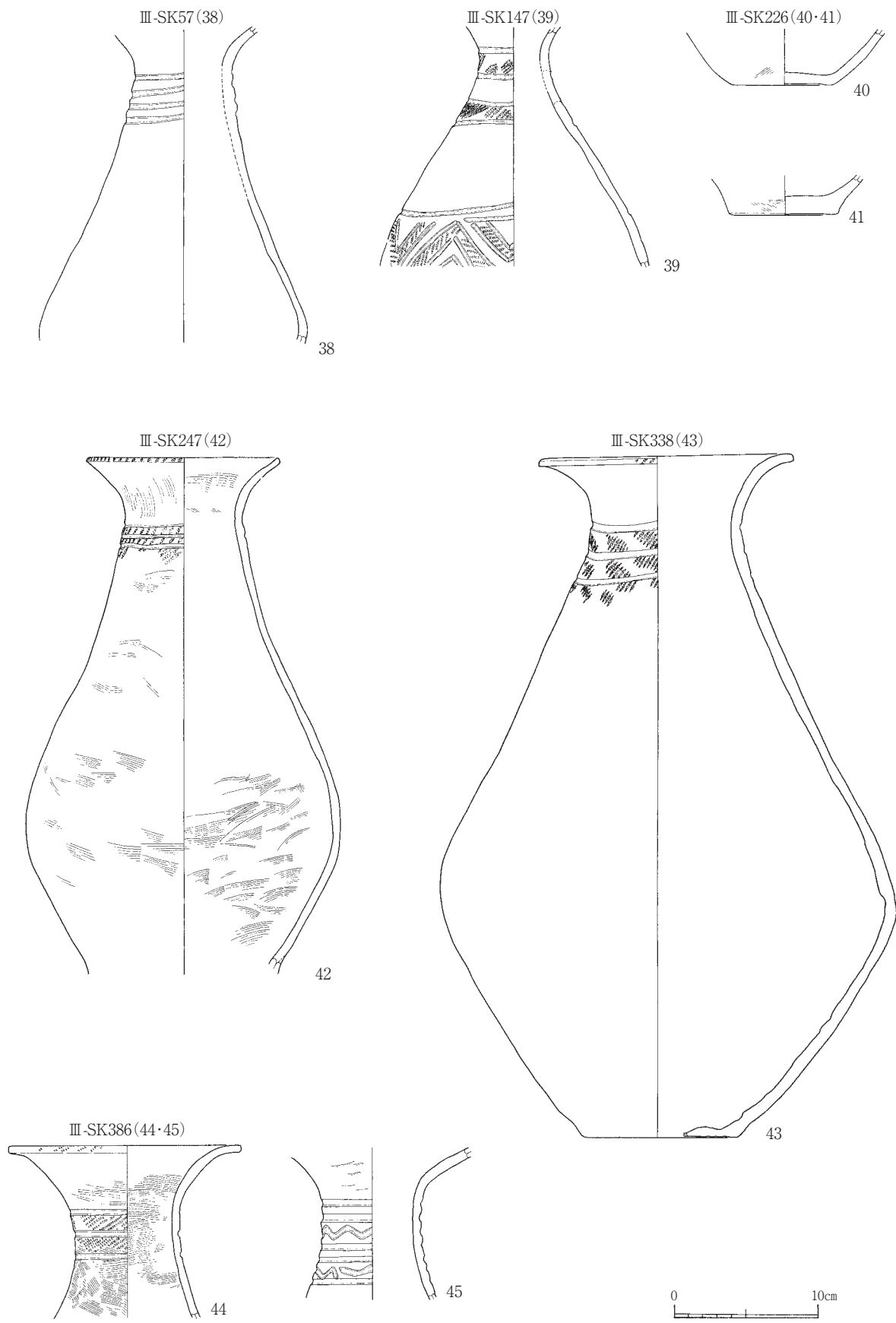


图38 土器实测图 KYMO-III·KYN-MK⑤ (1:4)

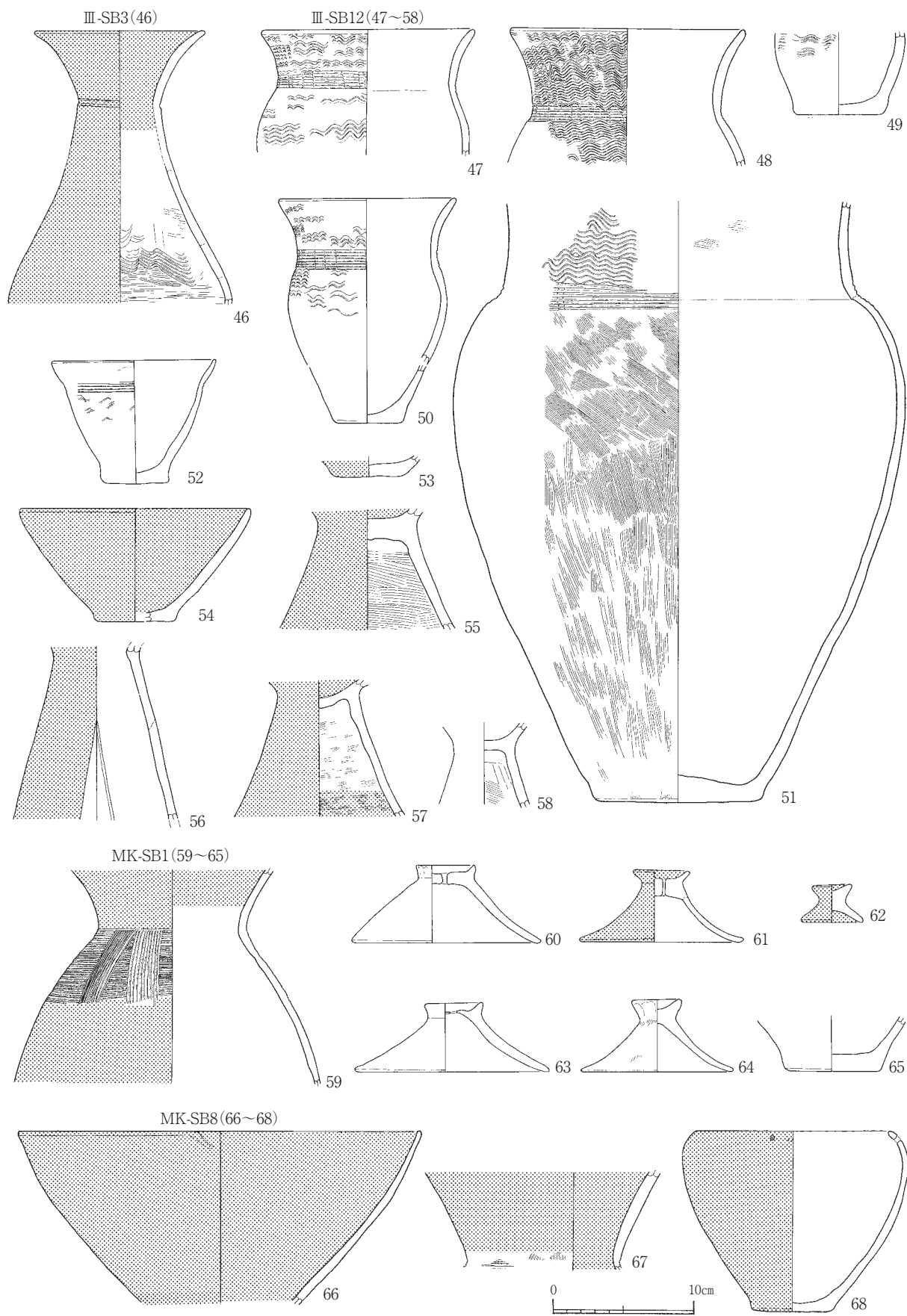
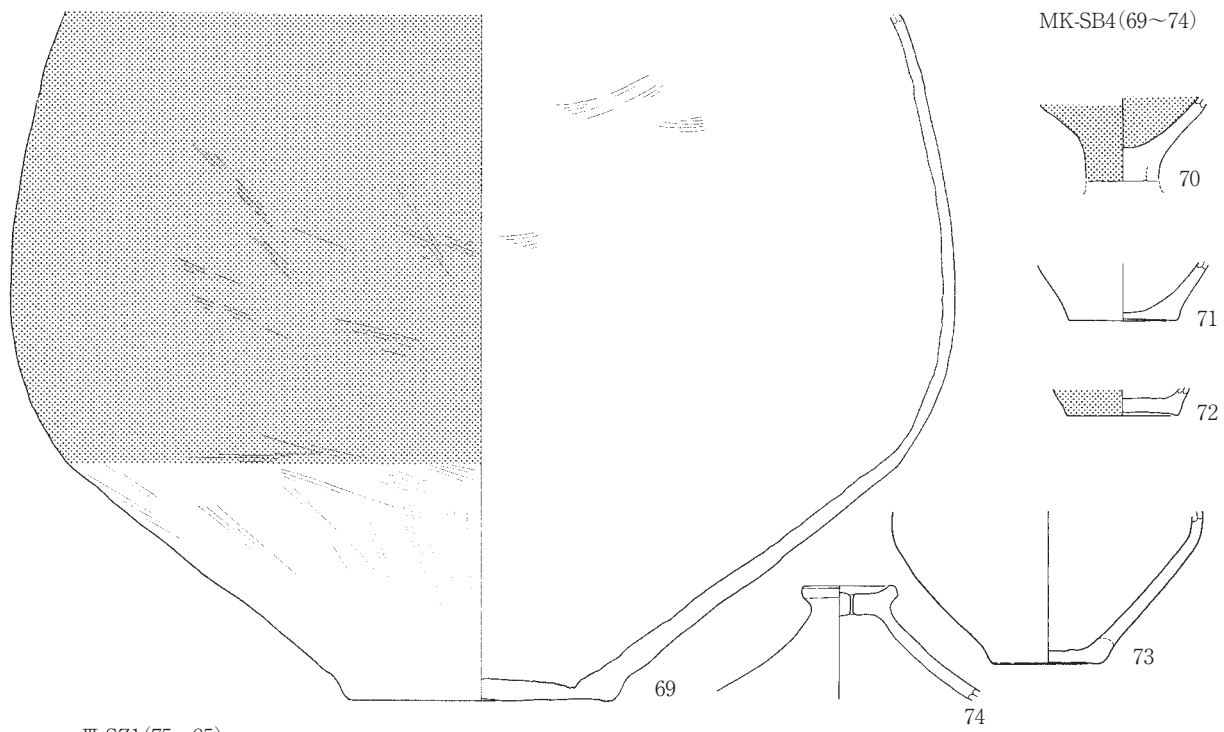


图39 土器实测图 KYMO-Ⅲ·KYN-MK⑥ (1:4)



MK-SB4(69~74)

Ⅲ-SZ1(75~85)

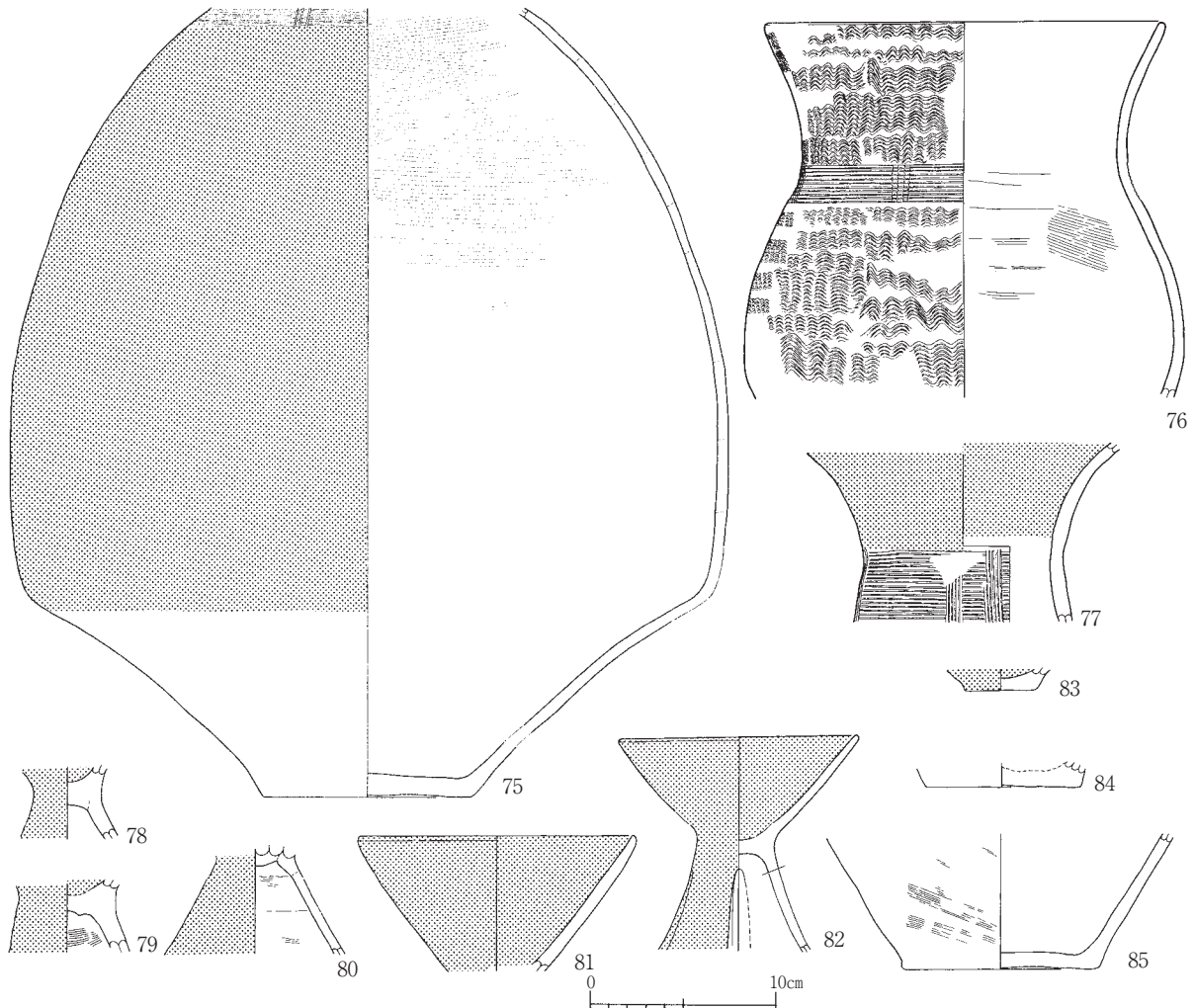


图40 土器実測図 KYMO-Ⅲ・KYN-MK⑦ (1:4)

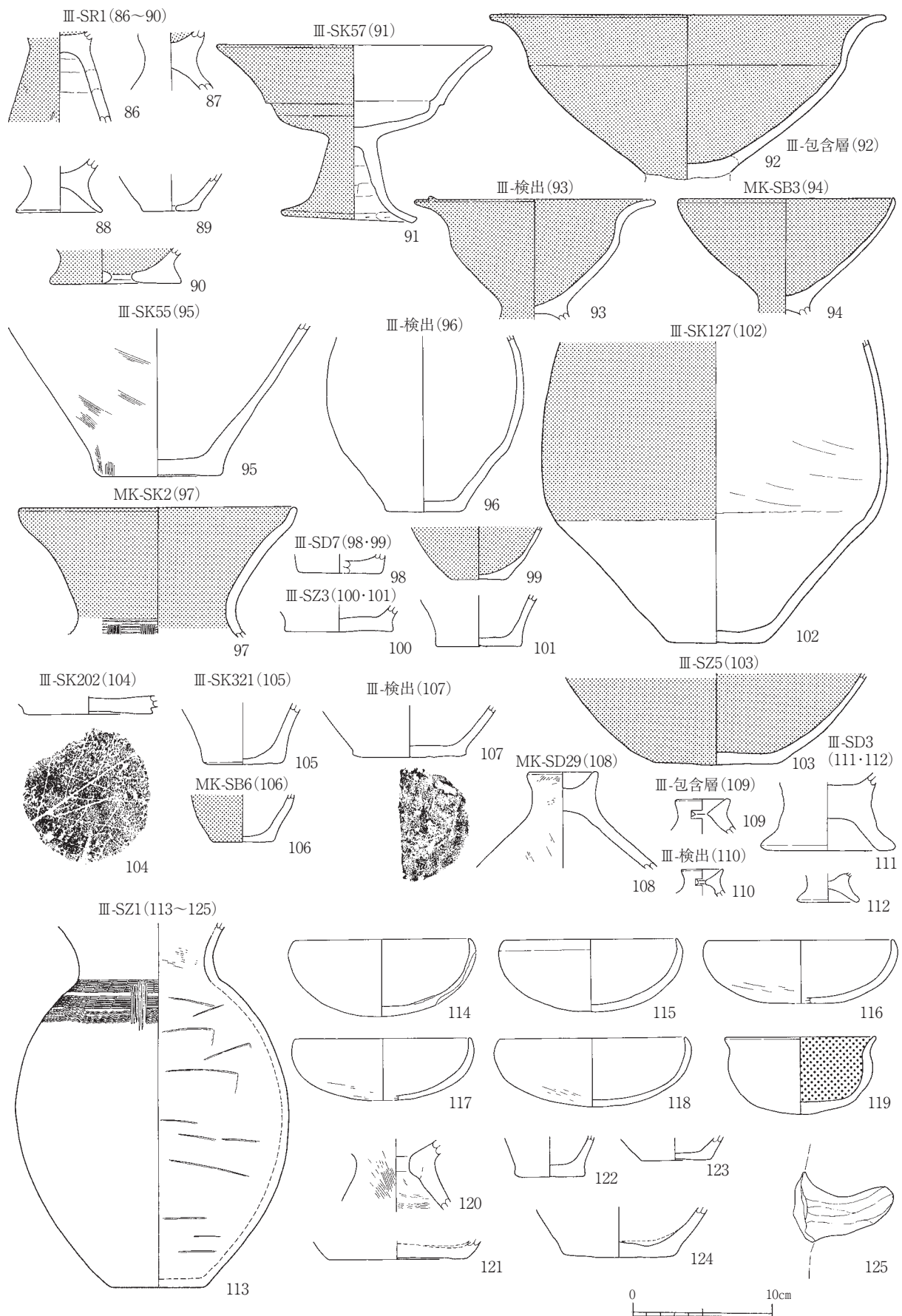


図41 土器実測図 KYMO-III·KYN-MK⑧ (1:4)

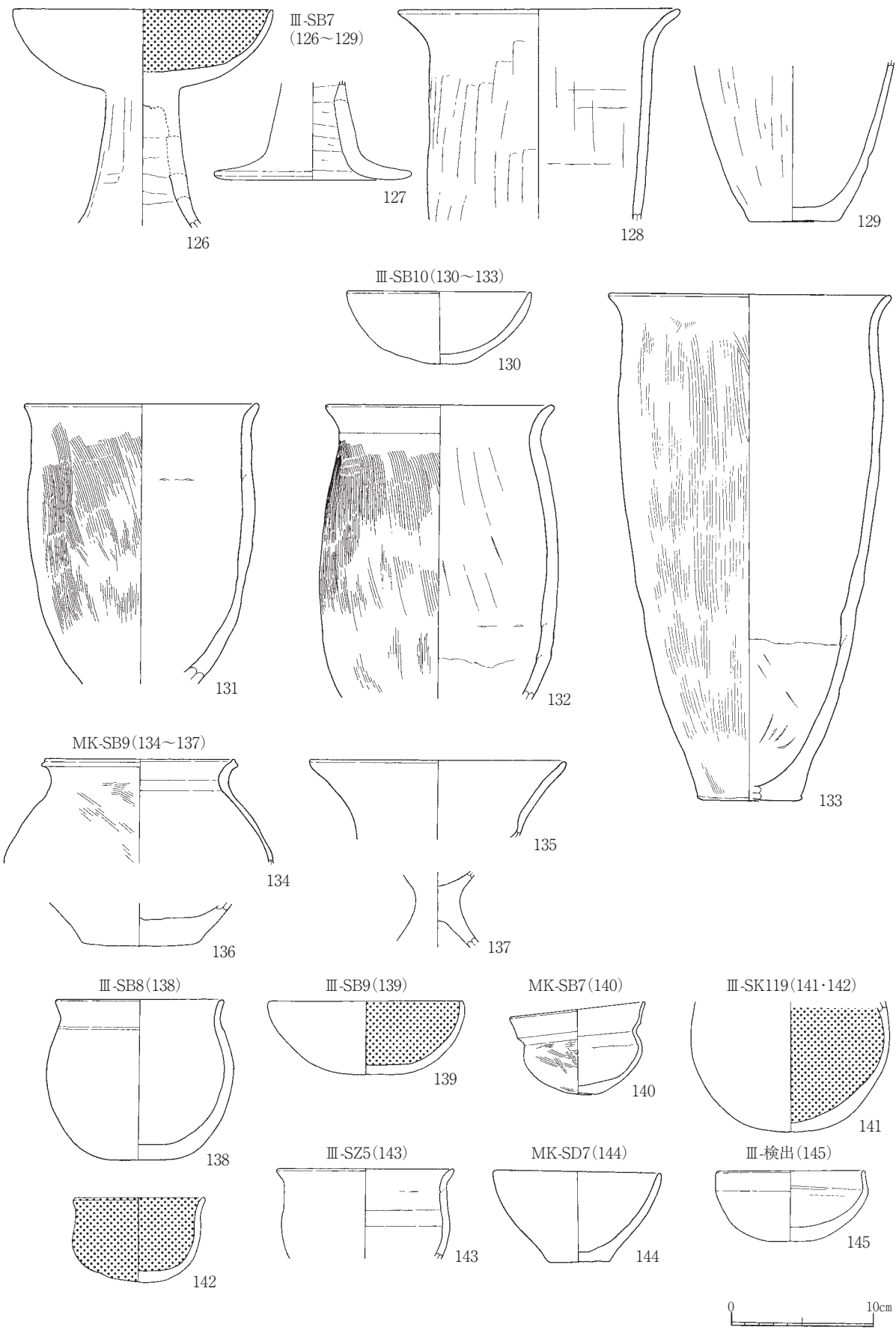


図42 土器実測図 KYMO-Ⅲ・KYN-MK⑨ (1:4)

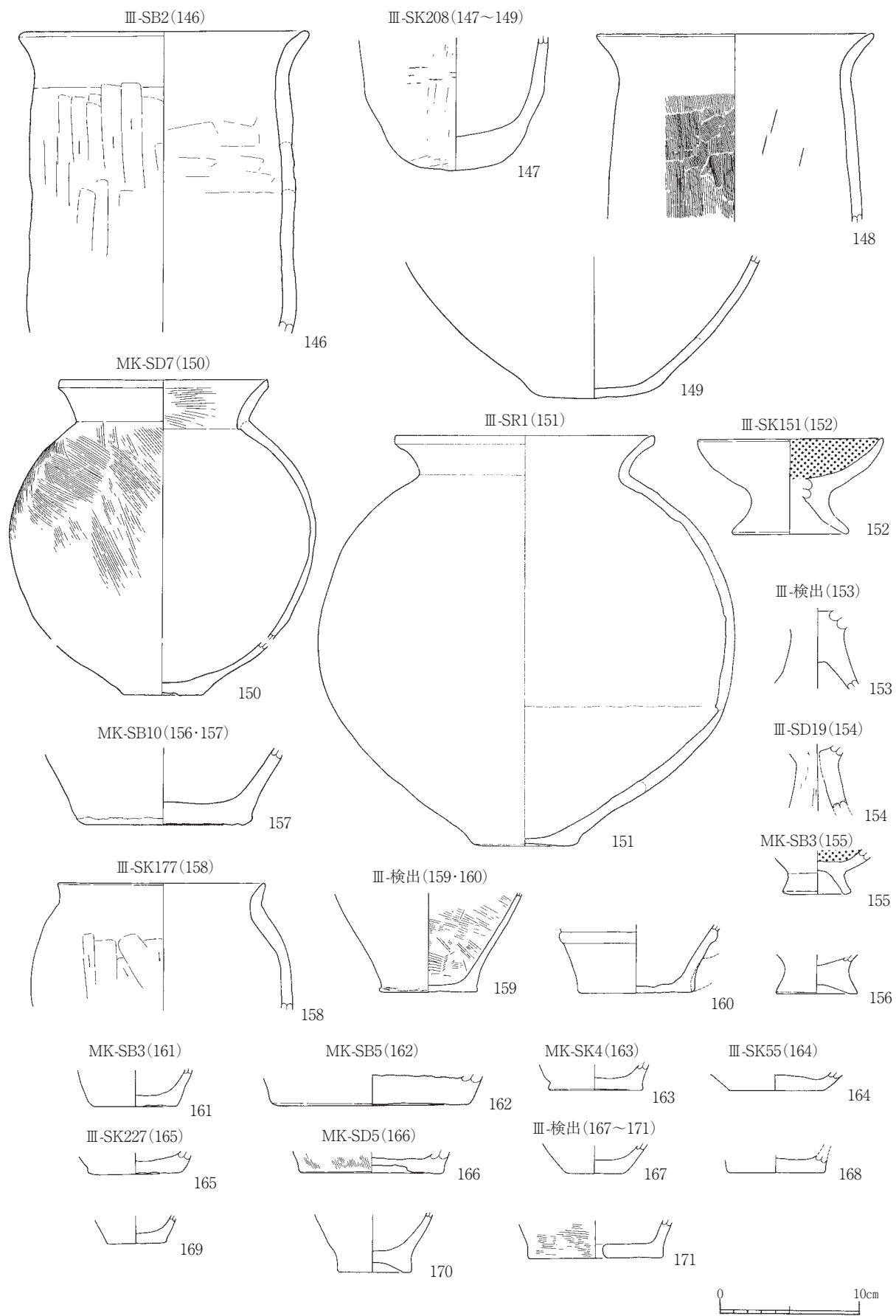


図43 土器実測図 KYMO-Ⅲ・KYN-MK⑩ (1:4)

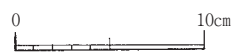
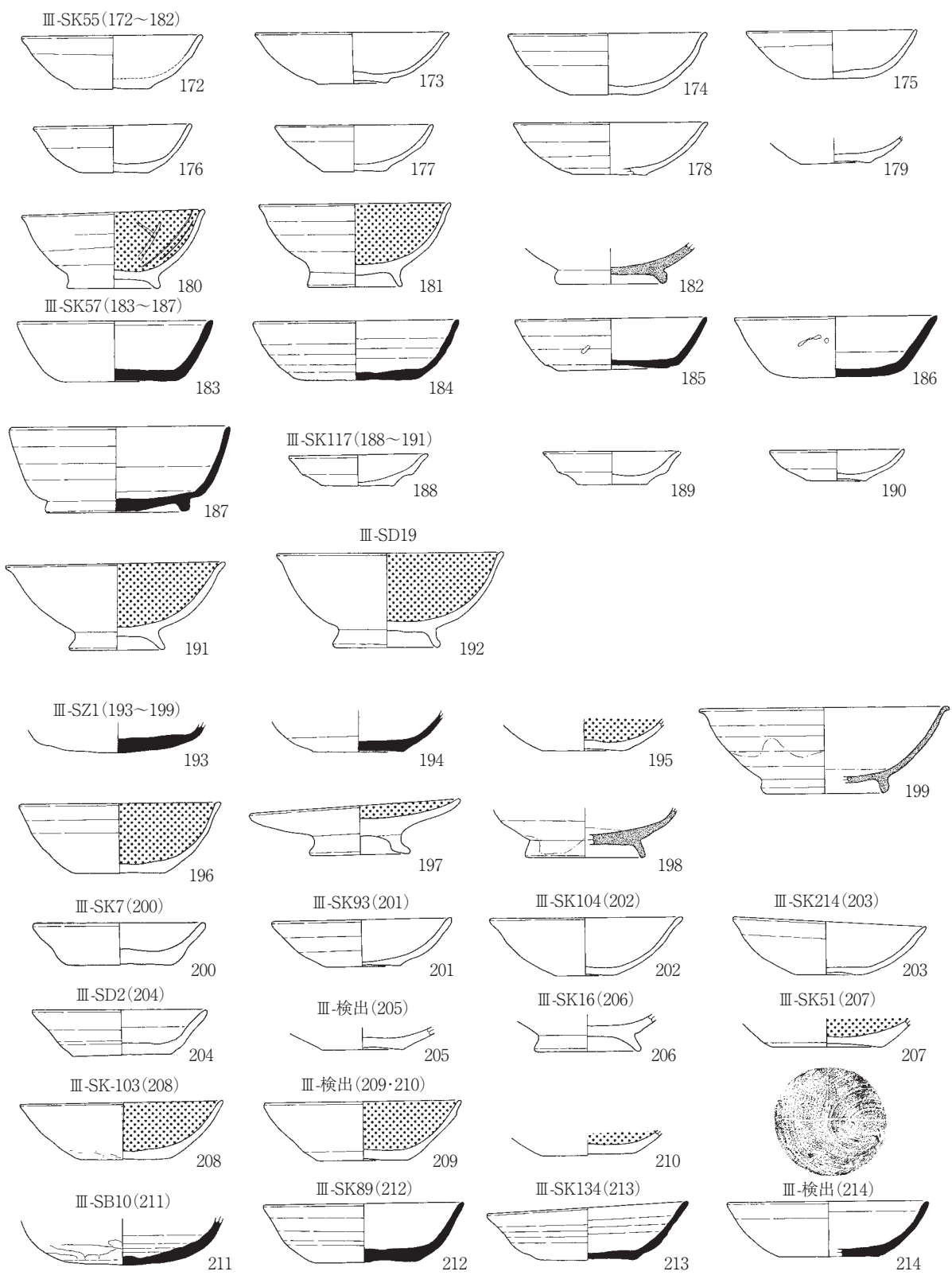


図44 土器実測図 KYMO-Ⅲ・KYN-MK⑩ (1:4)

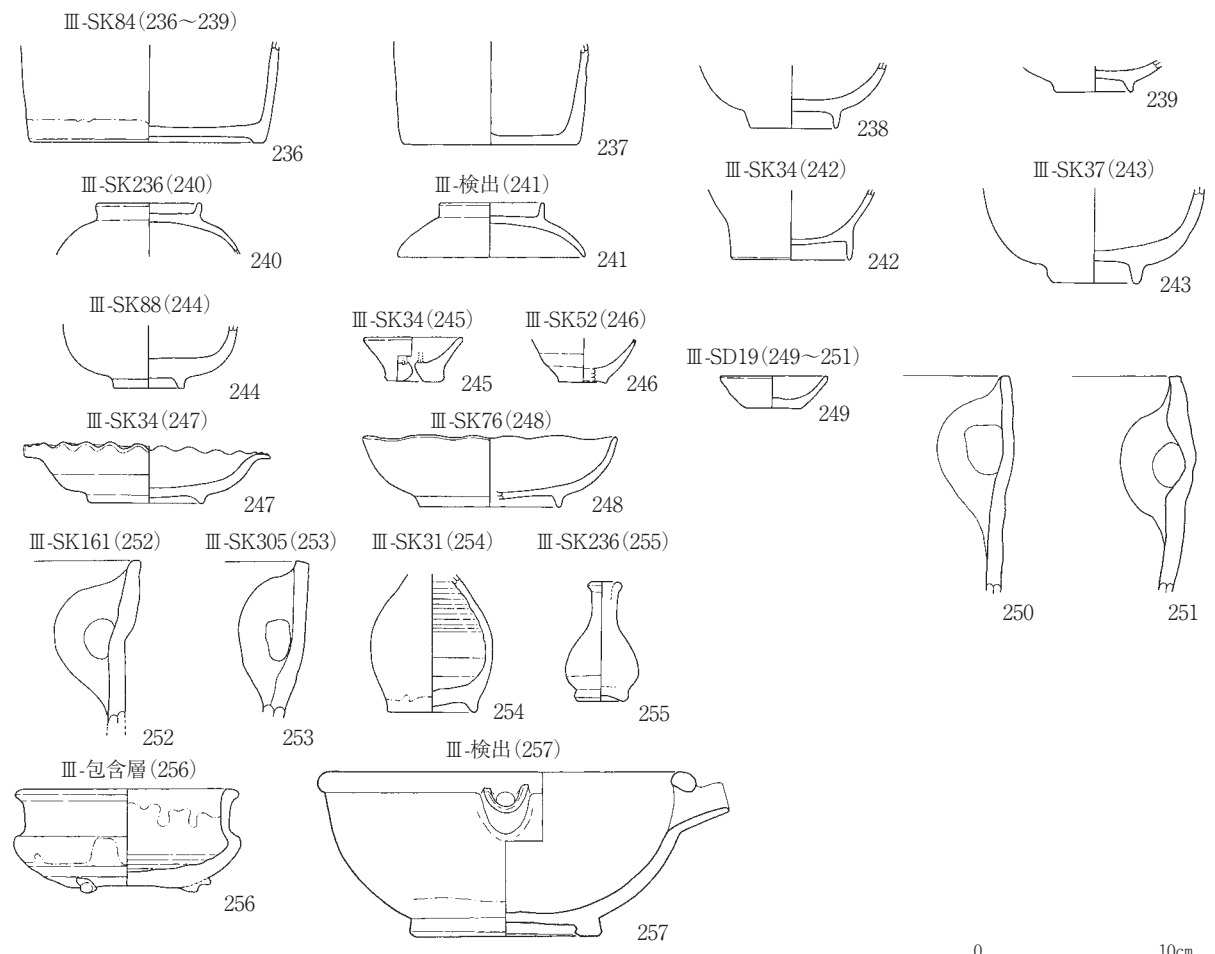
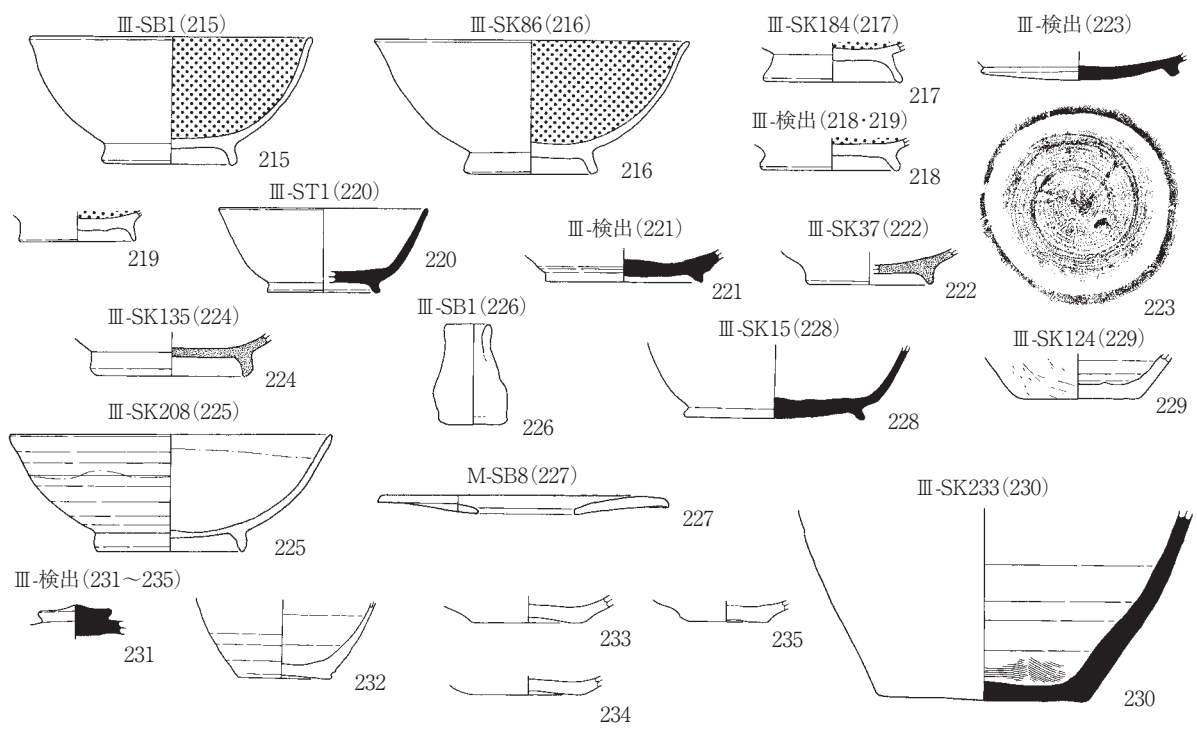


図45 土器実測図 KYMO-Ⅲ・KYN-MK⑫ (1:4)

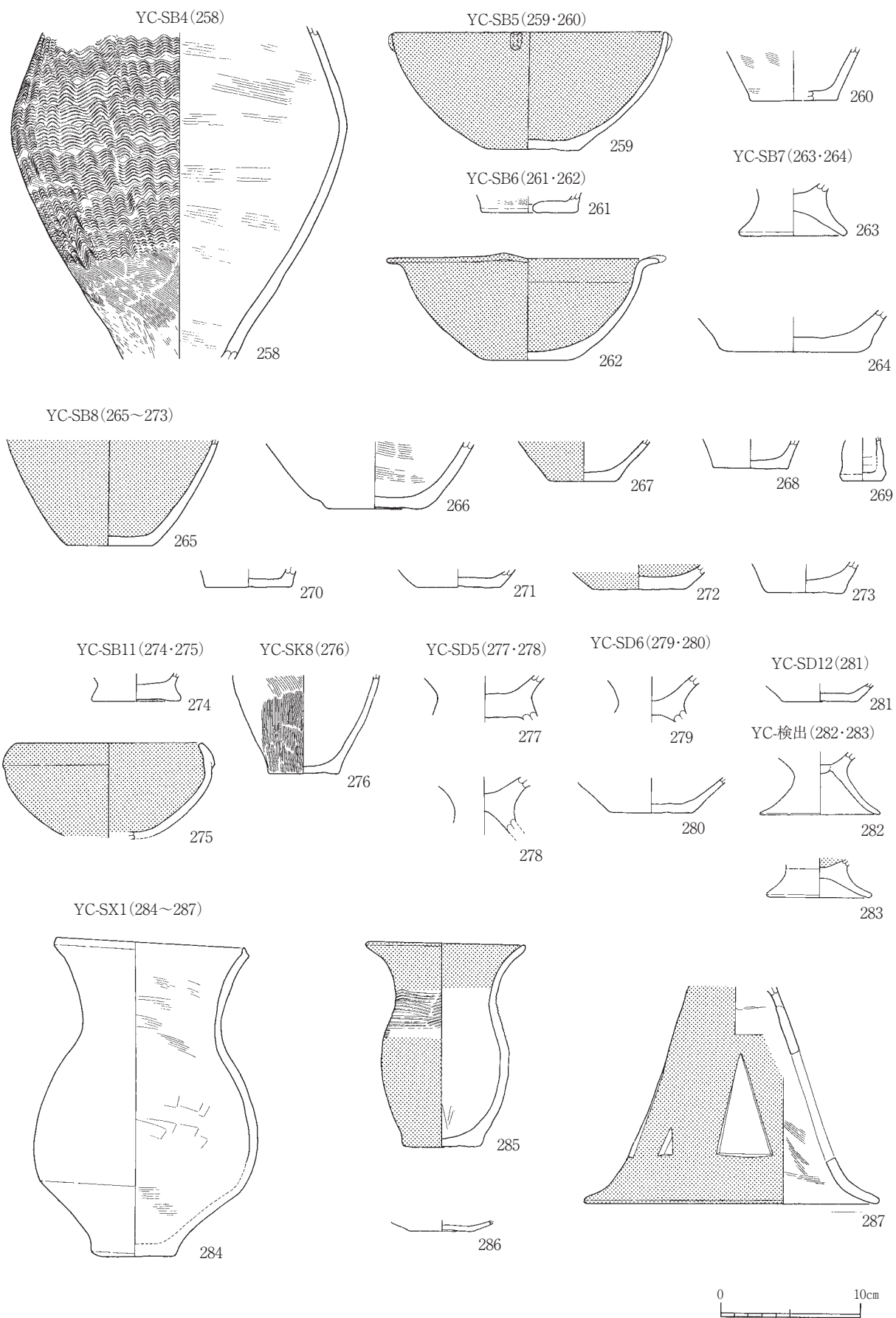


図46 土器実測図 KYMO-YC① (1:4)

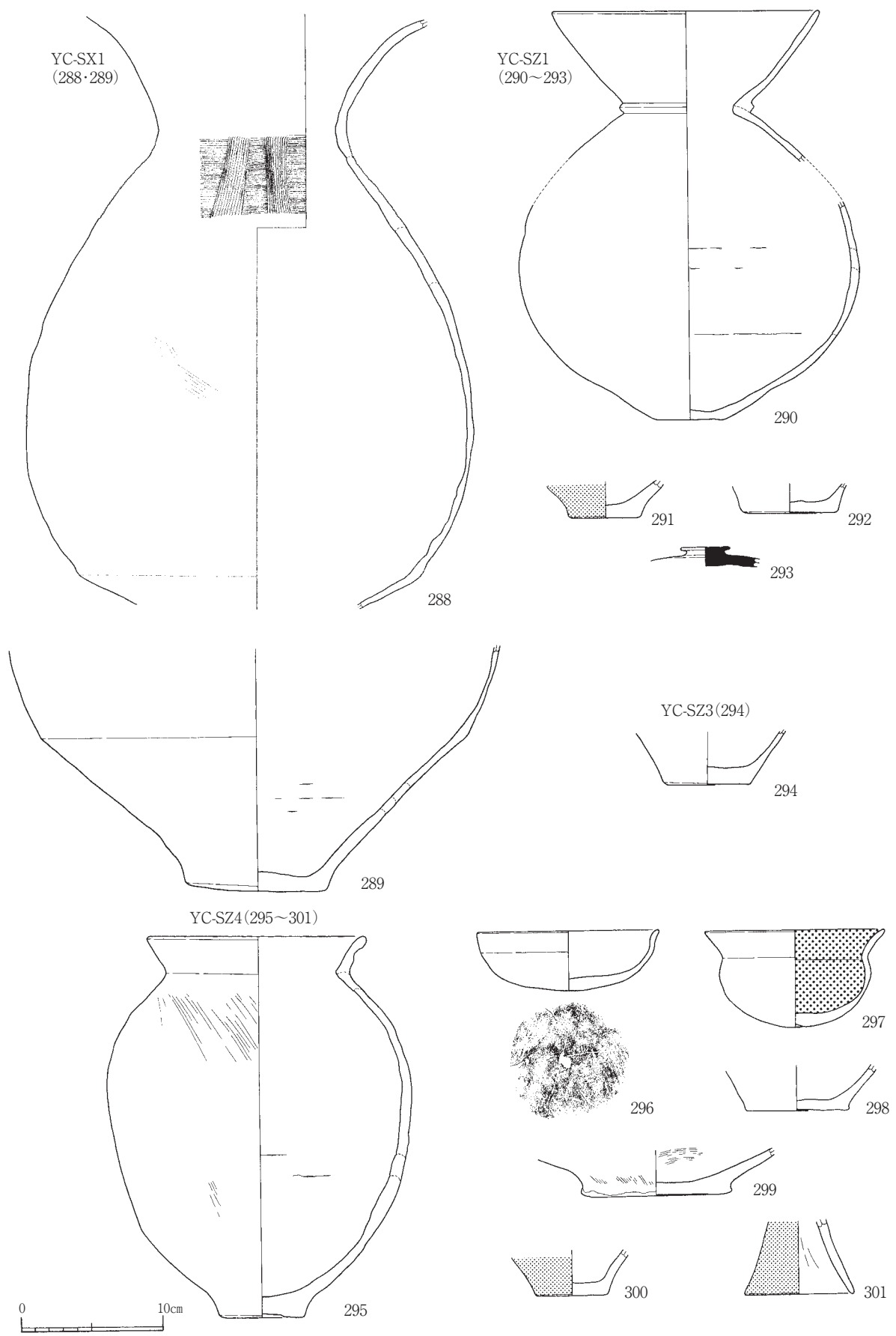


图47 土器実測図 KYMO-YC② (1:4)

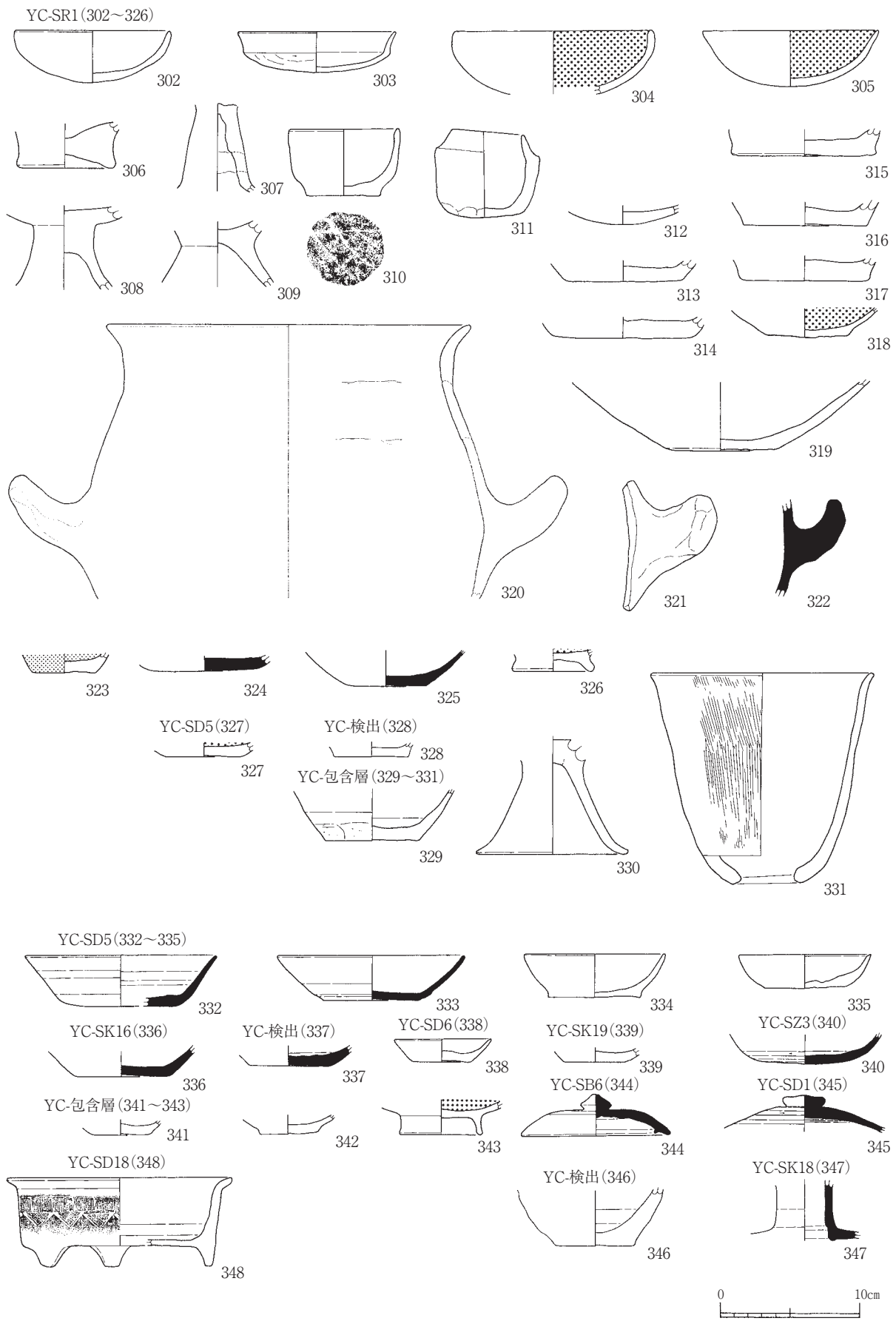


図48 土器実測図 KYMO-YC③ (1:4)

KYMO-Ⅲ・KYN-MK 土器写真①



KYMO-Ⅲ·KYN-MK 土器写真②

